

「人間が、天壽を保たんと欲するには、天地陰陽の理に本づいた、合理的な男女の道を行へ」とこふことになるのである。この原理は、何れの「房經(房中術の經典のこと)を略して、房經といつて置く、以下これに倣ふ」にも、掲げられて居ることである。もう一つ房經を引用補足して置く。「洞玄子」に曰く、

「夫れ天、萬物を生じ、唯人最も貴し。人の好むところは、房欲に過ぐるは莫し。天に則り、地に象り、陰に規り、陽に矩る。其の理を悟る者は、則ち性を養ひ輪を延ぶ。其の眞を慢る者は、則ち神を傷り壽を天す」

この意味はいふまでもなく、天は萬物を生じ、人間は萬物の長で最も貴い。その人間の好むところは欲望(この場合は色欲を指す)に越すものはない、そこでこれを行ふには、天地の理に本づき、陰陽の方則に従はなければならぬ。その理を守る者は、健康長壽を得るが、その道を守らぬものは、衰弱して壽命を縮むるやうになるといふのである。また「素女經」にも之と同様のことをいつて居る。「彭祖曰く、精を愛し神を養ひ、衆薬を服食すれば長生を得べきも、然れ共交接の道をしらざれば、薬を服するも益なきなり。男女相成るは、猶ほ天地の相生の如きなり、天地は交會の道を得たり、

故に終竟の限なし、人は交絶の道を失ふ、故に夭折の漸あり、能く漸傷の事を避け、而して陰陽の術を得れば則ち不死の道なり。」
これを見ると、如何に神氣を養ひ、多くの秘薬を用ゐても、交接の道が伴はねば、長生し得ぬことになる、天地の悠久なるは、天地に交會の道があるからである。男女の相成るは、恰も天地が相生するに等しいのであるから、人間も天地陰陽の理に本づかなければならぬといふのである。

2. 合理的性交は補導の術に據ねばならぬ

然らば、その「男女の道」といひ、「交接の道」といひ、「陰陽の術」といふことは、どんなものかといふに、これは其の方法を説いた「房中の方伎」のことである。正しくいへば「房中補導の術」といふのである。これを單に「房中の術」ともいつて居るものがあるが、私が本書で説く養氣、方伎、薬餌の三項を總稱した「房中術」と混同するをそれがあるから、本書では、これを「補導」とか「方伎」とか單獨の熟語を用ひて混合を避ける。

「天地陰陽の理に本づく男女の道」を行ふには、是非とも、房中術に於て定められたる、一定の方伎に據らなければならぬことになつて居る。その方伎に従つてこそ、初めて「合理的」となるのである。「抱朴子」に、

「凡べて千種の薬を服し、三種の美味を以て自ら養ふも、房中の術を知らざれば、何等の益なし」と断言して居るのはこの理をいつたものである。而して更に進んで、

「玄素〔玄女と素女〕は、之を水火に喩ふ。水火の人を殺し、又た人を生かすは、能く用ふると、用ひざるとに由るのみ、都てその要法〔房中補道の術〕を知れば、女を×××こと多多益々善し、如し其の道をしらずして之を用ふれば、一二人を×して、すでに死を速くに足るのみ。是れ彭祖の法の最要なる者なり。その他の経は、多く煩勞にして行ひ難し、その益も亦書にいふ如くならず、能く之を爲す者少なし、而して其の口訣數千言あり、之を知らざれば、百薬を服するも、長生を得る能はざるなり」

と述べて居る。「玉房指要」にも、彭祖の言を假つて次の如くいつて居る。

「黄帝千二百女を×して登仙す。俗人は一女を以て命を賤ふ。知ると知らざると豈に遠からざる耶。

其の道を知る者は、女を×××多からざるを苦しむのみ」

そこで以上擧げた經典の教へを煎じ詰めてみれば、要するに、

「房中補導の術さへ知つて居れば、度々女に接觸してもよい。多ければ多いほど益々善い。黄帝は千二百の女に接して登仙して居る。」

といふことになる。さうすると、當然茲に起る疑問は、正道房中術の要諦第二項の「色欲を慎む」といふことに、反するではないかといふことであるが、それには抵觸しない、なぜならば、

「房中術に於ける『色欲を慎む』といふことは、『××を泄すか』『泄さぬか』といふことであるから、女に接觸しても、××さへしなければよいのである。手取早くいへば、××をすることが、色欲を慎まぬことになるのである。」

斯く説明すれば、更に疑問が起るであらう。それは、女に接觸して××せぬとは可笑しいではないかといふことになるが、それは房中術からいへば、なんでもないことである。

「度々接觸して、×を泄さぬところに、房中補導術の要訣があるのである。これを『閉固の術』といふ。この術さへ會得すれば、誇張していふと、黄帝の如く千二百の女に接しても、身を害はず、反

つて身體を保全して、不老長生の境涯に達し得るのである。」
その奥義は後で説くが、本書が「秘話」と題せしは、斯ういふ衆人未知の秘法を説くからである。

3. 何故に合理的性交を行はねばならぬか

「人間は、何が故に男女の道を行はねばならぬか」
「人間は、何が故に合理的性交の本題に入るのであるが、其の前には是非とも説いて置かねばならぬことは、

といふことである。それから究めてかからねばならぬ。房中術で、これを平易に簡単に解釋すると、
「人間が男女の道を行ふは、子孫を得んがためである。何が故に子孫を得なければならぬかといへば、人間が天帝（造化神）より享けた血は、永劫に盡きぬのである。だから人間は自分一人のみの身體ではなく、祖先より子孫に及ぶ生命の連鎖である。そこで祖先より承けた血はこれを子孫に傳へねばならぬのである。それは天帝より生を享けた人間が、神に對する當然の義務である。」
我々は、この天帝に對する、人間として當然行はねばならぬ義務、即ち「天職」を果たす爲めに、

男女の道を行ひ、血統を子孫に傳へるといふことになる。そこで、男女の性交は、絶対に神聖でなければならぬことになつて來るのである。而して、

「我々祖先が、天帝より享けた血は、純淨潔白であつた。この純血を傳へるには、行を正うして男女の關係は神聖でなからねばならぬ、男女の道を行ふに當つては寸毫の不純があつてはならぬ」
ことになるのである。なかなか面倒である。それが、更に進んで、

「故に、人そのものの發生する根源を純淨にしなければならぬ。儒教では子供が腹の中に居る時から教育せねばならぬとして「胎教」といふのがあるが、房中術では、一層進んでお腹の中へ出來てからではいかぬ。お腹に出來るその時から、更に逆つて其の出來る前の豫備行爲から、尙逆つて其の出來る本具から純淨にしてかからねばならぬ」

といふことになる。「子供を作る本具」、これは説明するまでもないが、茲に於て、「生殖器崇拜」の思想が生れて來たのである。何れの民族でも、生殖器を崇拜した歴史を持つて居るものだが、支那の道家の如き考のもとに、性の根元を崇拜した種族は、他に無いやうである。これを人間の根元に溯り、永遠無限に涉るところに徹底味がある。

4. 生殖器はどういふわけて崇拜されたか

道家の「生殖器崇拜」に就て、現在の支那の道士は、どういふ風に解釋して居るかに就て、得難き材料がある。それは前にも引用した曉星氏著の「長生久視」の中に記されたる、道士と曉星氏との問答である。参考のために掲げるに過ぎないから、必要のない人は、次の項へ移つて戴きたい。記述は曉星問ひ、道士答ふ。

「個人が長生久視を得る爲めには、何ういふ努力を要するのですか」

「人間が長生久視を得るには、其の生を完全に守らなければならぬ。其の生を完全に守るには、其生の因つて来る根源を知らなければならぬ。生は其人個人の私有ではない。之を精神的と肉體的に分けて考へませう。元來道教では、精神と肉體を一元に取扱つて居るのですが、これも便宜の爲めに暫くさうしませう。今我國(支那)の思想が、生といふものを何う考へ、また其生を完全に守る所以に就いて、どういふ研究を發達せしめたかといふことを考へる前に、私は我國の古い思想は、生殖器

崇拜教から導かれたものであるといふことを、論じて見たいと思ふのです。」

「それは面白い御論です。是非拜聴致したいです」

「生殖器崇拜といふことは、世界各国殆ど何處にも存在した。初め我國にはさういふ痕跡が無かつたやうに思はれたけれど、近來其の實證が英國の學者等に依つて提供されて來たのでありますが、私はそれは何よりも我國の古い思想の上に、明白な痕跡を持つて居るといふことを申すものです。」

「其の例を御話し下さい。」

「支那の古い思想といへば、矢張り道教、儒教の根源となつたものですが、例へば易とか道德經といふものの中には、否道德經、それ等全部が、生殖器崇拜の理論化と見るべきものです。」

「其の理由は……」

「元來生殖器崇拜といふやうな、奇怪な事が原始社會にどうして生じたか、それに就いては種々の説がありますけれど、私は斯う考へるのです。人間が最も恐怖を感じたものは何であるかと云へば、勿論死である。而して死といふものは不可思議で、死の先きといふものは何うしても考へられない。唯極めて恐ろしい死の神といふやうなものを想像するのである。而して其の死の神に對抗する者を求め

て、生の神を發見したのである。其の生の神として具象せられたのが、生殖器の形體を以てした生殖器崇拜の本體である。前者を凶神とし、後者を吉神とし、吉神の威力を以て凶神を追拂はうとしたのである。」

「日本の花柳社會などに、今でも春畫を携帯することを魔除けと信ずる思想がありますが、それと同じ傾向なものでせう。」

「そうでせう。兎に角、斯くして生殖器崇拜といふことは人間社會の一つの儀式のやうになつて來たのですが、人智の段々進むに連れて、其の奇怪なる形體は、漸次取去られて、其れに代つて思想的の説明が起つて來た。支那の古い思想たる、陰陽の觀念がそれだと思ふのです。陰陽とは、男女兩性の生殖器の表號です。老子には「道一を生じ、一二を生じ、二三を生じ、三萬物を生ず、萬物は陰を負ひて陽を抱く」とあり、易(易經)は云ふ迄もなく、陰陽を本としての哲理である。易も老子も本は同一の思想から分れて來たものではないかと思ふのです。其れに就いては、私は少しく詳しく論ずるつもりで、今起稿中ですが、單に老子や易經の中から、生殖器關係の文字を拾ひ出しただけでも、如何に是等の思想が、生殖器崇拜の理論化であるかといふことを看取することが出來ます。」

「それは如何にもそうでせう。私も老子を讀む毎に男女關係から、宇宙原理を推論したものであると思はぬことはありませんでした。」

「そうです。古い時に於て人生又は宇宙の原理といふものを考へるに、男女關係から推論をするといふことは、私は最も確實な最も手近な方法であると思ふのです。何となれば、如何なる、實驗でも、其の外形を観察するのみであるが、人間自身の男女關係のみが内觀を爲し得る。男女の關係に現はれた不可思議な作用を思議することが、宇宙の秘密を發く最も有力な關鍵である。古い時代に於てそれが執られたことは賢いことであると思ふのです。また易に至つては陰陽の組合せを以て吉凶の判斷をする。生殖器崇拜が、吉凶の判斷をするに伴ふことは、死神が凶神、生殖器神が吉神なる關係から當然來る所で、そうして之が進んで理論化する時、易の原理を生じたといふことは、極めて順序的の發達です。易はもう全部が陰陽の組合せである故に、後世其の原理を解釋するに當つても、生殖器關係の文字が、如何に露骨に使用せられてあるか御覽になればわかります。勿論、何處の思想でも同様傾向はあるのですが、我國の思想に於ては、他の神怪なものは殆ど生ぜずして、此生殖器崇拜から直に、陰陽哲學を生じ、而して之が儒教となつても、道教となつても、皆人生至道の問題に、其の理

論と應用とを集注したのは、他の民族と聊か異なる所で、之を高尙でないといふと云へば高尙でないかも知れぬが、之を人生の至道と云へば至道であると思ふのです」

「それは中華の土地が、氣候温和、土地豊饒、人類の繁殖に最も適當な大陸である所から、自然こゝにいふ思想を養はしめたもので、之が人生の實際的思想で、他の徒らに空遠幽奥を誇りとする宗教哲學の如きは、寧ろ不具的といふべきでせう」

「それが一利一害でして、餘りに土地の豊富人類社會の繁榮であつたことは、我國人の思想を俗化させて了つた、俗化は即ち墮落、總て今日の如き醜惡を來した譯ですが、唯道教は少數ながらも、是等俗社會と離れて全く別種の首途を進んで來た一種族を、其の中に保存したので、此點に於ては所謂神仙の徒も無用とはいへません。」

以上は、其の一節を轉載したに過ぎぬが、これを以て觀れば、道士の生殖器崇拜觀が大略わかるのである。しかし未だ、私は前に總括して述べた、房中家の生殖器崇拜の根本の原理に就ては遺憾ながら觸れて居らぬやうである。しかしこの道士は「人間は雙棲によつて初めて仙を得べし」と稱し、立派な妻君を持つて居る點などは、餘程人間味があり、道の眞髓を會得したものといふべきである。

5. 『保精』と『慎色慾』の秘訣

愈々具體的説明に移ることにするが、事男女の性的行爲に關するので、露骨に書くことは、今日の本の出版法では許されない。そこで、廻りくどく説明しなくてはならぬのは、筆者の甚だ遺憾とするところである。しかし、私は序文にも述べたやうに、本書を出版の目的は、風俗頹敗の今日、「神聖なる男女の道を」説かんとするものである。毫も邪心なく、徹頭徹尾良心的記述によつて、千古未開の養生術を普及して、國民保健の一助にしたいと思ふのであるから、或程度までの説明は許して貰へるものと信じて筆を進める。しかし己むを得ぬものは伏字とした。

合理的性交に就て、道家では「保精」と「補精」の二つに分けて居る。先づ順序として「保精」から片づけて「補精」に及ぶ。然らば、「保精」といふことはどんなことかといふに、

「保精」とは、(イ)單に、精を保つて泄さぬといふことではなく、(ロ)無闇に泄さぬといふことである。さうすると(ハ)法に叶つてさへ居れば泄してもよいことになるのである。

これを以て、房中術では、色慾を慎むといふことになるのである。然るに、從來半可通の房術家は理窟なしに、色慾を慎しめば長生が出来るかと誤解して、正當なる道を踏む、男女關係に於てさへ、頻りにこれを主張して人間を枯渴せしめたのである。「金櫃妙録」の中に、

「生は道の寶なり、人に施せば人を生み、己に留むれば身を生む、身を生んで世を渡るを仙人といふ。人を生めば生の目的を達成して老朽す」

とあるのを、表面から文字通りに解釋したことなどは、大にその誤解を招く原因となつて居るのである。これは濫費を戒めたに過ぎぬ。

漫りに、色慾を慎しみ、情を抑制するといふことは、房中家からいへば、天理に悖ることとなつて人間本來の天分を没却することになるのである。漫りに慎みてはならぬ。漫りに情を抑ふれば、健康を害し、長壽を保てぬ。「抱朴子」も、

「人はすべて陰陽の交を絶つべからず、入しければ、天氣を壅閉ぐの病を致さん、故に幽閉の怨女、流浪の曠夫は、多病にして壽あらざるなり、」

と斷言して居る。徒らに空閑に泣く女、孤獨の放浪者が、多病にして早世するは、今に於ても變りは

ないのである。然りと雖も、また意の赴くが儘に、これを求めてはならぬ。更に同書は、
「然れども、情に任せ、意を肆にすれば、また年命を損ず、唯だそれ節を得て、之を宜ばさば可なり、若し口訣の秘術を得ずして、妄りに之を恃まば、一人として傷殺せられざる者なし」
と戒めて居る。「口訣の秘術」云々とは、言換れば「その秘術を心得ずして妄りに行つてはならぬ」といふことである。その術とは、私が今説いて居る「房中術」に外ならぬのである。正道なる房中術さへ心得、これに本づけば、精を保つも、またこれを泄すも、自由自在である。

6. 房中術の主眼と色慾の保養

さうすると「房中術」の主眼とするところはどういふことであるかといふに、これを煎じ詰れば、次のやうなことになるのである。

「人間といふものは、情の動物である、本能の動くところは、何物を以てするもその慾火に打克つことは出来ないものである。そこで強いてこれを抑壓するといふことは、精神上には勿論のこと、肉

體の上にも非常に害がある。決して益はない。さりとて情の趨くところ、本能の動くがままに放縱淫恣にして、徒らに慾望を満足させんとする時には、身體を毀し、生命を損することになる。故に情の人間である以上は、自然に起つて来る情は餘りに抑制せず、本能の動くにまかせてもよい、しかし正しい法に従はねばならぬ。而して精氣を損することなく、寧ろ身體を補益して長命延壽を得るの道を研究せねばならぬといふのである」

これが、房中術の主眼である、この心得を以て男女の道を行へば、不老回春疑ひなしである。

支那の房中術を、徹底的に研究し、これを平易に簡単に説明してゐるのは、貝原益軒であるが、その著「養生訓」の中の「慎色慾」の一篇は、實に男女和合の聖典といつてもよい名著である、その中にも「保精」に言及して「色慾の保養」に就て述べて居る。

「素問に、腎は五臓の本といへり。然らば、養生の道、腎を養ふ事を重すべし。腎を養ふ事、薬補をたのむべからず。只、精氣を保ちてへらさず、腎氣をさめて動すべからず。論語に曰く、わかき時は、血氣方に壯なり、之を戒しむる色に在りと、聖人の戒め、守るべし。血氣さかんなるにまかせて色慾をほしいままにすれば、必らず先づ、禮法をそむき、法外を行ひ、耻辱を取りて、面目をうしな

ふ事なり、時過ぎて、後悔すれどもかひなし、かねて後悔なからん事を思ひ、禮法をかたく慎しむべし、況や、精氣をつひやし、元氣をへらすは、壽命をみじかくする本なり。おそるべし。年若き時より、男女の欲ふかくして、精氣を多くへらしたる人は、生れつきさかなれども、下部の元氣すくなくなり、五臓の根本よわくして、必ず、短命なり。つつしむべし。飲食男女は、人の大欲なり。縱になりやすき故、此の二事、相かたく慎しむべし。是をつつしまざれば、脾胃の眞氣へりて、薬補食補のしるしなし。老人は、殊に脾胃の眞氣を保養すべし。補薬のちからをたのむべからず」

7. 貝原益軒が説いた房事の要諦

以上で、第二項の「合理的性交」の内、「色慾を慎む」といふ理由がお解りになつたと思ふから、今度は進んで、然らば「その程度は、どのくらゐなるものであるか」といふことに就て、述べてみたいと思ふが、これに就いて、忌憚なき記述を許すならば、詳述することが出来るが、遺憾ながら、それが出来ないで、現在の通行本で、一種の醫書として、また教訓書として、當局も獎勵せる書籍があ

るから、その書を引用して、それが解釋を試みることにする。それは前にも引いた、貝原益軒の「養生訓」である。益軒先生は、人も知る大學者である。性來虛弱であつたが、支那の房中術を研究實行してから壯健となり、晩年は日本國內を遊歴し、八十三歳にして逝去した。この「養生訓」は、實に八十二歳、死の一年前の力作であるから、謂はば實驗に基づく房事の要諦である。貴重なる文獻といふべきである。私が新に説いてもこれ以上の説明は難かしいのである。以下原文の儘掲ぐ、

男女交接の期は、孫思邈が千金方に曰く「人年二十の者は四日に一たび泄す。三十の者は、八日に一たび泄す。四十の者は、十六日に一たび泄す。五十の者は、二十日に一たび泄す。六十の者は精をちぢてもらさず。もし體力さかんならば、一月一たび泄す。氣力すぐれて盛なる人、慾念をおさへて久しく泄さざれば、腫物を生ず、六十を過ぎて慾念おこらざれば、とぢてもらさず。わかくさかんなる人も、もし、能く忍びて、一月に二度もらして、慾念おこらざれば、長生なるべし。今、案するに、千金方にいへるは、平人の大法なり。もし性虛弱の人、食すくなく力よわき人は、

此期にかかはらず、精氣ををしみて交接まれなるべし。色慾の方に心うつれば、あしき事くせになりてやまず。法外のありさま耻づべし。つひに身を失ふにいたる、つつしむべし。右千金方に、二十歳前後をいはざるに、意あるべし。二十以前、血氣發生して、いまだ堅固ならず、此の時しばらくもらせは發生の氣を損じて、一生の根本よわくなる。

わかく盛なる人は、殊に、男女の情慾かたく慎しみて、過すくなかるべし。慾念をおこさずして、腎氣をうごかすべからず。房事を快くせんために、烏頭附子等の熱藥のむべからず。

達生録曰、男子年いまだ二十ならざる者、精氣いまだ足らずして、慾火うごきやすし、たしかに交接を慎しむべし。

孫真人が千金方に、房中補益説あり。「年四十に至らば、房中の術を行ふべし」とい、其説頗る詳なり。其大意は、四十以後、血氣やうやく衰ふる故、精氣をもらさずして、只、しばらく交接すべし。如レ此すれば、元氣へらず、血氣めぐりて、補益となる」といへる意なり。ひそかに、孫思邈がいへる意をおもひみるに、四十以上の人、血氣いまだ衰へずして、稿木死灰の如くならず、情慾忍びがたし。然るに、精氣をしばらくもらせば、大に元氣をつひやす故、老年の人に宜しからず。ここを以

て、四十以上の人は、交接のみしばくにして、精氣をば泄すべからず。

四十以後は、腎氣やうやく衰ふる故、泄さざれども、壯年のごとく精氣動かすして滯らず。此の法行ひやすし。此の法を行へば、泄さずして、情慾はとけやすし。然れば、是、氣をめぐらし、精氣をたもつ良法なるべし。

「四十歳以上、猶血氣甚衰へざれば、情慾をたつ事は、忍びがたかるべし。忍べば、却て害あり。もし、年老いてしばくもらせば、大に害あり、故に、時にしたがひて、此の法を行ひて、情慾をやめ、精氣をたもつべしとなり。

是によりて、精氣をつひやさずんば、しばく交接するも、精も氣も少しもれずして、當時の情慾はやみぬべし。是、古人の教、情慾のたちがたきをおさへずして、精氣をたもつ良法なるべし。

人身は、脾胃の養を本とすれども、腎氣堅固にしてさかんれば、丹田の火蒸し上げて脾土の氣も亦、溫和にして盛なる故、古人の曰、補脾補腎如補腎。若年より精氣をしみ、四十以後、精氣をたもちてもらさず。是、命の根源を養ふ道なり。

此の法、孫思邈後世に教へし秘訣にて、明らかに千金方にあらはせども、後人、其の術の保養に益

ありて、害なき事をしらす。丹溪が如き大醫すら、偏見にして、孫真人が教を立てし本意を失ひて信ぜず、此の良術をそしりて曰、聖賢の心、神仙の骨なくんば、未、易爲。もし房中を以て補とせば人を殺す事多からんと、格致餘論にいへり。聖賢神仙は、世に難有ければ、丹溪が説の如くば、此の法は、行ひがたし。丹溪が説、うたがふべき事猶多し、才學高博にして、識見偏僻なりと云ふべし。情慾をおこさずして、腎氣動かざれば、害なし。若、情慾をおこし、腎氣うごきて、精氣を忍んでもらさざれば、下部に氣滯りて瘡癩を生ず。はやく温湯に浴し、下部をよくあたゝむれば、滯れる氣めぐりて、鬱滯なく、腫物などのうれひなし。此の術、亦、知るべし。

益軒先生のこの要諦は、實によく纏めて盡されて居る。これによると、

(一) 男女の交接の期を、千金方の説を取つて各年齢によつてその度数を示してある。しかし、これは「平人の大法」と附記してある。普通の人の標準を示したので、身體虚弱の人は、また別に方法を講ぜねばならぬとある。

(二) 年若き男女の情慾を慎しむべきことを教へ、決して烏頭附子の如き、催情藥を飲むべからず

と戒めて居る。

(三)孫思邈の「千金方」による「房中補益説」をとつて、人、四十に至らば「房中の術」を行へと説いて居る。

これに就て、次に詳しく説明を試みることにする。重ねていつて置くが、本書は、聖賢が説いた「人道攝生」の大法を述べて、國民保健の一助にせんとするより他意ないが、しかし、事、男女の關係に及ぶので、現代出版法としては、露骨なる記述を許されないから、勉めて露骨なる字句を避け、改變の出來ぬ文獻の場合には、已むを得ず、伏字にした。この點は讀者の諒承を願ひ、尙これ以上踏込んで研究せんとする人は、最後の「筆者より讀者へ」の一文を御覽の上、直接御問合せあれば、私信を以て御答する。

8 年齢強弱によつて交會の度数が違ふ

單に「色慾を慎め」といつても、どの程度まで慎まねばならぬのか、其の標準がわからぬ。私か

各處で、總括的な講演をすると、よくこの一事に就て質問を受けるが、人には生れつき強弱があつてこれを定むることは至難である。貝原益軒も、此點に就て相當苦心したと見えるが、結局、孫思邈の「千金方」の説を採つて、男女交接の期を示して居る。これに據ると、

「二十歳以下は精氣定らず、慾念を抑へねばならぬ。二十の者は四日に一度。三十は八日に一度。四十は十六日に一度。五十は二十日に一度。六十は體力盛んなる者は月に一度。六十以上の者は、男女の道を絶たねばならぬ。」

ことになる。しかしこれは「平人の大法」即ち、普通の體質をもつて居る者の、大體の標準を示したに過ぎない。體質「虚弱の人」は、これ以下に慎まねばならぬことになるのである。

この「千金方」の説は、原書を見ると、劈頭に「素女法」の三字が冠してあるから素女の説であらうが、茲に矛盾して居ることがある。それは「素女經」に、「玉房秘訣」を引いて、

「黃帝、素女に問ふて曰く、道の要は、精を失んと欲せず、宜しく液を愛すべきものなりとすれば、子を求めんと欲するには何たび寫し得べきや。素女曰く、人には強弱有り、老壯有り、各々其の氣力に隨つて強快を欲せざれば、強快損するところ有るべし。故に、男十五の盛なる者は一日に再び

年 齢	千金方の説	玉房祕訣の説		同上一説
		強き者	弱き者	
七 十 歳	六十以上は禁慾	三十日に一度	禁 慾	
六 十 歳	三十日に一度	十日に一度	二十日に一度	禁 慾
五 十 歳	二十日に一度	五日に一度	十日に一度	五日に一度
四 十 歳	十六日に一度	三日に一度	四日に一度	四日に一度
三 十 歳	八日に一度	一日に一度	二日に一度	三日に一度
二 十 歳	四日に一度	一日に二度	一日に一度	二日に一度
十 五 歳	二十歳以下禁慾	一日に二度	一日に一度	

施すべし。瘦たる者は一日に一たび施すべし。年二十の盛なる者は、一日再び施し、羸せたる者は一日一たび施す。年三十の盛なる者は一日一たび施すべし、劣れる者は二日に一たび施す。四十にして盛なる者は三日に一たび施し。虚き者は四日に一たび施す。五十にして盛なる者は五日に一たび施し。虚き者は十日に一たび施すべし。六十にして盛なる者は十日に一たび施し、虚き者は二十日に一たび施す。七十にして盛なる者は三十日に一たび施し、虚き者は寫せず。』

『又云ふ。年二十は二日に一たび施す。三十は三日に一たび施す。四十は四日に一たび施す。五十は五日に一たび施す。年六十を過ぐれば復た施寫する勿れ』

とある。後者の『又云ふ』以下は、同じ素女經にも、記載するものと、登載せぬものとがある。これを觀ると、前の『千金方の標準』と餘程違つて來る。今試みにこの三説の差異を表を、以て示せば次の如くなる。

私はこれに就て、支那各地の斯道の達人に訊してみたが、何人も明答を與へてくれぬ。山西省の大同府に「劉基業」といふ、本年百二十八歳にして、尙ほ壯者を凌ぐ房中家が居る。その人を訪ふて致を受けたが、劉氏は、

「人には強弱がある。己を知るは、己にしくはない。自ら工夫を凝らさねばならぬ。他人の定むべきものではない」

といつて居た。全くさうだと思ふ。人各々、自身の體質を考慮して、その何れかを撰ぶべきである。尙ほ「養生要集」には

「道人劉京云ふ。春天は三日に一度び精を施すべし。夏及び秋は、一日に再び精を施すべし。冬は精を閉して施すこと勿れ。夫れ天道は、冬は其の陽を藏す。人能くこれに法れば、長生し得べし。冬一を施すは、春の百に當る。」とある。これも亦天地陰陽の理にかなつた一説である。

9 四十以上の者が必ず心得ねばならぬ秘法

次に、前掲の「養生訓」の中に、同じく孫思邈の「房中補益の説」を採つて、「年四十に至らば、房中の術を行ふべし」とて、其の大意を述べて居るが、その中に

「四十以後、血氣やうやく衰ふる故、精氣をもらさずして、只しばしば交接すべし、此くの如くすれば、元氣へらず、血氣めぐりて補益となる」とあり、また

「四十以上の人は、交接のみしばしばにして、精氣をば泄らすべからず。四十以後は腎氣やうやく衰ふる故、泄さゞれども壯年のごとく精氣動かすして滯らず、此法行ひやすし。此法を行へば泄さずして情慾は遂げやすし。然れば、これ氣をめぐらし、精氣をたもつ良法なるべし」

とある。この二例は、結局同様の意味となるが、茲に不可思議ともいふべきは、「精氣をもらさずして、只しばしば交接すべし……交接のみしばしばにして、精氣をば泄らすべから

す」といふ一事である。養生訓にも、これに對する具體的な説明がないので、表面の文字のみで解釋しても、どうしても、解らぬ。私が講演の都度、多數の聴講者から、必ず「そんなことが出来る筈がないぢやありませんか」と、殿しい質問を受け喰つてかゝられることがある。しかし、これは、其の方法さへ心得ればなんでもないことである。而もこの方法は、房中術の眞髓ともいふべき最も緊要なことになつて居る。これを心得て置かねば、四十以後になると、精氣徒らに枯缺して、不老長生を得ることができぬことになるのである。

この方法を、房中術では「閉固の術」といふのである。これに就ては、後に解釋するが、その前に貝原益軒が、これを養生訓に、織り込んだ「千金方」の原文を掲げることにする。さうせねば、後の説明が徹底せぬのである。「千金方」二十七卷に曰く

「人、年四十已下、多くは放恣なり。四十已上頓に氣力一時に衰退するを覺ゆ。衰退既に至れば衆病蜂起す。久しうして治せざれば遂に救はれざるに至る。彭祖曰く、人を以て人を療すと、故に年四十

に至れば、須らく房中の術を用ふべし。夫れ房中術は其道甚だ近し、而して人能く行ふ莫し。其法、一夕十人×××も閉固するのみ。此れ房中術畢る矣。之に藥餌を兼ねて四時絶やさざれば、則ち氣力百倍して智慧日に新なり。此れ方の術なり。淫佚を務めて苟くも快意を求めんと欲するに非ず。務めて節欲を存して以て養生を廣むるなり。亦苟くも身力を強くし、女色を幸し、以て情意を縱にせんと欲するに非ず。補益以て疾を遠るに在るなり。此れ房中の微旨なり。是を以て人年四十已上、即ち房中の藥を服すれば皆、以て禍を招く、之を慎め之を慎め。故に年未だ四十に満たざるものは、與に房中の事を論ずるに足らず。貪心止まず、兼ぬるに補藥を餌すれば、力を倍して房を行ひ、半年に過ぎずして精髓枯渴し、たゞ死に向ふや近し、少年極めて之を慎むべし」

10 房中術の眞髓「閉固の術」

一體「閉固の術」とはどんなことかといふに、これを便宜上左の三項に分けてみる。

(一) 交接して×を泄さぬこと……文字通りのことを行ふのである。其の方法は、前に述べた「調息

の法」の、息を吸ふのと同様の氣持ちで、「送精」する。さしてこれを外に泄さず、内に保つのである。これを「保精不泄の法」といふ。

(二) Xを泄さぬのみならず、これを元に還すこと……前項の保精を、元に「還精」するのである。其方法は「調息の法」の息を還すと同様である。これに、單に還精するのみでなく、女のXを採取することが伴ふ。これを「採陰補陽術」といふ。

(三) 性交をせず、單に女に接觸すればよい……文字通りのことをするのである。その方法は數種あるが、これを「接補」とも「青春煖房回春術」ともいふ。西洋でいふゲロコミケー(處女回生術)のやうなものである。

何れも後で詳説するが、この「閉固の術」は、なかなか修養と訓練を要するのである。孫思邈は、「これ上士にして智ある者にあらざれば行ふ能はざるなり」といつて、智ある上士は、これを行ひ得るとして居る。之に反し「丹溪」(元の大醫朱震亨、丹溪と號す)に至つてはこれを至難のことと見て居る。其著「格致餘論」に

「聖賢の心、神仙の骨なくんば未だ爲し易からず、若し房中を以て補ひとせば、人を殺すこと多から

ん」

と、房中術を疑つて誹つて居る。これに對しては、前に掲げた如く、貝原益軒は、其著「養生訓」に於て

「丹溪が如き大醫すら、偏見にして孫真人が教へを立てし本意を失ひて信ぜず、この良術をそしるは識見偏僻なり」

と反駁非難して居るところを見ると、これ等の方法は、不能のことでないと思はれる。その記述の絶對的なるに徴しても、益軒は、これを自ら實行したものと思はれる。修業すれば、實際能き得るのである。決して邪道ではない。

11 保精不泄の秘法と「送精」「還精」

「閉固の術」の第一及び第二の「送精」と「還精」即ち「保精不泄の法」とは、どうすればよいかといふに、「千金方」にも書いてあるが、抽象的であるから、これを便宜上「佛典」に據ることとし、加

ふるに西藏で行はれて居る、著しい事實を借りて説明したいと思ふ。先づ

(A) 送精する時………

(イ) 恰も調息の法を行ふが如く、精を頭の上から發出するやうな気持ちとならねばならぬ。斯くてそれが「口」の處へ来た時が「一善天の境涯」となるのである。

(ロ) 口から降つて「胸」の處まで来た時が「二善天の境涯」となるのである。

(ハ) 胸から降つて「臍」に來た時が「三善天の境涯」となるのである。

(ニ) 臍から降つて「陰初」に達した時が「四善天の幸福」を感じる時である。これまでは、法に據らぬ普通人でも等しく味ふ快感である。しかし、これまで達しても決してこれを外部に漏してはならぬのである。

(B) 還精する時………

(ホ) それから、逆に精を納めるのである。この場合の快樂は、益々昇進して、それが「臍」に來るを「識處天の幸福」を感じるのである。

(ヘ) 臍から「胸」まで上つて來ると、「非想天の幸福境」に達するのである。

(ト) 胸から更に上つて「口」まで來ると、「非想非非想天の幸福境」に達する。

(チ) それが最後に、口から「頭」へ、即ち送精の發出所へ納めた時は「滅盡完」といつて、これが羅漢にして、佛の境涯に達する時である。斯くして幸福の擧ぎの中に入つて行くのである。

これに要する時間は、普通は三十分くらいであるが、長いになると、二時間も三時間も續けてゐるのである。若し相手の婦人に、修養が缺けて居るやうな場合には、婦人は半年が一年で死んでしまうのが常であるといふことだ。そこで男女兩方が、完全な修業によつて、完全に實行しなければならぬのである。

然らばその修業とはどうすればよいかといふに、要するに「不随意筋」を「随意筋」にする修業である。今日、西藏では、それを實行する教師が居り、人からは「高尚なる徳の所有者」として尊敬されてゐる。しかしほんとうの喇嘛僧で、これを實行しても好いことになるには、三年間の修業を必要とする。三年間岩山の洞窟のやうなものの中に入つて、座禪をやり、不随意筋を随意筋とするのである。この修業さへ経れば、人道を行ふ時に××を一方の體內に漏さずして、更に元に收めることが出来るのである。若し誤つて漏すやうでは、修業が足りないといふことになり、修業の足りない間は、實

行することを許されないのである。

このやうに××を再び元に收むると、その内體的の快樂は、送りもらす時に比べて、更により以上の快感を覺えることが出来るといふのである。果して斯ういふ秘術ができるかどうかといふに、修業さへ経れば決して、不可能でないといふ。日本人で、最初の入藏者として名高い、西藏通の「河口慧海師」は、これを證明して

「それは事實修業さへすれば出来るのです。西藏には、これを會得した教師や喇嘛がいくらも居る。現に私の友達の或る一人の喇嘛が、コップに半分ばかり水を入れて置いて、銀の管の片ツ方をこの中に入れ、片ツ方を××に入れて、その水を自由自在に吸ひ上げたり、又吐き出したりしたのを私も見た。」

と、大正十四年三月、北京に於ける講演で述べて居る。私も、北京城外の喇嘛廟の「黃寺」の喇嘛僧が行つたのを實見した。そればかりではない、先年近くなつた、某老支那通は、北京に在る時、「閉固の術」を修業して、吾々同志の前で、コップの水で實驗したことがある。

12 男女の関事を説いた佛典と漢字の改譯

この西藏に行はれる前述の秘法は「佛典」に據るものだと、前に述べたが、然らば、なんといふ經典にあるかといふに。眞言密教に屬する、左の二經典である。

(A) 「佛説、大悲空智、金剛大教王、儀軌經」

(B) 「佛説、最上根本大樂、金剛不空三昧大教王經」

これを普通に「金剛瑜伽大教經」と稱して居るのではないかと思ふ。この二經典の外にまだ有るかも知れぬが、私は佛典には門外漢であるから解らぬ。

話が脇道に外れるが、門外漢ながら、ちよつと説明して置きたいのは、佛教の經典の中には、男女交會に關する方法まで説いたものがある、これ等の經典を見れば、佛教は一の「淫猥教」の如き感じがするのである。その内容は、茲では書けぬが、最近私は或る團體で秘密講演をした時、その事實を述べると

「佛典には、そんな淫邪な教を説いたものはない」と、抗議を申込んだ人があつた。日本に傳つて居る漢譯の佛典を以て、佛典の全部だと思ひ、それを以て佛敎の全部であると思つて居る人々は、さう思ふであらうが、日本には佛典の全部は傳はつて居らぬ。而も漢譯の經典は「全譯」でもなければ「正譯」でもない。「抄譯」はまだしも「改譯」が多いのである。

元來、支那人は自分の國のみが眞に文華の國であると考へて居て、お氣に召さないことはドシ／＼これを改めオミットすることを憚らない。従つて、支那では澤山の經典が翻譯されて這入つてゐるが驚くべき變革の加へられてゐるものも少なくないのである。中には佛敎そのものの上に、變化を見るやうな場合さへあり、經典のあてにならないこと實に甚しいのである。例へば支那では「釋迦」の「降誕」を四月八日とし、「涅槃」の日を二月の十五日とし、「成道」の日を十二月の八日として居る。日本もこれに倣つて居るが、その實はさうではないのである。釋尊の降誕も、涅槃の日も、成道の日も、三つ共に同日の「四月十五日」である。

印度では、これを嚴守して、今でも此日をチャター（お渡りといふ意）といつて、大假裝行列など

してお祭騒ぎを演ずる。誰でも最初はそんなに同一の日に一致する筈がないと考へ、四月十五日といふことに對して疑ひを持つ、支那人も、矢張り不思議だといふことから、遂にこれを勝手に、三つに分けて造り變へてしまつた。若し三者を同一日にすると、降誕の御祝ひと、涅槃（佛の死）の悲みとを同じ日に行ふこととなる。さうすると支那の風習に合はなくなる。「紅事」即ち祝ひ事と、「白事」即ち佛事とを同時にすることは、支那人としては到底堪えられないことではないのである。そこで勝手に改作してしまつた。これは研究すればする程、明らかになつて來るのである。

こんな調子であるから、支那で漢字に譯された經典の大部分は、譯者の御意に召さない處を、或は削除したり、或は訂正したり勝手に捏ね上げられたものであるといふことが出来るのである。さういふ不完全極る漢譯佛典が、支那から朝鮮を経て、日本に傳はつたのである。惡くいへば「骨抜き經文」で、日本の佛僧徒は、有難がつて居るのである。斯ういふ連中に解るはずがないのだ。

13 邪道佛敎の起原と其の流傳

しかし、男女交會の法を説いた淫猥な佛教は、支那や日本に傳はらなかつたかといふに、さうではない、その一部が傳はつて居る。序に、極めて簡略に其の起原と、傳來の経路を述べて置かう。今日の實狀から見て、西藏がさういふ邪道佛教の根本を爲してゐるかのやうに思はれるけれども、さうではなく、印度に始めて起り、それが西藏に傳はつて、印度で滅びたに拘らず、西藏では益々盛んになつたのである。印度に行はれた頃、支那から印度に留學した僧侶はあまりなく、よしあつても大した僧は行かなかつた爲めに、その奥義に立ち入つたことはわからなかつたもので、従つて支那には、印度に於けるこの佛教は、何等歴史的には傳はつてはゐないのである。

印度に於ては、西曆紀元七〇〇年頃に起つて、それが西藏に入るに及び、八〇〇年から九〇〇年、更に一一〇〇年頃に至つて、最も盛んになつたといはれてゐる。印度に於て、始めて斯うした佛教が発生した當時は、印度の那蘭陀といふ佛教の大學などでは、正しい佛教、正しい密教の教を説いてゐたけれども、もう一つの毘玖羅摩尸羅といふ大學などでは、これが大變な歡迎を受けて、盛んに行はれたのである。

この淫猥な佛教の發生したのは、これが毘玖羅摩尸羅大學に來る前に、カシミールの西ウツヂャー

ナ(花園の意)といふ、氣候の暖かい果物の多い、總べて生活するに自然的に恵まれた處であつた。其處は今でもさうであるが、その當時も、アリアン人種のカシミール系の人間が住んで居り、非常に美人が多かつた。しかも彼等は氣候が暖かいので、常に遊んで暮らしてゐることが出來た爲めに、遂ひに快樂を縱ひまゝにするやうになり、最後に快樂を宗教と結びつけて、理想的に満足せんとし、低行ひを淨化せんとして生れたのが、此の教のそもその起りである。

そして托扞尼天(空行天女といふ意)などといつて、その美人が、秘密の有難いことや、その實行方法などを説いたのである。其の後こゝから教を受けた毘玖羅摩尸羅大學から、更に西藏に傳はり、尙一層盛んに行はれてから、支那や日本にも一部が傳はつたのである。

このやうに、その本元である印度では、一方に那蘭陀大學のやうに、實地の苦しみから脱れて、完全な幸福を得んとして、この教を受け入れないものもあつたが、殊に北部印度などに於ては、毘玖羅摩尸羅大學に依つて、盛んに行はれたものである。本格的な佛教では「方便即究竟」といつて、方便そのまゝが即ち「究竟」であるといつて居るに拘らず、右の教では、目的さへ達すれば、その方法は何んでもよいと説いたのである。然しこれを公平に考へて見るとかうしたことは、佛教では許さるべき

ことではない。方法そのものが眞實なものでなくてはならない。何故かと云へば肉慾の快樂結構である。然し樂を受けると同時に又苦しみを受けることを免れないのである。酒も亦然りである。方便即ち方法そのものが究竟でなくては、眞の佛教といふことは出来ない。佛の云ふ方便そのまゝを守つてゐると、佛になれるのである。印度の亡びたのは、何よりも、この肉慾に依つて人間が弱くなつたことに依るもので、肉慾そのものが、印度を亡ぼしたものであるといふことになる譯である。

14 印度の怪教シャクテイズムの起原

斯ういふ「邪道佛教」は、今でも印度に於て行はれて居る、即ち「シャクテイ教」である。これが支那に傳つたのが「左道密教」で、「喇嘛の秘術」とは、これを實行化したものである。支那の不老回春術と、關係が深いから、これを説明して置きたい。

これは、印度の神話だが………
或時、聖者達が、一堂に集まつた席上で、ブリグといふ聖者が、突然に、

「一體、印度の三大神といはれてゐる、ブラフマと、シヴと、ウイシユヌとは、どの神様が一番偉いでせうか？」
と言ひ出した。

「そりや、ブラフマ（梵天王）が、偉いときまつて居る。」
といふ者もあれば、

「さうぢやない、何といつても、シヴ神（大自在天）に優る神はない。」
と、主張する者もあり、又はウイシユヌ神を推す者もあつて、研究は容易に纏らぬ。さんざ議論を戦はした末に、

「それでは、論より證據、皆してこれ等の神々を、直接に見分して歩かうではないか。」
と、いふことになつて、聖者達は、連立つて廻り出し、シヴ神の宮殿へやつて來た。

早速シヴ神に面接したい旨を侍衛に告げると、侍衛はもぢくして、一向シヴ神に取次ぎに行かうとしない。

「何故、早く行かないのだ。」

と、聖者の一人が、侍衛に催促すると、重さうに足をひきすつて奥へ這つて入つたが、すぐ引返して来た。

「何と申された、お逢ひして下さるのか。」

「は、それが、その、まだお慰みなんで………」

侍衛は言ひにくさうに言つた。

「この眞晝間、まだ憩んでゐられるのか。」

聖者達は驚いたが、ハツと胸に應へることがあつた。それはシヅ神の愛妃は、カーリー女神と言つて、世にも稀な美人であつたからである。

聖人達は「ふふふ」と鼻で笑つて

「この神は落第ぢや、それほどまでにカーリー女神が可愛かつたら、リングとヨニーの姿となつて、人々の尊敬も供養も受けることの出来ない、やくざな者になつてしまふ方が好い。」

散々に罵つて聖者達は歸つて行つた。

が、一方シヅ神の方は、居間を出てゐると、玄關の方で何やらわい／＼罵つてゐる聲が聞えるので、

抜き足で近づいてみると、この罵詈譎。

「なに、リングとヨニーになれ、よくも言つた。」

と、カツと逆上して、再度居間へ引返して行つたが、餘りの憤怒に氣でも狂つたのか、カーリー女神と抱合つて横死してしまつた。その時の遺言に

「我等が死んだ後は、リングとヨニーの形を以て祭祀せよ」

と書いてあつたので、それ以來、この兩神は、リングとヨニーを代表する神様になつてしまひ、今日までその形で祀られ、多大の信仰を得てゐる譯である。因にリングとは男性を象徴するものであり、ヨニーとは女性を象徴するものを言ふのである。

人智の開けなかつた太古時代の人間が、リングを神聖視し、これを尊敬した事は、現代の人が想像する以上である。この種の崇拜教は、世界各国に存在し、その昔日本にもあつて、現今、その遺跡が續々と発見される。(中略)此種の怪教で、一番極端な傳習のあるのは、何と言つても、印度のシャクティ教であらう。

この怪教はヨニーを崇拜する教派であるから、これを一般には「女陰崇拜教」といつて居る。その

信徒を「ヨニーチタス」といつて、最も廣く知られた言葉である。この代表神は、前に擧げたシヅ神の愛妃「カーリー」である、カーリーは、正しくいへば「シヤクテイ（能女神）」といふ、そこでその名をとつて宗名としたのである。

15 暗黒の中で無言で行ふ男女の××

シヤクテイ教が、尊敬崇拜する目的物は、頗る露骨なものを好む、寫實的であるものの方が好い。この教派の僧侶は、人工で製作された物を対象としても勿論禮拜するが、それよりも、真正正銘なる本物の方がよいさうである。従つてそのお祭といふのが頗る奇抜である。

先づ一絲纏はぬ裸體の處女を、聖壇の上に座はらせる。その座り方が尋常一様のつゝしまやかな座り方ではいかぬのである。×××を露骨に示さねばならぬのだから、どうしても×××を×かねばならぬ。妙齡の處女が×××を××しても、この日はカーリー女神の御神體を代表するので、神聖なものであるから、基より羞恥のあるべき筈がなく、乙女等は進んでこの役をお受けする。またこの役目

を仰せつかるると一代の名譽となるのである。

斯くの如くにして、處女が聖壇に座ると、その前にはアルガと稱する、舟の狀をした器に、御酒や供物が供へらるる。神官はその前に頓首再拜して、先づこの生きた×××に、心ゆくまでに接吻する供物も總て一應は、この×××に觸れさせる。讀經があつて式が済むと、この供物は信徒に分ち與へられるのであるが、處女のからだにふれた物を押し戴いて喫するのである。それが済むと處女ばかりで組織されてゐる合唱隊のコーラスがあり、續いて狂的な舞踊がはじまるのである。

以上は、大祭日の行事であるが、この他にシヤクテイ教の信徒ヨニーチタスは、毎月一回家族連れで教會に集合する。先づ神壇には、持寄つて來た酒、肉、魚等をゴテゴテに供へる。火の點く頃から御祈禱がはじまつて、それが終ると、供物を下けて、たら腹飲んだり食つたりする。いゝ加減に酔ひ、腹のふくれてから、男女入亂れて舞踊がはじまる。夢中になつて踊り狂ふて居ると、司會者ともいふべき長老が、「頃ぞよし！」と、火を消してしまふ。

それから闇黒の中で、××なる××が×はるる。而も絶対に「無言」でなければ、神の怒りに觸れるといふのだから、式が終つてからでも、このことは絶対に他言せぬことになつて居るので、闇中に

何が行はれたかは皆目判らない。これを經典では「淫を行する」といひ、神様に喜びを供養する意味で行はれるのださうである。

斯うした怪教は、今現に印度の到る處で行はれて居るが、ペレナスが殊に盛んだといふことだ。元來シブ神は、西藏の高山カイラス山から、印度のペレナスに移住して來たもので、シブ神の教へが、祕密教の根本となつて居るから、その發祥地ともいふべきペレナスで隆盛を見るのは當然である。尤もヨニー崇拜の風習は、印度に限つたわけではない。凡そ三千年前の昔と稱せられて居るトロイの古都からも、色々なヨニーの土偶が發見されたところをみると、他の地方に於ても、古くからこれが行はれて居ることが解るのである。

16 左道密教と立川流の即身成佛

西藏は、印度に接觸して居るだけ、佛教が盛である。「喇嘛教」といへば、特別變つた宗教のやうに見えるが、手つ取り早くいへば、西藏化した「佛教」に過ぎない。そこで佛教と同様に「顯教」と「密

教」とに別れ、「密教」にも「正」と「怪」との二系統がある。近頃の學者は、これを「右道」と「左道」と名づけて居る。右道は、純真正統の密教であり、左道は、不純、不眞、不正統の密教である。

左道は、烏伏那國のバツドマ、サンバハーバ(蓮華生)によつて開かれたと傳へられて居る。肉は食ふ、魚は食ふ、酒は飲む、人の爲すことは何でも行ふ。「印」を結ぶことによつて成佛する方法を講じて、和合することを「大印」といつて、色々な方法が研究されて居る。密教は、印度から西藏に傳はり、尙一層盛んに行はれてから、支那や日本にも、その一部が傳へられたのである。支那では、元、明、清の三朝にかけて盛んに行はれ、元朝は、左道密教の爲めに亡んだといはれて居る。

日本には、弘法大師によつて、右道密教が傳へられ、その後、後醍醐天皇の御代に武藏の立川に於て、蓮念といふ坊さんが、左道密教を開き、文覺上人なども熱心に説いた。これが世にいふ。「立川流」である。立川流は、其の後禁ぜられてしまつたが、何にしろ、男女陰陽の道を以て、求道の本義とし、至純な戀愛兩性の温かい抱擁によつて「即身成佛」が出来るといふのだから堪らぬ。その成佛の祕術は、シャクテイ教の經典に等しいものがあつて、今でも密かに信仰し、實行して居る者があるさうだが、その内容の説明は憚る。

17 六十四の方則を科學的に教へた珍經典

このシャクテイ教には、どんな經典があるかといふに、愛經として有名な「カーマ、スットラ」である。カーマは「行淫」または「惡魔」といふ意味、スットラとは「經典」の意である。故に露骨に譯すれば「行淫經」、艶つほくすれば「愛經」ともいふべきである。この經典は三十二法の裏表、六十四法の方則が例擧され、これに悉く科學的説明が附してある。この教派では、總てかうしたことを一の科學と見做されて研究されるのである。この書の内容に就ては、別に出版する「珍藥秘藥」で詳しく述べることにする。

餘りに脇道に外れて恐れ入つたが、もう一つ序に述べて置きたいことは、印度や西藏ではカーマスットラのやうな經典には、露骨に記述されて居る。男×のことを、サンスクリット(印度語)では、「バヂヤラタントラ」といひ、西藏では「ケードルヂエー」。交媾を印度では「ミユートニー」といへるが如くで、一般の常用語と經典とに何等の相違なく隠語などは用ゐてない。

然るに支那譯の經典は、決して露骨な文字を使用せぬ。隠語が使用されて居るから、經典を読む時に説明がなければ、何のことかわからぬことが往々ある。今こゝで思出したものを、掲げて参考に供してみる。

〔男×〕のことを……鉛。鈴。且。玉莖。閉。尿。勢。などと書き。これが通俗的な淫書になると、厩子。東西。子孫釘。小先生。小博士。等がある。

〔女×〕のことを……也。蓮華。王門。開。尸。寶。寶貝。陰戸。方便之門。玄妙之門などと書く。これは一例を挙げたに過ぎないが、其の行爲に就ても、我々には想像も及ばぬ文字が使用して有るので、閨典房經、または淫書の難解となるのである。しかし斯のやうな秘密に屬する事柄は、餘り露骨でなく、説明を要するくらゐに婉曲なのがよいのかも知れぬ。

18 閉固の術を行へばどんな効果があるか

偕て本題に立戻るが、「閉固の術」の「送精」と「還精」とは、ざつとこんなものである。今では支

那在來の方法と、西藏を経て傳來した、印度に於ける左道密教の方法とが、混和して一つの新しい型を作つて居る。元來が殆んど同一な方法であつたから融合したのである。この術が、古代から支那に行はれて居た。これは前にも引用して居るが「列仙傳」に

「容成公は、自ら黃帝の師と稱す。周の穆王に見え、補導の事を善くし、精を玄牝に取る。其の要は谷神死せず、生を守り氣を養ふ。髮白きもまた黒く、齒落つるも又生ず。婦人を×するの術、瀉かずと。蓋し精を還し腦を補ふを謂ふなり。」

とある。容成公のことは、前に述べた如く、黃帝の師である。これが既に、婦人に接するには「瀉がす」を以て祝術とし、瀉がぬとは「精を還す」ことであるといひ、その効果は「腦を補ふ」にありと教へて居る。また「抱朴子」にも、

「人には陰陽の交なるべからず、然れども情を縱にし、欲を恣にして、適度に之を宣ざれば年命を伐る。その術を善くする者は、能く走馬を却けて、以て腦を補ひ、陰丹を朱腸に還し、玉液を金池に採り、三五を華梁に引き、人をして老ゆるまで美色ありて、其の天年を終へしむ。」

「房中の法に、十餘家あり。或は傷損を補救し、或は衆病を攻治し、或は陰を采りて陽を益し、或は

年壽を延ばす。而してその大要は、精を還し腦を補ふの一事あるのみ。この法は、眞人口口に相傳へて、本來之を書に載せざるなり。名藥を服するも、この要を知らざれば、長生を得ざるなり」とある。「抱朴子」のいふところは、人に男女ある以上は、必ず陰陽の交りがなからねばならぬ。しかし情の趨くがままにこれを恣にしてはならぬ、適度に行はねば、天壽を損ふに至る。そこで房中術をよく心得て居る者は、奔馬の如く狂ひ易い情を抑へ、漫りに射精をせず、反つて精を還して腦を補ひ、天壽を保てと教へて居るのである。房中の法に種々あるが、要するに「精を還し腦を補ふの一事あるのみ」と斷言して居る。これが即ち「閉固の術」の送精と還精の秘法である。「この要領を知らねば、名藥を服しても、長生はできぬ」といつて居る。如何に閉固の術が不老回春に必要なかは、この大家の言を以てても知らるるのである。

19 不老回春の謎が解ける

前項に引用した「抱朴子」の中に「玉液を金池に採り」と「陰を采りて陽を益し」とある。これは

どういふことかといふに、「陰を采る」とは、女の××を男が採取することである。(採と采は同じく取る)「陽を益し」は、採取した女の××を以て、男が補益することである。「玉液」とは、女人の××を意味し、「金池」は砕いていへばその製造處といふことである。これが即ち「探陰補陽術」である。要するに、

「還精するには、自ら送つた精を還すのみでなく、女の××をも、採取して共にこれを還して自分の物として了ひ、これを以て陽氣を補ふ」

といことになるのである。さうすると、自分の精を消耗することなく、これを還す時に、相手の物までも採取し得るとすれば、これを度々行ふとも差支ないのである。差支ないのでなく、度々行ふて「不泄」ならば、度々行へば行ふほど補益し、老後の枯渴せんとする陽氣を補ふことが出来るのである。茲に於てか、貝原益軒先生の

「四十以上、血氣やうやく衰ふる故、精氣をもらさずして、只しばしば交接すべし、此くの如くすれば、元氣へらず、血氣めぐりて補益となる」

といふ。萬古不變の不老回春術の、謎が解けるのである。このくらゐに説明して置けば、誰にも解

ることを思ふ。

20 探陰補陽術の内容と秘法

この理がわかつたならば、次に進みたい。然らば、その相手は女でさへあれば、老若を問はず何人でもよいかといふに、それがさうではないのである。「若い女」でなければならぬ。先づ文献を擧げてから説明する。

「彭祖曰く、養生の道、一女を以て之を爲すべからず、三、若くは九、若くは十一を得れば、多々益々善し。其の××を採取して、鴻泉に上して還精せしむれば、肌膚悅澤、身軽く目明に、氣力強盛にして能く衆敵を服す。老人も甘時の如く、若年少勢も力百倍す」(玉房秘訣)

「彭祖曰く(前略)宜しく交接の法を知るべし。法の要は、多く少女を×するにあり、而して數々瀉×する莫れ、人身をして軽く百病を消除せしむ」(素女經)

「青牛道士いふ。數々女を易ゆれば、則ち××し。一夕十人×××××尤も佳し。常に一女を××

れば、女の精氣轉弱し、大に人を益する能はず。亦女を瘦瘠せしむ。(玉房秘訣)

「彭祖曰く、夫れ男子大益を得んと欲する者は、道を知らざる女を×××××。又童女を×××××、顔色亦常に童女の如くなるべし。女の年少からざるを苦しむのみ。若し十四五以上十八九以下のものは益々佳なり。三十を過ぐべからず。未だ三十ならずと雖も、已に産するものは益なきなり、吾が先師この道を相傳ふる者三千歳なるを得、薬を兼ねるものは仙を得べし(玉房秘訣)

これ以上、穿ち得た文献があるが、茲に掲ぐるわけにはゆかぬので略する。ここに引用した經典から推測すると、大體のことは了解されたと思ふ。これを約言すれば

「採陰補陽を行ふには、一×ではいかぬ。出來得るだけ多くの×を相手にせねばならぬ、而してそれは年少にして、未だ××を解せぬもので、×××××ほとよい。恰度×××以上から×××までの×がよい。三十を過ぎてはならぬ、三十ならざるも、已にお産をしたものは益がない」

ことになるのである。そこで前にも一度引用したが、この術を知ると知らざるとは、即ち「玉房指要」劈頭の

「彭祖曰く黄帝千二百の×を×して登仙す、俗人は一×を以て命を賤ふ、知ると知らざるとは豈遠か

らざる耶。其の道を知る者は、女を×する多からざるを苦しむのみ、必ず皆容色の妍麗なるを須つのみならず、年少にして未だ乳を生せず、而して肌肉の多きを得んと欲す。但し能く×××を得ば、即ち大に益するなり」

となるのである。しかし、この術のみではいかぬことは前述した通りで、これには勿論、「神氣を養ふ」ことと「薬餌の力」に據ることが必要である。この術を知らねば「抱朴子」から

「而して俗人は、黄帝が千二百の女子と、天に昇ると聞き、黄帝は唯だ房中の術を以て、長生を致したりとなして、その荆山の下、鼎湖の上に九丹を成就し、龍に乗りて天に登りたるを知ざるなり。されば黄帝の修むる所を行ふて、始めて二百女あるを得べし、唯だ房中の術の結果に非ざるなり」と、俗人扱ひにされねばならぬことになる。

これで「閉固の術」の第二項が終るわけであるが、茲に注意して置かねばならぬことは、女の××といふことは、××その物ではなく、×氣のことである。元氣を肉體以外の大空に求めて、これを以て神氣を養ふと共に、×氣をその肉體に求め、内外よりこれを補ふの謂である。これが即ち前にも引いた「抱朴子」の

「人は氣中に在り、氣は人中に在り。天地より萬物に至るまで、氣を須ちて生ぜざるものなし。善く氣を行る者は、内は身を養ひ外は惡を却く。」
 となるのである。この點は、極めてデリケートなことに屬するが、これ以上深く立つて説明の出來ぬのを遺憾とする。

21 『青春煖房回春術』と『處女回生術』

續いて『探陰補陽術』の第三項に示して置いた「性交をせず、單に女に接觸すればよい」ことに就て説明する。

人間は、年を老ると血氣が衰へる、身體が段々と枯渴する、さうして死んで行くのである。これは天理で、人力を以ては如何ともすることができぬ。何人と雖も、これを避けることは出來ないのである。そこでこの老衰を防ぐために、血行旺盛なる若い男女の「體氣」又は「呼氣」を以て、これを補ふといふ一種の「若返り法」がある。これを「青春煖房回春術」又は「接補」といふ。西洋に於

けるゲロコミケー(處女回生術)と同様である。

その方法は、少女と同寢することである。同寢するのであるが、決して性交をやつてはならぬのである。たゞその血氣盛なる「體氣」や「呼氣」を取り入れるのである。「本草綱目」に、

「醫家の所謂元氣、仙家の所謂元陽、共に同一なり。天にこの氣あらざれば物を生ずる能はず、人にこの氣あらざれば生ある能はず、老人または虛人は、二七以前の少陰と同寢し、その蒸蒸を藉るを最も益ありと爲す。たゞ淫を行つて、以て命を喪ひ、生を促むべからざるのみ。近時の術家、童女をして氣を以て、鼻竅、臍中、精門に入れ、以て丹田に通ぜしむ。之を接補と謂ふ」

とある。文中「虛人」とは元氣虛弱なる人をいひ、「二七以前の少陰」とは、十六以前の少女といひ、「蒸蒸」は、體氣が蒸じて蒸し昇るをいふ。「氣を以て入れる」といふことは、修業して行はれることで、無形の氣を入れるので、有形の物を入れるのではない。

この術は、支那のみに行はれたのではなく、古代ギリシヤや羅馬にも、盛んに行はれたものでこれに關する記録が澤山ある。現に千七百九十八年に書かれたといふ。フーフエランドの名著「長壽術」(Die Kunst des Lebens zu verlängern)の中の「老人攝生法」の一節に次のやうなことが書いてある。

「若い處女に接觸することは、衰弱萎縮した老人を若返らせて長壽させる偉力があるものと、舊約時代のギリシヤ人もローマ人には信ぜられて居た。近代人も亦之を信じてゐる。これを處女回春術といふ。若い乙女の氣息の中に、最も純潔で清新な生命の活力が、包含せられて居ることは、何人も疑はぬことである。この力を以て老人を若返らせ長壽たらしむるのである。處女回春術の有効なることは、若き動物を解剖せる利那の臭氣が、癱痺せる筋肉を興奮させることによつてもよくわかるのである。」

而して、其の方法としては、少女より溫度を與へられる「保溫法」が説いてある。支那の「青春煖房回春術」と、西洋の「處女回春術」とを、斯く比較してみると、結局同一なものであることがわかる。

22 處女回春術を體驗した東西の記録

「青春煖房回春術」を、舊約時代に行はれたことに就て、一つの記録を擧げてみる。それは「舊

約全書」の列王紀略上の第一章に

「爰にダビデ王、年邁みて老い、寢衣を衣するも温らざりければ、其の臣僕等、彼にいひけるは、王わが王のために、一人の若き處女を求めて、之をして王のまへにたちて、王の左右となり、汝の懐に臥て、王わが主を暖めしめんと。彼等乃ちイスラエルの四方の境に、美しき童女を求めて、シユナミ人アビシヤグを得て、之を王に攜きたれり、此童女甚だ美しくして、王の左右となり、王に事たり、然ど之を交はらざりき」

とある。語尾の「然ど之と交はらざりき」が金玉である。此術の眞髓である。

これを俗に「×蒲團」といふ。唐の玄宗皇帝の愛妃で名高い「楊貴妃」の兄の「揚國忠」は、豪奢淫穢、行はざるなしといふ生活をして、歴史にその名を留めて居るが、冬暖氣を取るために、裸體の美女數十人の中に寢てこれを「×蒲團」と名づけた。尤も揚國忠は、その外にも、客を招いて宴を張る時、豊饒なる美妓數十人を盛裝させ、風除けとし、これを「×屏風」といひ。又は肥滿せる美女を左右に侍らして風を遮り、之を「×陣」と呼んで居るなど、皆驕奢より來て居るのであらうが、ダビデ王と同様の處女回春術を行つた者は、史上に多い。

河南に、一富豪があつた。年八十を越しても壯者をしのぐ饒饒で、常に三四人の妾を置いて居た。何れも十四五の美しい乙女で、普通の妾と同様に、老翁と同寝する。それが二十歳になると、老翁は立派な仕度を整へてやり、自ら婿を探して嫁入らせる。貰ふ方は、どうぞ老翁のおさがりと思つて居ると、不思議には何れも處女性を失つて居らぬ、完璧無疵である、これを貰つた婿さんは大喜びで、これを吹聴する。それが一人でない皆さうであつたので、忽ち評判となつて、老翁の徳を讃へる。斯く評判が廣がると、美貌の少女は、競うて老翁の妾を希望する。身體は疵つかずして嫁入仕度が出来るからである。しかし何のために、老翁が斯く巨額な金を費つてまでも少女を集めるのかと、不思議でならなかつた。或人が

「貴老は、少女を集め、しかも同衾して完璧だとは、どういふわけですか」と訊いて見ると、老翁は笑つて、

「わしは年を老つて居るので、獨りで寝ると淋しくてならぬ。そこで若い娘に附合つて貰つて居るに過ぎません、お蔭で長生しさうです」

と答へたといふ。尤も他にも一説あつて、老人は一種の房中の秘術を心得て居て、少女を無疵のやう

に弄んでから後に、嫁入させたのだといふ者もあるが、何れにしても、この處女回生術を行つた者といへるのである。

これを他に求めなくても、日本に於ても、江戸時代の好色本に出て来る「世之介」などは、乙女の××を蒲團に代へたといふので、少女は若返りの泉の如く考へられて居る。伊藤博文公は、殊にこの術を實行された人だと傳へられて居る。常に年若い女が側に附いて居たので、或人がその精力の旺盛なるを賞へたところ、公は

「いや自分は色を好むためではない、劇務鞅掌の身としては、疲勞を恢復し、精氣を挽回するに唯一の方便として、乙女を侍らして居るに過ぎない」

といつて居る。大倉喜八郎男の蔭には、いつも若き美人と巒井が付き纏つたといふ話もある。現にこの法を行つて居る富豪が相當に多いと聞いて居る。處女を澤山使つて暮らして居る實業家などは、老人夫婦でヒツソリ暮して居る人などよりも遙かに若いのは争はれぬことである。小學校の先生が、少年のやうな氣持ちとなり、婦人科の醫師が、知らず識ずの間に、女性化するのと同じの理に外ならぬのである。

23 樹木にも應用する老人若返りの秘訣

老人が幼い子や孫を抱いて寝る。老人は可愛いといふ至情が溢れて同寝するのであるが、老人はこれがために、子供の體氣で、寒さを防ぐばかりでなく、その體氣や呼氣で、自分の老衰枯渴せる血氣を補益して居るのである。さうすると子供は、それがために知らず識らず、親に對し、または祖父母に對し、一種の「孝養」を盡して居ることになる。斯ういふ例は、日本にはいくらかもあることだ。或るお医者さんは、幼童が老人と同寝するのは、其の發育に害があるとして、これが防止に勉めたと聞いて居る。

老人ばかりの中に、一人の少年が加はつて生活して居ると、その少年は發育が悪くなり、何となく老人染みて来る。大勢の若い者の中に、一人の老人が交つて生活して居ると、その老人はいつの間にか若返つて来る。それは皆相手と同じやうな氣持になるからである。その相手の氣持になれる程度の如何に應じて、老衰もすれば若返りも出来る譯である。醫學博士山田茂男氏は、

「人の長命を保つか保たぬかの境目は、肉體のみではなく、大に心持の如何による。即ち若い心持で、愉快に暮せば、それだけ長命ができる譯であるし、反之「乃公はもう老人だ、乃公はもう餘命幾何もないのだ」とばかり思ひ續けて、年が年中クヨクヨばかりしながら暮してゐれば、結局自分の注文通りに早く老衰して斃れることになるのである。動物の中でも、人類は殊に感情の發達したものであるから、肉體は畢竟心を盛つて置く容器に過ぎないので、内容が若いか古いかが、容器たる人間の壽命の長短を左右する事實に著しいものである。長壽を願ふ人々は、努めて若い異性と多く接觸して、若い異性に同化するに限る」

といつて居るが、これで言盡されて居る。

北京城外に、肅王家の墓地がある、其處に有名なる「架松」がある、數百年を経た巨松には、常に若々しい翠色を帯びて居る。これは其の周圍に、二三年毎に、新しく、若木が一面に植えられる。若木の生氣を吸つて老木は、いつも若返つて居るのである。支那には昔から斯うした、「樹木の若返り法」が行はれて居る。植物學者に聞いてみると、そんなことは支那に限らず、今では一つの學理となつて普通に行はれて居るといふことだ。東京の品川の或寺に、數百年を経た老海棠があるとかいふ。それ

がやはり若木の若返り法を行つて居ると、何かに書いてあつた。

24 年下の女と結婚して若返る秘法

眞正の處女回生術は、決して性行爲をせぬところに價値があるのであるが、性行爲をしても、其の相手が若ければ若返る例がいくらかもある。或る紳士が、ある事情から、自分よりも二十五歳も年下の婦人と結婚したところ、若返つたといふ話もあれば、また前妻が死亡した後、これも三十歳も違ふ若い後妻を貰つて、益々若返つた有名な人もある。これは日本の話だが「甲子夜話」に「長崎の一醫某、年六十の時妻を喪ふ。子弟妾を勸むるも聽かず。妻にあらざれば終始遂げ難し、我は長生すと、強て娘十七なるを納る。果して饒餘壽を保つこと百十六歳にて終れり。十七の娘この時七十三歳にて看病し、幾ばくもなく歿せりとぞ」とある。斯ういふのは、若き婦人の精氣を受けて老衰を免かるるのであるが、過淫なれば反つて身を害するのであるから、若き夫人を持つ人々は、其の點に細心の注意を拂ひ、前に述べた「採陰補陽の術を行ふべきである。

これは單に男のみではない。婦人の場合でも同様である。年老つた婦人が、若い男子と同棲して、起居、食事等總て一緒にするのは、たしかに若返るのであるが、若い燕と同棲すれば、そこに必ず性的關係を生ずる。さうすると反つて血氣盛んな相手のために、遂ひ引づられて多淫となり易い、さうなると老衰を招き、妊娠や出産をするやうなことがあると、益々悪くなつて來るのである。

兎に角「青春煖房回春術」といふものは効果が有るかはりに、凡人には行ひ難いことで、餘程の修練を要するのである。しかし「採陰補陽術」を行うよりは、この方が人道的で、且つ修練の程度も違ふから行ひ易いのである。手取り早い若返り法としてこれをお勧めする。杜甫の詩に「煖老須燕玉」とあり、丁鶴年の詩に「煖老恨無燕趙玉」とある。「燕玉趙玉」とは燕趙の佳人を美玉に見たるものである。「老を煖るには燕玉を須ひん」といひ「老を煖るに恨むらくは燕趙の玉なきことを」といひ、支那に昔から「處女保溫法」が行はれて居たことがわかるのである。

25 若者の呼氣で治療する靈動術

以上は「體氣」を述べたが、その外に「呼氣」がある。これも同じ意味で、血氣盛んなる男女の「呼氣」を受けて、補益するのである。

漢の大醫「史循」が、或る冬の夜、宮中に何侯して居ると、寒さのために、持病の「寒疝の病」といふから疝氣が起つて來た。それが恐ろしく猛烈で、非常に苦悶する、寒疝は温むれば治るが、宮中のことであるから、火の氣がない。そこで當夜殿居の若き宮女達は、見るに見かねて、口を以て代る息を吹きかけて、曉に及ぶと、漸く痛みが止まつたといふ。「呼氣」とは斯ういふものである。

「靈動術」といふのがあつて、血氣盛んな若者の呼氣を、疾患部に吹きかけて治療する。よく治るものだ。支那では、今でも呼氣を以て病を醫する術者が居る。術者が呪文を唱へて、最後にフーツと息を吹きかけるのも、この理に外ならぬのである。老人が、大勢の處女と共に起臥し、日常純潔清新にして活力ある呼氣を受けて居ると、知らず識らずの間に、若返るといふことは、理論上有り得べ

きことである。

以上で「探陰補陽術」の説明を終つた。従つて「閉固の術」の説明はこれで終つたことになる。事總て男女の関中に關することであるから、露骨詳細なる説明のできぬことを重ねて遺憾とする。志ある讀者は、直接問合されたい、私信でお答へする。

26 男を金玉とし女を瓦石と見る支那の經典

茲で斷つて置かねばならぬことは、以上述べ來つたことは「男を主として」説いたもので、女は常に男の不老回春の犠牲となつて居る。私が各處で若返りの講演をすると、よくこの事を訊かれる。交詢社での講演を聞いた、或大會社の重役が、歸宅して講演の内容を夫人に話すと、その奥さんは、「男を主として、女を無視するとは、怪しからぬことです、男が若返るために、女が犠牲にされるとは、人權問題です」

とかなんとか大に立腹されたさうだ。そこへ婦人世界の記者が訪ねて行つたとかで、婦人世界の主筆

中島德行氏が、わざわざ私を訪ねて来られ、

「女のための不老回春法があるならば、書いて貰ひたい」

と頼まれた。そこで私は本年八月の同誌へ「不老強精保美の秘訣」と題して、本書で述べて居るやうなことを、簡略に書いた。その中に、女の不老回春に就て、次の如く述べて置いた。

「支那では男を主として、女を除外した點が多いのであります。素女經といふその秘法を説いた經典がありますが、その中に「女を視ること瓦石の如く、自らを視ること金石の如くせねばならぬ」と教へてあります、女を瓦や石のごとくに視よとは、實に怪しからぬことであります。すべての經典はかういふ調子に説いてあります。また「女を御するのは奔馬を御する覺悟が必要である。深い坑に臨み、その底に双があることを知つて、その中に墜つるのを恐るるがごとく、女には油斷をしてはならぬ」と、警戒してあります。これも同様御婦人方に對して、怪しからぬわけであります。これは畢竟支那が男尊女卑な國柄で、女を奴隷視して、極端にいへば、女は男の慾望を満たす道具、子を産む機械ぐらゐの間違つた考へを持つてゐたからであります。しかし一面には、奔馬とか、坑底の双とかに譬へて、男が警戒するのには、男に優る強いある力をもつてゐるためであると思ひます。」

と述べ、尙女が男の歡心を求めんが爲めに、死者狂ひで研究した秘法に就て、左の如く述べた。

「男の造つた經典や、秘法には、女を無視し、事實に於ても、権力のあるもの、金力のある者に多くの女が吸収される、一夫多妻の風習は、女を商品と見做され、遂には瓦石に等しく取あつかはれつゝ、るた間に、いつのまにか、女獨特の「不老強精保美の秘法」が研究さるゝやうになつたのであります。一人の男が、多くの妻君を持つた場合、男の愛が、多數の妻君に普遍的に、公平に行きわたることとは至難のことです。年が若くて、美しく、智識的で、身體に缺陷のない女に、男の心が傾くのは免かれぬことです。こゝに於てか、多くの妻君は、どの妻君よりも、より多く夫の愛を受け入れたいと望んで、あらゆる方法を講ずることになります。必然、妻君同志に競争が起ります。かうした場合における、女は全く眞剣で、死者狂ひになるものです。これが昔から、幾千億といふ數知れぬ女性の間に研究され、永い歴史を経て、今日の如く完成さるゝに至つたのであります。そこで支那の女が實行しつゝある「不老」即ち若返り、「強精」即ち精力の衰へぬ「保美」美しさを保つ秘法は天下無比なわけです。」

27 婦人がいつも若く美しさを保つ秘法

女が、男を操縦しつゝ若返る秘訣は、支那では研究盡されて居るが、これも閩中の方伎に渉るので茲では書けぬ。しかし女がいつまでも若さを保つには、普通には「性慾を慎む」ことになつて居る。これは男性と變りはない、前に述べた「保精と慎色慾」は、單に男のみに應用すべきでないのである。最近、醫學博士丸山圓太郎氏は、雑誌「健康時代」に次のやうに「婦人の若返り法秘訣」ともいふべきことを述べて居る。

若返り法といふのは、心と身體の若々しくなることをいふのである。話にしても、身體のこなしにしても、年よりも若々しく見えるやうになる法をいふ。婦人は若いのが美しいといふやうな、少し喰ひ違つた觀念聯合から、誰れしも若々しくなりたがる、男子で美しく見せたいといふ人は一部の人の外はない。が、誰れでも、どこやら若いといふことは、何のためにとはつきり自覺しないで、勢ひがあり、男性的であり、活動的であり、將來あり、頼もしいといふやうな、複雑した積極的の觀念が

基となつて、やはり若からんことを欲する。成駒屋が若返り術を受けたことは、有名な話題だが、その動機は一口にはいへないほど複雑だらうと思ふ。

若ければ性慾も強からう。性慾の強い人はその肉體の中から、異性を引き寄せる驚然たるエネルギーの波動が放射して来る。さればこそ人氣を商賣とする役者や藝者が、若からんことを求めて止まぬ性が盛んであれば異性を引き寄せることは、性の生物學上の原則なのだ、若いといふことをさぐつて行くと、つまり精がまだ盛んだといふ一點に来てしまふ。若返り法のうちには即ち「精力旺盛法」を含むといふことになる。

どうしたらいつまでも若いのか、獨身者は年よりも屹度若く見える。また三十歳頃から後家さんになつた人はきつと若返つてくる。そして自分よりも年下の若い燕などを引き寄せる。しかも一つの燕にあらすして、何時の間にか二三の燕が現はれると、その一つが我こそ一番間近かに、あるひは同性といふ程間近かに近附かんとして、醜なる競争が初まる、とど三角、四角の戀の關係もつれてゐる中に、誰れかが何時の間にか、戀の殿堂に納まる。これは女が獨身者になつて若返つた場合に起る不道徳なモダン戀愛の世相だが、その根本は若返つた性慾統御の術を缺いたためである。男の場合もこれ

即ち半分の機能が強制的に獨身者と同じ結果になる。

婦人でも荒淫に陥れば、必ず早死する。これは實際の事實である。例へば、娼妓は普通の婦人よりは遙かにヤセるもので、早老するものであることは、讀者御覽の通りである。娼妓と同じやうな性的生活をする一群の女人も、また早老すること甚しい。そこで長く女の若き美を保たせる方法として、樓主や遣手婆は娼妓にやはり閉固の術を傳授した。即ち職業的××に當つて、娼妓自身が(××××××××××)訓練させられたものである。彼等の術語では、これを「落ちる」「落とさない」と稱へられてゐる由である。(以下略)

丸山博士は、専門家だけあつて、簡にして要領を得て居る。同博士も同誌で支那の閉固の術に一言及ぼして居るが、閉固の術が如何に不老長生に必要なかがわかるのである。

28 外腎を煖める「掬弄」と補精秘法

これで「合理的性交」の「保精」に關しては概略ながら述べたので、次に「補精」に就て述べたい。

尤も前に述べた「採陰補陽」も精を補ふ一つとなつて居る。人間は精を濫費してはいかぬので、其の節度を圖つて「保精」せねばならぬ、しかし保精するばかりではまだ術の奥に達したものはいへぬのである。保精しつつ新に××を製造して、使用の補充をせねばならぬのだ。

「補精」をするには、勿論神氣を養ふことも必要であり、また採陰することも必要である。或は藥餌を以てもしなければならぬ。これには色々な方法があるが、私は今、その一例として最も支那人間に普及し、また實際効驗の顯著なる方法を一つ擧げてみたいと思ふ。

それは調息煉丹の法を行ひつつ、「外腎を煖める」ことである。その方法は、両手を以て外腎(睪丸)を掬ふやうにして、これを煖めながら、黙坐して息を調へるのである。一吸一呼を繰返すこと十度び即ち「十息」すると、兩腎に非常なる効果が現れて來るのである。早くいへば、内外腎の血液硬化を防ぐので、これによつて血液の循環をよくする、血液は絶えず新陳代謝して居れば、老衰しないと云ふのである。これは洛陽の「劉凡」といふ男が發明したと『明道雜誌』に次の如く書いてある。

「洛陽の劉凡年七十餘、精神衰へず、體幹清健、なほ劇飲す。予素よりそのよく精を養ふを聞く、因て之に問ふ。凡曰く、我に房中補導の術あり。子に授けんと欲す。術はただ外腎を煖むるのみ。法

は両手を以て掬して之を煖め、黙坐して息を調へ、十息に至つて兩腎の融液、泥滄の如く腰間に入る。此術至妙なり。」

とある。支那人はこれを「掬弄」といふ。

よく支那の田舎などにゆくと、白髪の老人が、院子(中庭)に日向ほつこをしつつ、掬弄をして居るのを見る。北京の白雲觀といへば、前に述べたやうに長春眞人の開基にかかる、支那の道教の本山ともいふべきところであるが、そこに「老人堂」といふがある。八十以上の老人を收容することになつて居るが、大概は百歳を越した老人が集まつて居る。私は、北京に居る時、常に此處に遊んで、老人と對話することを樂しみにして居たが、よくこれに出喰することがある。その時、

「老人何をして居ますか」と訊くと、彼は、

「掬弄！ 掬弄！」

と笑つて答へる。この位に「老人」と「掬弄」はつきものになつて居るのである。

回々教徒も、掬弄を以て、不老回春の唯一の秘法として居る。私はこのことに就て、交詢社の講演で述べ、あとで、宮中顧問官鎌田榮吉先生の招待を受け、有志と晚餐を共にして居ると、その席に列

した某氏は、

「掬弄が老人若返法の一つであることは、説明を待たなくとも、支那より日本に傳つて居る。公家の間には相當に早くから「罌丸袋」といふものがあつて、老人になると、罌丸を小さな袋に包んで煖めることになつて居る。伊藤博文公が、朝鮮の總監として赴任する時、或る高貴な御方より「随分身體を大事にせよ」とて賜はつた物がある。恐れ入りながら、これを開いてみると、それがその袋であつたさうで、伊藤公恐縮して、これを神棚に祭り、感謝の意を表した、今でも伊藤家の神棚の中に、家寶として傳つて居る筈である」

といつた。實に面白い話である。私は餘程以前から、この方法を老人連に秘傳して居るが、效果顯著だといふ話である。

以上で不完全ながら「合理的性交の秘法」を終ることにする。次に「×中方伎」に移る。

其三 × 中の方伎

1 × 中の秘事を述ぶる著者の苦心

この一項は、本書に缺ぐべからざるものであるが、私はこれが記述に就て、非常なる苦心をした。最初永い年月を要して詳述した原稿を、書肆に交付せんとする時、念の爲め讀返して私は躊躇した。而して百頁以上の原稿を放擲して、全部これを改作するの已むなきに至つた。本書は、支那に於ける一種の學問を堂々と學術的に記述するので、本より保健衛生書として俯仰して恥ぢないのであるが、事、男女房中の秘事に關することにて、どうしても字句の上に於て、現代出版取締に違反することを免かれぬのである。

そこで、根本より改めて總括的な抽象論のみとし、性交方法に就ては、單に名稱のみを示し、已むを得ざるものは伏字とした。これならば、當局の忌諱に觸れる惧れはないと信ずる。しかし殆ど「骨抜き」となつたことに就ては、著者の頗る遺憾とする所である。尙深く研究せんと欲する篤志家に對

しては、個人的に口述するより外に途はない。著者は人道の爲めに、その勞を惜しむものではない。

2 天理に本づく陰陽合一と男女の大道

私は前に、「合理的性交」の意義に就て、造化の神は、天地に陰陽のある如く、人間にも男女を作つて居るから、天地の理に合した男女の道を行ふべきであると述べて置いた。この「天地の理に合した男女の道」を行ふとはどういふことであるかといふに、別段難かしい理窟があるわけではない。たゞ一言にして盡し得る。

「陰陽合して物を生ずるのであるから、人間も陰陽相合せねばならぬ。陰とは女で、陽とは男のことである。男女が其道を行はんとするには、天地の大道に本づいたものでなければならぬ。自然に融合せねばならぬ。決して不自然であつてはならぬ。不自然とは、陽發して、陰これに和せず、陰催して陽これに應ぜぬことである。」

といふ極めて常識的な平凡なことである。尙ほこれを具體的に述べると

「男女が其道を行はんとするには、天地より受けたる至純なる愛情が、男女雙方の髓より流れ出でて合して一とならなければならぬ」

といふことになるのである。「素問」に、

「昔、黄帝あり、生れて神靈、弱にして能く言ふ、天に登りて天師に問ふて曰く、余聞く、上古の人春秋皆百歳を度る。而して動作衰へすと、岐伯對へて曰く、上古の人、其道を知るもの、陰陽に法り、術數を和す、今の人は然らず、酒を以て樂と爲し、妄を以て常となす。醉ふて房に入り、慾を以て其精を竭くし、其の眞を耗損して滿を持するを知らず、時ならずして神を御し、快を其心に務めて眞樂に逆ふ。起居節なし、故に半白にして衰ふ」

とある。「其道を知るもの陰陽に法り術數に和す」といひ「時ならずして神を御し、快を其心に務めて眞樂に逆ふ」といひ、陰陽合一を説いて居るのである。

陰陽合一を以て「合理的性交」の原則とするならば、前に述べた如く、支那の房經が「男子を金玉の如くにし、女子を瓦石の如くに見た」ことや「探陰補陽術」を行ひ、又は「處女回生術」によつて、女を犠牲として男子のみ補益せんとすることに、相反することとなるわけであるが、この陰陽合

一の點に於ては、男女を同等に取扱つて居るから面白い。これは畢竟するに、支那人の兩面性が、こゝにも現はれて居るのである。私はこれを比較研究など面倒な手数を省き、矛盾などには關せず、この項だけ分離して説明する。

そこで本項は、一々文献を引用せず、支那の房中家の説いた原理に本づいて、更に支那以外の學者の説を參酌し、著者の私見をも加へて、抽象的に説くことにする。

3 男女の性的差別を無視した男性の冒瀆

先づ第一に知つて置かねばならぬことは、「男女の性的差別」のことである。男と女とは性的感情が同一ではない、非常に相違のあることを忘れてはならぬのだ。これを知らねば、天地の理に本づいた陰陽合一の男女の道は行はれぬのである。然るに人生の根本問題である「性」に關する研究が遂げられて居らぬ。宇宙間の森羅萬象に關する自然法を、探索してゐる多數の科學者達が、どうしてこの大事なことを閑却するのか、不思議でならないのである。

「男女の性的差別とは、情慾の興奮する動機、興奮に要する時間、及び性交に於ける××の程度、××に要する時間等の相違である。」

これを無視して、男女の道を行はんとすれば、それは陰陽の合一を欲ぐことになるのである。然るに世界の男性は、殆どこれを無視して不合理極まる胃潰を行つて居る。男性は、自個の情慾が高潮に達すると、女性の感情など考慮せずして肉體的な要求をする。女性も亦、自個の性的衝動の如何を顧みずして、男性の要求に屈従する。これが現代男女の性交常態である。

どうして女性は、斯くも男性の屈辱に甘ずるかといふに、婦人は長い年月の間、經濟的に從屬の地位にあつた爲めと、妊娠育児等の時期には、必ず男性の保護に頼らなければならぬ必要上や、支那の如く物品視される等で、出来るだけ満足して、男性の意に従はうとし、自然的な感情や、深刻な思想の發露等も、阻止するに力めて来たからである。斯くて男子の要求に對し、一種の機械として其の用を勉めて来た結果は、永い歲月の間、自然の中に、機械以上價値のない生物に化し終つたのである。斯くいへば、今の新しい婦人方のおしかりを蒙るかは知らぬが、全く女性は男性の情慾を満たす一種の機械視されてしまつたのである。女は常に男より××されて居るといつてもよいのである。この

男女の性的差別を無視した男性の女性に對する胃潰は、天地の理に反するから、男女共に、天壽を害ふことになるのである。支那の×中術では、深くこれを戒めて居る。

男女の愛情の程度は、非常なる相違がある。男の情慾は極めて表面的なもので、興奮することも早く、充足されることも早い。悪くいへば、色も香もないのである。その代りに、妊娠の責任もなく、産兒の苦痛も受けない、やりつ放しである。之に反して女性の愛情は、極めて神祕的である。興奮にも、充足にも男性よりも永い時間を要するが、男に數倍する愛の陶醉を味ふことが出来るのである。その代償としては、妊娠、出産、育児といふやうな、責任や苦痛が伴ふのである。

女性の性波が高潮に達した時に、男性は喜んでその潮に棹さなければならぬのに、世の男性は、この微妙なる女性の要求を容れない。女性にとつては、自分が蠱惑に充ちた愛の表現に對して、男性が應じない時程、打撃を感じることはないのである。性的不満が女性に及ぼす影響ほど恐ろしいものはない。さうすると、自分さへ満足を得れば、妻の必要や、従つて其の苦惱、やがてはきざす忿怒反逆等に、少しも關心しない無責任な我儘極る男性は、妻の健康は勿論、其の生命をさへも奪ふ惡魔といつてもよいのである。さういふ男性は不老回春に執つての大敵である。

4 女子の性的興奮を誘致する豫備行爲

然らば、陰陽合一の天地の理に本ける男女の道を行はんとするには、どうすればよいかといふことになる。それは左の事柄を心得て置けばよい。

- (一) 男性が性的興奮を覚えても、これを満足せしめんために、何等性的衝動なき女性に接することを避けねばならぬ。
- (二) 若しこれを満足せしめんとするには、先づ相手の女性をして 性的興奮に導かねばならぬ。斯くて男女の愛情が同一線上に達したる時、人道を行はねばならぬ。
- (三) 女性をして性的興奮に導くには、男性は女性に對し、豫備行爲を行はねばならぬ。
- (四) 若し反對に、女性の方が先に感情が興奮し、男性に對し愛の表現をなす場合は、男性は神祕的にこれを知覚し、直にこれに處する術を心得て居なければならぬ。
- 女は受動的であるから、原則としては男性より要求する場合が多いのである。そこで男性の女性に

對する、情××起の豫備行爲が、最も必要なこととなるのである。支那に於ても、西洋に於ても、この點の研究は完成されて居る。

「完全なる××を遂ぐる爲めには、是非必要なる肉體的準備を爲さしめるが爲め、男が爲さなくてはならぬ義務である」

といはれて居るのは眞理である。これは人間のみではなく、動物の總てに共通する男性の義務である。動物が××前に於いて女性を愛撫して、情的興奮に誘致する光景は、我々はいつも見せつけられて居ることである。

然らば、その豫備行爲とはどうすればよいかといふことになるが、普通の男性は、女性の性的興奮は、「抱擁」、「接吻」、「局部××」で足りると思つて居る。ハイカラな男性は、これに加ふに「音楽」を以て精神的に誘致を試み、下劣な者になると、興奮的飲食物を以て肉體的に誘致しやうと勉むる。而してその愛撫する個所は、何人も一定して居る、女性の情慾の所在を、唇、乳、腰、××等の有觸れた個所とのみ信じて、それ以上深く研究せぬやうである。これが第一間違つて居るのである。女性の情慾の所在は、そんな一定した、小部分ではないのである。

私は、次に「女性と情慾の所在及び情慾の満される接觸點」を「秘戯指南」の中より摘録する。

5 女性の情慾所在と接觸點

印度の性典「アナンガ、ランガ」は左の如く解いて居る。情慾が女子の身體のいろんな部分、及び器官に存する事、及びそれ等に對して必要な、チャンドラカラー(註、大陰月の十六分の一)即ち豫備接觸を適合することに依つて、非常な慰安と快樂とが、夫と妻との双方に經驗されると云ふことを知る必要があると思ふ。之に反して、若し次の表に示した過程は、之を大陰たる二週日に於て、隔日に行はなければ、男女共に全く満足すると云ふことがないのである。斯うして、實際は殆ど、男女共に××××を切望するものであつて、是が彼等をして總ては不義不貞、爭論殺人に至るの致命的な罪惡を招くのであるが、總てかゝる事柄は、チャンドラカラーを學んで、之を心に銘することに依り避け得られるのである。

××は、シユラブクシャー(大陰月の初めの十四日、新月から満月に至る間で、十五日後を含む)の

間は、女子の身體の右側に在る。其反對の時は暗の二週間の場合であり、時には其第一日も含まれるが、これは満月から新月迄続く。此位置の變化は、光と暗との作用に依つて生ずると想像されて居るが、此作用がなければ、情慾の位置も常に一定不變であるに相違ないと云ふのである。

(印刷の都合で總表を次にしたが、こゝで總表を見てから次に移りたい)

さて、大詩人カルヤーナ、ラルラは、以上の圖表より更に進んで相異なる女子の四種類に關して、其の所在を補つて居る。彼は先づバドミニーより初めて、第一にどの足のどの機關に情慾が存在するかを示し、第二に於ては、如何なる過程に依つて、それが飽和され得るかを描して居る。夫たる者は須く此動作を續けて、體毛が逆立つのを見、シートカーラ(この説明は略す)が聞える迄、之を續行すべきである。斯して彼は女子に激情昂進の起つたことを知る。愛人は之に依つて全く満喫するものである。

▷ハドミニーの操縦法を示す◁

身体部分	プラテバダ — 第一日	ドグイテイ — 第二日	チヤトウル トヒー — 第四日	パンチヤミ — 第五日
咽喉	強く×く			
頬	××と爪×			
髪				両手にてユル ユル×でる
腰	爪×			
乳房			静すに×く	
背	拳にて×き 且つ叩く			
胸		爪を押し當 てる	×めつけ且 つ揉む	歴し且つ× る
脇腹	爪にて×き且 つ押當てる			
腿		爪にて×き且 つ之を押當る		
腹部	爪にて×き且 つ之を押當る			
腕			俄に掴んで ×る	
唇	柔かに×み且 つ××する	××	柔かに×み 且つ吸ふ	柔かに×む
乳頭				××指と食指 とで軽く振り 且つ×る
足		爪にて×き且 つ之を押當て る		

▷總 表◁

時 日	位 置	××の×される接觸點	クリシユナバク シヤ—即ち暗の 半箇月—左側	
			位 置	時 日
第十五日	頭と髪	鬚髪及び指頭の愛撫	頭と髪	第一日
第十四日	右 眼	××及び愛撫	左 眼	第二日
第十三日	下 唇	××及び軽い齧咬	上 唇	第三日
第十二日	右 頬	同	左 頬	第四日
第十一日	咽 喉	軽く××を以て×く	咽 喉	第五日
第十日	脇 腹	同	脇 腹	第六日
第九日	乳 房	両手で軽く掴み且つ揉む	乳 房	第七日
第八日	胸全體	拳の底で軽く叩く	胸全體	第八日
第七日	臍	掌で軽く叩く	臍	第九日
第六日	臂 部	拳で掴み歴し且つ叩く	臂 部	第十日
第五日	女 ×	男×で摩擦を行ふ	女 ×	第十一日
第四日	膝	膝を當て、歴し且つ指弾する	膝	第十二日
第三日	ふくらばぎ	ふくらばぎを當てて歴し且つ指弾する	ふくらばぎ	第十三日
第二日	足	足趾で歴し且衝く	足	第十四日
第一日	拇 趾	同 上	拇 趾	第十五日

▷シヤンクヒニーの操縦法◁

身體の 部 分	トリテイヤ — 第三日	サブタミー — 第七日	エカダシー — 第十一日	トラヨダシ — 第十三日
身體 全體	扭る	強く××す る	力強く締め る	
下唇	×む			
腕	♀			
乳房	痕がつく迄 烈しく×く			シートカーラ の音をさせる 迄×××
腹部		爪にて×き 壓迫する		
胸		爪にて×き ××する		
咽喉		爪にて×き且 つ壓迫する		
耳		爪にて壓迫 する		
足		爪痕のつく 迄壓迫する		
口又は 顔		× ×		
女×		力強く×× を當てる	打撃でも與 へる如く× ×を當てる	
唇			××して吸 ふ	
頭の 下部				爪にて文字 を書く如く する
女の 下端				

▷テトリニーの操縦法を示す◁

身體の 部 分	シヤステイ — 第六日	アシターミ — 第八日	ダシヤミー — 第十五日	ドローダシ — 第十二日
女×		男×を挿入	左手にて擦 り且つ×く	
下唇	××			極く軽くか む
咽喉	××	両手にて堅 くしめる	掻き且つ指 にて×でる	ギユツと× く
腰	爪にて×き 壓迫する		左手にて× で擦る	
臍			爪と指にて 抓る	
唇			速かに且つ 繰返し×む	
乳×			手にて×む	
耳			左手にて× ×する	爪を立てる
腿			左手にて擦 る	
胸の 中央			左手にてな で且つ擦る	
背			左手にて擦 り且つ叩く	
臀				
前額			強く×吻す	
眼				兩眼を急に閉 ぢさせる様な 事をする
髪				軽く引張る

以上を學ぶことに依つて、男子は女子を、満足せしめることが出來得るのだと云ふのである。
 單に××の所在を愛撫するのみではいかぬ、これには必ず××の伎巧が伴はねばならぬこと勿論である。その外に、女子生涯を四期に分けて、各々年齢固有の特質を示したものがあつた。また女子には三種に大別し得る特性がある。この特性によつて之を操縦してゆかねばならぬことになつてゐる。これは露骨に記述し得ぬ。

6 女性の××高調期と性的犯罪

男性より受ける豫備行為の操縦によつて、××が高潮に達するが如き、他動的でなくして、女性自らか或期間、一定の時日に、××が自ら起るものである。最近世界の讀書社會を驚倒せしめた、英國の生物學博士、理學博士、マリー、ストープス女史の「マリードラブ」(結婚愛)の中に次の如き一節である。

▷ハステイニーの操縦法を示す◁

身體の部分	ナヴァミー 第九日	チャトウル ダミー 第十四日	プールニマ 満月	アマール グア スパー 新月
女	××を烈しく挿入するか手にて強く××	その×の曲る迄内部を搔き且つ壓す		花を扱ふ如く手を開く
臍	手にて擦ることな續ける			
唇	××して且つ吸ふ		種々の方法にて××する	種々の方法で××する
脇	背にて壓し極く軽く搔く			
乳房	擦り掴み××つて非常に小さくする		強く引張る	爪痕のつく迄××
胸			×いて爪痕をつける	×いて爪痕をつける
乳頭			××して拇指と人差指とで擦る	手にて××で拇指と人差指とで擦る
身體全部			種々な方法で××する	種々の方法で××する
眼			××	××
腋の下			×き且つ×る	×き且つ×る

「或婦人が、私に日常夫と同居したいと云ふ慾望を外にして、殊に其肉體的結合を熱望する時期は自然の中に、丁度時計の針の様に正確に順環し、不在中一貫して少しも謬る處がなかつたと告白した事があるけれども、各個人が一人一人、あらゆる點に於て相異なる事は、恰も同一なりズムを有する婦人は勿論ない筈である。けれども、大體に於て、大抵の婦人は、其の月經中、一回丈け感するのを普通とし、其前のを感する者があれば、後を知る者もある。尤も此等の婦人にあつても、健康状態の極めて順調な場合とか、或は丁度其時期に、刺戟的な小説を讀んだり、愛人に出會し乍ら、外の事情のために妨げられた様な場合には、普通感じない方の一方をも意識する事がある。月經中に強烈な性慾を感じる様なものは、若干アブノーマルであつて、普通の者ではない。」

而して婦人が、この××の高潮期に、夫が側に居なかつた場合に、他の男性と不義をしたことに就て、其の實例を示して居る。

「科學的に性を取扱つた書籍中で、此の事實を明にしたものはないけれども、フォレル教授は、別種の問題に關して、興味ある實例を揭示してゐる。即ち嘗て一結婚夫人に對して、其の不貞を責た處、夫人は此に答へて、二週間毎に必ず一回の激烈な興奮を感じ、この場合夫が側に居なかつた時には、

誰でも、最初に來た男を捉へる、と云つた事を述べてゐる。フォレルは、此根源に横る法則に關して、何の氣もつかなかつたやうであるが、吾々は、彼女の道徳心のアブノーマルな事と、自制力の缺けてゐる事は悲まなければならぬと同時に、生理的の方面に關していへば、二週間一回の高潮に際して嚴格に其の自然律に服従して居たのであるといふ事實を、見逃してはならない。」

女史は、更に語を繼いで、これをモーゼの戒律を引いて、斯の如き場合は、母婦人としては己むを得ざることであると説いて居る。

「此點に關し、モーゼの戒律は、極めて興味のあるものであつて、彼は月經中の婦人の××に對しては、極めて嚴格な刑罰を科したのみならず、病婦人と同衾したる場合には双方を追放する事としてゐる。けれども、月經後に至つては、××の保護を受けてゐるのである。私の獨自に歸納した結論は、茲に又、東方哲人の保護を得るの強味を加へてわけである。」

斯うした例を擧げると際限がないが、陰陽合一の上に於て、男性は餘程、この點に細心の注意を怠つてはならぬのである。

7 X X 觀相法と兩性愛情の厚薄

其他支那に於ては、兩性の觀相法が發達して居る。觀相によつて、相手の男女のX Xの所在、又は愛情の厚薄、X Xの形容まで知ることが出来る。これを知つて置かねば、房中の方伎に熟達したものとはいへぬのである。房中術では女人の相を「入相」と「惡女」に分けて居る。「入相」の「入」は此場合、「奥に達す」とか「頂上」とかに解釋するので、「上相」といふことである。「素女經」に「大清經」を引いて、黃帝が「入相の女人」とはどんなものをいふのかとの問に對し、

「素女曰く。入相の女人とは、天性婉順にして、氣勢滯行、髪は絲の如くにして黒く、肌弱く、骨細し、長からず、短からず、大からず小からず、孔は鑿つて高きに居り、X X毛無く、X X多し、(中略) X Xの時、X X流瀼し、身體の動搖、自ら定むること能はず、汗四逆に流れて人の舉止に隨ふ、男子は、其法を行はずと雖も、此人を得て由て損を爲さず」とある。「惡女の相」に就ては「玉房秘訣」に、

「惡女の相とは、蓬頭粗面、齒項結喉、麥齒雄聲、口大きく鼻高く、目精渾濁、口及び頰に高毛鬚髮に似たる者有り、骨節高大にして髮黃く肉少く、X X大にして且つ強く、文多く生に逆ひ、これとX Xすれば皆賊して人を損ず」とある。其他之等の房經閨典には「相女の法」が擧げられて居る。其他「色情相法」などの兩性の觀相に關する書籍にして、信を置くに足るものが相當に有る。若しこれを詳記すれば、優に一冊を成すので、私は本書の姉妹篇として、近くこれも出版してみたいと思つて居る。

8 房室の禁忌は不老回春の要訣

房中術に於ては、房室の禁忌は極めて嚴重にせねばならぬことになつて居る。「玉房秘訣」には次の如く説いて有る。

「沖和子曰く、易に云ふ、天象を垂れて、吉凶を見る、聖人、これに象る。禮に云ふ。雷將に聲を發する時に子を生む、戒めざれば必ず凶災有るべし。これ聖人戒と作す、深く慎まざるべからず。若夫

れ天變を上に見、地災を下に作る、人其間に居る、安んぞ、畏れて之を敬せざるを得ず、陰陽の合、尤之を敬畏すべし」

「彭祖云ふ。消息の情、去らざるべからず、又當に大寒、大熱、大風、大雨、日月蝕、地動、雷電、を避く、これ天忌なり。醉、飽、喜、怒、憂、悲、恐懼、これ人忌也。山川、神祇、社稷、井竈の處は、これ地忌なり。既に三忌を避く、此の忌を犯す者は、既に疾病を致し、子必ず短壽、總て服藥虛劣、諸病未だ平復せざるに、陰陽を合するは、并に人を損す」

諸書にも斯うした房室の禁忌を説き、禁忌の日月時刻に至るまで、定められて居るが、其説頗る多く、若しこれを全部掲ぐれば、一年中殆ど接觸し得ざることになる、その何れかを取つて履行せねばならぬと思ふ。煩を避けて茲には掲げぬが、その代りに、貝原益軒の「養生訓」の中から「房室の戒」を抜書して参考に供することにする。

「房室の戒多し。殊に、天變の時をおそれましむべし。日蝕、月蝕、雷電、大風、大雨、大暑、大寒、虹蜺、地震、此の時、房事をいましむべし。春月雷初めて聲を發する時、夫婦の事をいむ。又、土地につきては、凡、神明の前をおそるべし。日月星の下、神祠の前、わが父祖の神主の前、聖

賢の像の前、是皆、おそるべし。且、我が身の上につきて、時の禁あり。病中病後、元氣いまだ本復せる時、殊に、傷寒、時疫、瘧疾の後、腫物癰疽いただいえざる時、氣虛勞損の後、飽渴の時、大醉大飽の時、身勞働し、遠路行歩につかれたる時、忿り、悲しみ、うれひ、驚きたる時、交接を忌む。冬至の前五日、冬至の後十日、靜養して精氣を泄すべからず。又、女子の經水いまだ盡きざる時、皆、交接を禁す。是、天神地祇に對しておそれつつしむと、わが身において病を慎しむなり。若、是を慎しまざれば、神祇のとがめ、おそるべし。男女共に、病を生じ壽を損す。生るる子も亦、形も心も正しからず。或は、かたわとなる。禍ありて福なし。古人は、胎教とて、婦人懐妊の時より慎しめる法あり。房室の戒は、胎教の前にあり、是、天地神明の照臨し給ふ所、尤おそるべし。わが身、及妻子の禍も、亦、おそるべし。胎教の前、此の戒なくんばあるべからず。小便を忍びて、房事を行ふべからず。龍腦麝香を服して、房に入るべからず。入門日、婦人懐胎の後、交合して慾火を動かすべからず。腎は五臟の本、脾は滋の養源なり。ここを以て、人身は、脾胃を本源とす。草木の根本あるが如し。保ち養ひて、堅固にすべし。本固ければ、身安し。」

先づこのくらの程度で、戒めを守つて居れば、それでよいのである。

9 經典に教へた××の××と秘訣

今度は愈々、房中の方伎の眞隨である「××の××と其の方法」を述ぶるのであるが、これは茲では絶対に掲ぐることは出来ぬ。ただその出典と、名稱のみを掲げて参考にして置くに過ぎない。

(イ) 「素女經」……に於ける××及び秘法

- 〔五常〕……男×に五常の道があると説いて居る。
- 〔五徵〕……(一)面赤、(二)乳堅鼻汗、(三)噎乾咽唾、(四)陰滑、(五)尻傳液の五つの徵候に就て述べて居る。
- 〔五欲〕……(一)意欲、(二)陰欲、(三)精欲、(四)心欲、(五)快欲の五欲に就て述ぶ。
- 〔十動〕……××の際に於ける動作を十種に分つ。
- 〔四至〕……(一)和氣、(二)肌氣、(三)骨氣、(四)神氣の四氣至らざる××を禁じてある。
- 〔九氣〕……(一)肺氣、(二)心氣、(三)脾氣、(四)腎氣、(五)骨氣、(六)筋氣、(七)血氣、(八)肉氣。

(九)至氣の女の九氣に就て述ぶ。

- 〔九法〕……(一)龍翻、(二)虎步、(三)猿搏、(四)蟬附、(五)龜騰、(七)鳳翔、(七)鬼呪毫、(八)魚接鱗。(九)鶴交頸。の××九法に就いて述ぶ。

- 〔七損〕……(一)絶氣、(二)溢精、(三)雜脉、(四)氣泄、(五)機傷、(六)百閉、(七)血竭の××に據る七損に就て述ぶ。

- 〔八益〕……(一)固精、(二)安氣、(三)利藏、(四)強骨、(五)調脈、(六)畜血、(七)益液、(八)道體。の××に據る八益に就て述ぶ。

その他、男の「八節」、女の「九官」に就て述べて居る。

(ロ) 「洞玄子」……に於ける××及び秘法。

- 〔五法〕……(一)坐臥舒卷の形、(二)偃伏開張の勢、(三)側背前却の法、(四)出入深淺の規、(五)並會二儀の理。即ち「形、勢、法、規の理」を五行に本づいて述ぶ。

- 〔三十法〕……(一)斂綱纏、(二)申縫摺、(三)曝鯉魚、(四)騏驎角、(五)蠶纏綿、(六)龍宛轉、(七)魚比目、(八)鸞同心、(九)翡翠交、(十)鴛鴦合、(十一)空翻蝶、(十二)背飛鳧、(十三)偃蓋松。

- (十四) 臨壇付。(十五) 鸞雙舞。(十六) 鳳將雛。(十七) 海鷗翔。(十八) 野馬躍。(十九) 驥騁足。
 (二十) 馬搖蹄。(二十一) 白虎騰。(二十二) 玄蟬附。(二十三) 山羊對樹。(二十四) 蹊鷄臨場。
 (二十五) 丹穴鳳遊。(二十六) 玄溟鵬翥。(二十七) 吟猿抱樹。(二十八) 貓鼠同穴。(二十九) 三春驢。
 (三十) 秋狗の××三十法を述ぶ。

原書には、一々細い説明がしてある。

以上の代表的なものだけ挙げて置くが、支那以外にも印度や其他に、これに關する、立派なる著述があつて、詳述してある。茲には單に、支那以外で有名な××××の種類だけ述べて置く。

- (一) アナング、ランガ。(二) カーマ、ストトラ。(三) ジャルダ、バルヒユーメ。(四) エル、ク
 ターブ。(五) ラテイラ、ハスヤ。(六) アナング、ランガ。

等である。右の内印度古典のカーマ・ストトラ(愛經)には、三十四法の裏表六十八法の方則が説明されて居る。

これで、此項を終るが、書いたり、削つたり、更に加ふるなど、非常なる注意と努力によつて、漸く出来あがつたが、「骨抜き」たることは免かれぬ。

其四 邪道 × 中術

1 邪道 × 中術とはどんなものか

順序からいへば、不老回春術の第三項「藥餌に據る」ことを述べてから本項に移るのであるが、「邪道房中術」は、所謂「房中の邪道」を主として説くのであるから、便宜上こゝで述べることにした。

「邪道房中術」とは、前にも述べた如く、正道な房中術が、(一) 神氣を養ひ、(二) 色慾を慎み、合理的性交を行ひ、(三) 飲食を節し、藥餌に據るといふ修養と攝生を要するといふ消極的な方法ではなく(一) 神氣などどうでもよい。(二) 色慾を慎む必要もなく、合理的でなくともよい。(三) 飲食を節するといふのも面倒である。それより極めてお手軽な、手取り早い、積極的な方法で、簡単に薬でも飲んで若返りたい。長生したいといふ虫のよい考の下に行ふことをいふのである。

その結果は、一時的興奮の媚薬とか、房中の邪法などが行はるゝことになり、正道よりも反つて邪道の方が發達したのである。前に掲げた「支那不老回春史」を見ても、如何にこれが流行したかわか

るのである。私はこれより、邪道房中術に就て述べてみたいと思ふが、媚薬といひ、房中の邪法といひ、これを詳述するには、風俗を亂す惧あり、また良俗を害するとも益なきことであるから、こゝでも亦、抽象的に總括した概略だけを述べ参考にすることにする。

2 支那人の理想と仙人の氣持

手取り早い積極的方法としては、どんなことが行はれて居るかといふに、最も甚しいのは「阿片」を飲んで、房中の邪道を行ふことである。これを説くには、先づ支那人の理想から述べなければならぬ。

「支那人の理想」とは、煎じ詰れば「福」「祿」「壽」の三つに歸着する。「福」は財寶を得ることである。「祿」は祿にありつくことである、地位を得ることである、名譽を得ることである。「壽」は長生することである。この三者を何の必要あつて得やうとするかといへば、自個享樂を飽喫したいからである。金を有し名譽を得、長生して思ふさま享樂したいとは、昔から支那人は誰でも希望したことである。

然らば、これを得た後には、どうするかといふに、長生して現世の享樂を盡し終へて「仙人」になることである。即ち羽化登仙するのだ。而して永遠に仙界に生きたいといふのだから、虫が好過ぎるのである。

しかし羽化登仙するには、修養を積ねばならぬ。霞を吸ひ、露を飲み、氣を養ひ、丹を煉らねばならぬ。俗塵を避けて、深山幽谷に入り、苦行を精進するといふことは、餘程の達人でなければ出来ないことである。出来難いけれども、なつて見たいのは人情である。そこに彼等の悩みがある。それでいろいろと、仙人の境涯を想像してみた。その結果、彼等は、

「一體、仙人になつた氣持は、どんなものだらうか。」と、考へてみた。そして遂々「仙人の氣持」を次のやうに纏めてみた。

「あの紫雲たなびく中に聳ゆる、樓殿臺閣の上で、美しい神女に取圍まれて居る仙人……よく畫にある仙界の光景を夢想して……の氣持ちは、××爲をやつて居る時の、或る瞬間の××を長く引延ばしたやうなものに相違ない。」

實に奇想天外の大發見といふべきである。彼等は、次にまた考へた。

「然らば、それを長く引延ばすには、どうすればよいか」
 そこで彼等は工風した。その結果「阿片」を喫んで、所謂その「仙人の氣持」を味ふといふ手取り早い
 ことを發見するに至つたのだ。

ここでまた當然起つて來る疑問は、

「阿片を喫めば、どうして仙人の氣持が味はれるか」

といふことである。これを説明するには、阿片を喫んだ時の精神や肉體に及ぼす影響を考へてみなければならぬ。一口にいへば

「阿片を喫んだ氣持は、陶酔の氣持ちとなる、さうして極端な空想を實現することが出来る。例へてみると、支那でいへば皇帝になりたいと思へば、黃袍を纏ひて南面して群臣に令を傳へて居るやうな氣持になれる。また女が欲しいと思へば所謂三千の佳麗に擁せられて居るやうなことが實現出来る。金が欲しいと思へば、金銀財寶の中に埋まつて居るやうな氣分になれる」
 のであるから堪らない。一度この體驗を味つた者は、やめられなくなつて、あらゆる苦心をしても、これを用ゆるのは故あるかなである。

3 阿片を喫んだ人々の體驗談

死んだ醫學博士小酒井不木氏は、「阿片を喫んだ氣持」に就て次の如く述べて居る。

「トーマス・デ・クインシーの「オピウム・イーターの懺悔」を読むものは誰でも、一度阿片を喫んで見たいといふ誘惑に迫られるであらう。阿片を喫むとどんな心持ちになるかといふに、はじめは、軽い窒息の感じが起る。即ち、普通に息づまるやうな感じといふのがそれである。それは、あまりに美しいもの、あまりに偉大なものに接したときに起る息づまる感じである。さうしてその息づまる感じと戦はうとするかのやうに、大腦が頭蓋骨の中で、心臟のごとく鼓動し、翻轉するかのやうな感じが起る。それから、耳に一種異様の音がひびく、それは夏のひるさがりに、樹下に涼風に吹かれつつ蜜蜂のうなりを聞くときの感じである。この状態が過ぎるとこんどは、全身に一種の「完成感」と「平靜感」と「勢力感」とがみなぎつて來る。「完成感」とは、すべてのものに満足出来る感じである。善きも悪しきも、あるがままに肯定したときのやうな感じである。「平靜感」とは、その満足感から起る穏やか

な感じである。「勢力感」とは、全身に萬能を惠まれたやうなうれしい感じである。その時、あたかも眼には一種の幻視が感じられる。はじめには、たえまなく美しい光が眼前に明滅して、後にはその光が霧の中からあらはれる風景のやうに、えもいはれぬ莊嚴をもつた形象に變化する。それは繪にかかれた龍宮か、又は極樂淨土の形を帯び、やがて、その七寶の宮殿の中から、花のやうな官女又は天女があらはれて、なやかな舞踊をはじめ……」

私は未だ「オピウム、イーターの懺悔」を讀まぬのでわからぬが、これは小酒井博士が、同書を譯したものであらうが、餘りにもよく穿たれて居る。而して最後に、

「いや、これ以上書いては讀者を危険に導くおそれがある。いづれにしても、一たびこの世界を経験したものは、遂にその世界に入りびたつてしまふ。さうして遂に、判斷力を失ひ、責任感を磨滅して心身に大きな破綻を來し易い。阿片窟は、今は文明國の到るところに存在する。さうして阿片の需要は驚くべき勢で増加しつつある。阿片窟にはひり得ないものは、阿片から採つた製劑、即ちモルヒネ及びヘイロンを皮下に注射して、その特種の快樂をむさほらうとする。恐ろしいことである。」と警戒して居る。

ヴェネットも阿片を少量用ひると、著しい効果があると言つて居る。それは自分自身の経験によつた説であつて、彼はそれを用ひた時、うれしさのあまり「天來の喜び」だと絶叫したといはれて居る。井上紅梅氏の「阿片吸食體験記」には、

「そんなら阿片を喫めといひました。そこで二三響喫んだが更に利き目がありません。續いて八響ほど吸ふうちに、だんだん無精になり、そのまま炕の上に倒れました。からだの外面は殆ど癩癩して居ましたが、内面は非常にハッキリして居ました。恰度燧石に包まれたダイヤモンドが、靈光を内に藏するのと同様に、からだはじつとして居ても、魂は飄々天外に遊んで居るかのやうに、目を開ければ物は見えますが、時間の觀念は全く失はれて居ました。支那人は古來神仙を喜んで種々奇怪なる記録を残しましたが、阿片に酔つた状態は全く「神仙境」です。無我の界です。羽化登仙です。恐らく癡者の求むる歡樂は、此境地でありませう。阿片を吸つたのは午前三時頃、元の人間に返つたのは正午頃、其間僅かに數分間の思ひがしました。」

とある。これを見れば、阿片に陶酔した時の氣持が、「仙人の氣持」ではないかと想像されるのも無理からぬことである。

4 仙人の氣持を味ひつゝ享樂に耽る

阿片に陶酔すると、羽化登仙の氣持ちとなり、この時に×行爲を行ふと、××が×れさうで×れない。××を×す瞬間の×味が永續するのであるから、一度これを體驗したものは、阿片の吸飲がやめられぬのである。陶酔の雅境にはいつた上に、更に肉的快乐を加へるのであるからたまらないのである。井上氏の「體験記」の中にも

「酒を飲むと抑制する機能が麻痺し、亢奮する機能が残る。阿片を喫むと其反對で、亢奮する機能が麻痺し抑制する機能が残る。そうして酒も阿片も、深く嗜むと、最後には亢奮機能も、抑制機能も双方ともに麻痺するのである。房事に就ては、それが一層顯著である。酒を飲むと亢奮機能のみ残るか早洩れることが多い。阿片を喫むと抑制機能のみ残るから中々洩れない」

とある。斯くて邪道房中術が流行するのである。支那には到る處に「阿片窟」があつて、そこには、阿片に陶酔した賣笑婦を枕席に陪らすることが

出来る。彼等は醉中に、仙人の氣持を味ひつゝ、狂態を演ずる。變態性慾者はこれを無性に喜ぶ。自分だけ喫んで、自分だけ仙人の氣持となるものもあれば、男女共喫んでこれを味ふものもある。阿片は、アルコールと同じく、男子に對してよりも、女子に對して効力が著しいといふことだ。阿片を喫んで性の享樂に陶酔する彼等を見ると、全くの色鬼に等しい。上海では料金を取つて、本人達にはわからぬやうに、竊視させる處がある。

斯うして極端に「仙人の氣持」を味つた結果、×行爲をやりつゝ頓死する者がある。これを「樂死」といふ。樂しみつゝ死ぬのだ。天下これほど、理想的な死方はないと思つて居る支那人は、あきれ果てた馬鹿者である。阿片の癮者(中毒者)になると、一定の時間が來ると必ず喫まねばならぬ。若し吸はずにれば、脈が上つて仕舞ふ。さうして日一日と量を増してゆかねばならぬ。斯くて理想の神仙境に到達した時には、大事な命を喪つて了ふ。

この判りきつたことを、支那人は平氣で繰返して居るから不思議である。止めるにやめられなくなつてしまつたのであらう。止めるどころか、邪道房中術の研究は、次から次と進められて居る。橘朴庵氏の「道教」(著者が主宰する支那風物研究會で發行)に

「道教の表門の方では、嚴重に房事の過度なるを誡め、絶體に之を禁止する日をさへ設けて居る。然るに裡門の方に廻ると、多分房事に際して覺える一種特別な快感を、仙人生活の片鱗であるかの如き錯覚から、出来る限り多い度数と、長い時間とに於て、之を享樂する方法が、狂熱的な態度を以て研究されるのである。」

と書いて居るのを見ても解る。

「邪道房中術」とは、ざつとこんなものである。若返りたい爲めに、少女を弄んだり畜類を××したり、人肉を食つたり、生血をすゝつたり、怪しい技巧をやつたことを數へあぐれば、相當に有るが書かんと欲しても書くことを許さぬのである。このくらゐで勘辨して欲しい。

其五 西洋の若返り法との比較

1 スタイナツハ博士の若返り法

以上で、支那に於ける不老回春術の内容の大體を説明したこととなる。最後に不老回春に必要な

秘薬の内容に移るのであるが、その前に、西洋に於ける若返り法の大體を述べて、支那と比較して置きたい。

最近、若返り法で有名なのは、スタイナツハ博士の發明であつた。一九二二年十二月五日に、英國ウインナの學士院で、博士が「青春及び老衰に關する研究」と題して、その若返り法を發表するや、老衰若返りの可能を知つて、全世界の人類は救はれる喜びに雀躍したのであつた。或學者の如きは、狂喜して

「古來幾千年の間、求めて得られなかつた問題は、斯くして解決された。人類に對し、これほど貢獻する發見がまたとあらうか」

などと提燈を持つて居る。日本でも九州大學の榎保三郎博士によつて喧傳されて、その手術を受けた者が相當に有つたらしい。

スタイナツハ博士の若返り法とは、「輪精管結紮術」ともいふべきものである。その實驗に就ての一例を挙げると、七十一歳になる男が、左の睪丸を切除した後、右の睪丸だけで結紮を試みたところが、手術後數ヶ月にして、非常に變化が起つた。其の老人は、現狀を有りの儘に記して

「傷が治つてから、夜分性慾に關する夢を見るの外、食慾が非常に昂まつて、限られた食物だけでは満足が出来なくなつた。精神状態は、手術前には頗る沈鬱だつたのが、愉快になつて、享樂の喜びに満ちて來た。容貌も若々しく、弾力性を帯び、初めて逢つた人から見れば、やつと六十そこそこ位にしか見えぬほど若返つた。また性的生活にも驚くべき若返りを感じた。それがため自然に満足を求めねばならぬ程旺盛になつて居る」といつて居る。

マア大體こんなものであるが、その後、屢々實驗されたが、結局は一時的に性慾を興奮せしめるに過ぎなかつたので、失敗に終つた。それがためであつたと思ふが、紳博士は學界から排斥されるやうな事件が起つたと記憶する。スタイナツハ博士は、一時活動寫眞の辯士にまで、なりさがつたとさへ傳へられた。

2 ハートマン教授の不老長生術

「或る内分泌線を切斷することにより、その活動を若返らせ得る」

といふ、スタイナツハ博士の若返り法と「切斷」といふところに一致點がある「不死長生術」が、最近発見されたと、本年(昭和五年六月一日)、ベルリン發の、聯合通信社の通信で傳へられて居る。それを原文の儘次に轉載する。

人間は、四千八百年の長壽を保つことが出來ると云ふ大発見が、今度ベルリンの、有名なマクス・ハートマン教授によつて發表された。ハートマン教授は、多年の實驗の結果、或る植物の細胞は、不死不滅たるを得ることを實證し、そして今やそれを動物にも應用し、アメーバ細胞の如きは、或方法によつて、明かに不死の域に導き得ることを確證した。この細胞不死の原理が、一度確立された以上、人間の不死は、今や必ずしも荒唐無稽の説でないことになるのである。アメーバは最下等の動物で、分裂によつて増加し行くのであるが、ハートマン教授は、このアメーバを、定期に切斷することにより、分裂を防止し得ることを發見した。

而してアメーバの壽命は、普通二日間なのに、この切斷したアメーバは、單に分裂をしないのみならず、四ヶ月間と云ふ長い壽命を保ち得るのである。

二日間の命が、四ヶ月に延びると云ふ割合で行くと、人間の寿命は八十歳のものは、四千八百歳まで長命出来ることになる。然しこの四ヶ月といふのも、まだいくらかも延長の可能性を持つて居るのであるから、人間も四千八百歳どころか、まだく長命出来るわけである。

ハートマン教授の説によれば、死は細胞の消失によつて生ずるものではなく、却て細胞の増加を防止することが長命の秘訣であり、この學説が、若返り法で有名なスタイナー博士の學説と、酷似してゐるのは注目に値する。

新聞通信で、簡單であるが、新発見として學界の問題となつて居るらしい。その内に詳しい報告があることと思ふ。私の如き門外漢には、一向わからぬが、學説の一として掲げて置くのである。

3 ヴオロノフ博士の若返り法

次は、本年(昭和五年)六月十一日、渡米の途次ヒョックリ東京へ着いた、佛國實驗外科所長兼巴里醫科大學生物學講師の、セルゲー・ヴオロノフ博士の若返り法である。ヴ博士の若返り法は、ス博士

のやうに結紮でなく、生殖腺の移植である。一言にしていへば

「老衰するといふことは、生殖腺の活動が衰へるからである。老人にでも、機能の旺な生殖腺を移植すれば、必ず若返る」

といふのである。ヴ博士は、來朝早々同月十九日に、駿河臺の日佛會館で、約二時間に亘る、若返りの講演をした。その劈頭

「五十や六十で死ぬるのは死ぬるのでなく、むしろ殺されるのである。若い時には、外界に對する抵抗力が旺盛であるが、老年になると、これが弱くなり、外界に負ける。結局殺される譯なのだ。壽命といふものは、大體成熟に要した年月の六倍はある筈で、人間二十歳にして成人となると假定すれば百二十歳までは生きる事が出来る。ではどうしたら百二十歳の天壽を享樂し得るか。曰く抵抗力を保持してゆく、つまり若返る事だ」

といつて居る。博士の若返り法に就いては、その講演を度々聞いたことのある「木辛生」といふ人が東京朝日新聞(昭和五年六月二十三日及同二十四日)に「ヴオロノフ博士の若返り法を聴く」と題して次の如く述べて居る。原文の儘轉載する。

若返り法で名高いゾロノフ先生が来た、六月二十日、日佛會館で講演するといふので、拜聴に出かける。

私が、ゾロノフ先生の講話を聴くのは、これで二度目である。もしホテルの對談を加へたら三度目である。第一回は今から十年も前バリにおいて、其當時博士は、若返り法の學理を、動物試験によつて立證してゐたので、人類に應用した結果については、まだ多くの成績を發表する程度になつてゐなかつた。所が十年経つた今日、改めて先生の講話を聴くに及んで、その効果の著るしいのに驚いた。醫學の知識に乏しい私の筆が、どれだけ忠實に、博士の講話を紹介出来るか、不安ではあるが、多少とも參考になれば、幸甚である。

一分間に六七十位の鼓動を、晝夜間斷なく、數十年間續ける我等の心臓の働きは、考へれば、誠に不可思議な力である。また萬物の靈として、人類の智能の微妙な働きは、何によつて司とられるのであらう。これ等は皆、それ／＼の機能を働かせる腺の、内分泌によることは、今日の醫學の立證する所である。早い話が、動物試験によつて、副腎を除去すれば、忽ちに心臓の働きが止んでしまふ。甲状腺を取つてしまへば、今まで偉い頭腦の働きを持つてゐる者も、馬鹿になつてしまふ。さうかといつ

て、腦を分析した所で、前と變つてゐるのではない。たゞ甲状腺の分泌液に養はれなければ、頭腦の働きはなくなるのである。

又生れながら無格好な身體の發育は、咽喉の奥にある腦下垂體の變則な作用によることも、醫學の示すところである。かやうに人體の各機關は、腺の内分泌の微妙な働きによるのである。つまり人間が老衰するのは、さういふ腺の内分泌作用に變調を來すからであるから、若い腺を移植することが出来るれば、六七十歳の人も、三四十の若さに返ることが出来るわけである。

博士の實驗の著るしい例の一つは、十一二歳の雄羊に試みた結果である。羊の壽命は、大抵十四歳とされてゐるから、十歳を越えた羊は、人間でいへば八十歳以上の老齡であらう。これに對して二歳の羊の生殖腺を移植した結果、三月後には前の若さを復活した。殊に著るしいのは、黒毛があつたその雄羊に、白毛の雌羊を配した所、生れた五六頭の羊は、こと／＼く黒毛であつたことで、當り前ならば、既に死の運命にあつた老いたる羊が、よく若い羊の體力を復活し得た證據である。

又博士が、アルゼリアに行つた時に、もう廢物になつてゐた雄牛があつた。一體なら撲殺されてしまふ所であつたのだが、多年畜産界に貢獻すること多大であつた功績に免じて、老後をいたはつてや

つてゐたに過ぎなかつた。この雄牛に對して、若い牛の生殖腺を移した所、見る／＼うちに昔の元氣を回復して、再び御用を勤めるやうになつた。羊であれ、牛であれ、又馬にしても、優秀な種といふものは、人間の思ふやうに造れるものでないから、良種は何とかして、長く生存せしめねばならない。

この點から見て、ウオロノフ博士の實驗は、極めて貴重なものであらねばならぬ。動物に實驗して、かくの如き効果を擧げてゐる事實に徴して、これを人類に施して誤りなかるべきは容易に承認され得る。たゞ人類に適用する場合に、困難の起るのは、移植すべき生殖腺を何所に求むべきかである。畜類の場合には、若き凡種を犠牲にすればよいが、人間にあつては、重傷によつて死に瀕してゐる者とか、死刑囚などに求める外ないが、それとても、悪性の病毒などを持つてゐないとは保證が出来ない。そこで考へられるのは、人間に一番近い動物を利用することである。

植物の接木にしても、全く種の遠いものでは出来ない、りんごをならにつぐことは出来ないと同じく、動物においても、あまりに種の遠いものは、施すべからずである。

人類にもつとも近いものは猿である。その中でも類人猿と稱するゴリラ、チンパンジー、オーランウータン、ギボン等であるが、ゴリラは性猛惡にして御すべからずであるから、他の三種こそ適當で

ある。チンパンジーは、アフリカに多く、他の三種は、南洋から海峽植民地邊に多く産する。まづこの種の猿を、多數發育することが、先決問題である。

博士が、人間に施した實驗は數多いが、今著るしい例を擧げて見る。老朽者を若返らせた實驗を説く前に、早熟者を常態に戻した例を擧げる。ある所に、九歳の少年ながら堂々たる髯を生して、一見二十四五歳にも見える男があつた。九歳にして壯齡な人と同じ能力を持つならば、誠に結構で無理に子供に引戻す必要はないが、變態的發育であつたから、厄介である。診察して見ると、生殖腺が普通人よりも多く、三個あることがわかつたので、一つを除去したところが、二三月後には常態に戻つたといふことだ。

さて老衰者の若返り手術である。斷つておかねばならぬのは、一口に若返り法といふと、世には人體機關の一局部を意味するかに曲解する人があるかも知れないが、決してさうではない。あらゆる機關の若返りであることを忘れてはならない。英國の名ある一建築家が、七十歳を越えて、老來數理の頭腦が衰へ、職務に堪へなくなつたので、博士の手術を受けた所が、二年後には五十歳位の元氣に返つたといふことだ。

アルゼリアに旅行した時、その總督が、養老院が満員でもう收容力がないから、博士の手術によつて、若干名を退院させたいといふので、七十幾つかのヨボ／＼爺さんに、公開手術を施した。この男餘程の老碌ぶりで、手術前生れ故郷をきいて見たが、たゞストラスブルグ邊のどこかだ位な返事で心細いことおびたゞしかつた。然るに手術の結果は、驚くべし、三年後アルゼリアに行つて見ると、もう養老院はおさらばで、ある藥種屋に勤めてゐた。博士の長兄は本年七十八歳であるが、永くタシユケントの鑛山に技師として働いてゐる。七十二の時どうも健康が優れないといふので、政府の許可を得てパリに来て、博士の手術を受けた所が、今では昔の元氣で働いてゐるとて、送つて來た寫眞を見ると、二十年位前の若さである。

そこで疑問の起るのは「女はどうか」といふことである。それには極めて興味ある實驗が得られた。かつてある老軍人に、手術を施した事があるが、一三年たつと、夫人同道で博士の許を訪づれた。そして夫人のいはくが振つてゐる。

「先生は良人を若返らせて下さつたのは、有難う御座いますが、私がこのまゝでは全く罪です。シツクちやありませんわ」

といふので、如何にも御もつともあつて夫人に手術する事となつた。

女性の命は卵巢にあることは、素人にも分つてゐる、さて卵巢移植を施して見たが、その結果はあまり芳しくなかつた。こゝに男性と女性との間に著しい相違のあることが解る。男性にあつては、生殖腺の移植によつて、他の諸機能ごとくくを、若返らせることが出来る。けれども女性にあつては生殖腺の働きが、男性ほどの活力を持たないことである。よつて卵巢移植と同時に、甲状腺および腦下垂體をも移植して見ると、男性の場合と同じく、女性をも若返らせることが出来ることを發見した。然しあまり靈驗あらたかとなると、又考へもので、こんどは良人の方から苦情が出ないとも限らぬと、博士は笑ふ。

かく先生の手術の特効は、明かとなつたが、果して人間の壽命を延ばすことが出来るかといふに、それは程度問題である。大體動物の壽命は、成熟期に達する年齢の七倍とされてゐるから、人間も百二三十歳までは生きられる道理である。現に百歳以上の長命者はどの國にもある所をもつて見ても七八十歳で死ぬ人を、長命などいつてゐるのは誤りで、死ぬのではない、殺されるのである。もし何かの原因で殺されなければ、人間は百二三十歳までは生きられるのである。つまり若返り法は人間の

保ち得べき壽命の間、老衰の悲しみを經驗しないで、生きられるといふに過ぎないことは、斷わるまでもない。

『日本にはもつと長命させたい軍人などありさうなものだ』
と博士がいふので、私は

『眞平御免だ。日本には軍人でも政治家でも、早く御ひきとりを願ひたい老人が多過ぎる。フランスならポアンカレ氏などは、そのうちに若返らせておいた方が、よささうでせう』
といへば、博士うなづいて、その他の學者にももつと生かしておきたい人があるといふ。學者の方なら日本にも保存したい人物があるに違ひない。

4 スタンレー博士の若返り法

他の生殖腺を移植するといふ、ウオロノフ博士の若返り法と同様の若返り法が、亞米利加で發見されたと、本年(昭和五年)八月二十日サンフランシスコ發の日本電報通信社の通信で傳へられて居る。

その原文を轉載する。

若返り法の大家スタンレー博士は、サンクエンチン監獄の囚人を實驗臺として、山羊の生殖腺を、人體の胃部に注射して見た所、結果頗る良好だつたさうで、年はとつても死にたくない世の老人どもを隨喜刮目せしめてゐる。フランスの若返り學者ウオロノフ博士は猿のホルモンによる若返り法で、或る程度まで成功してゐるが、當地へ來たスタンレー博士の實驗を見ると、その効果が確實で、施術費が大衆的(材料が山羊だから容易く手に入る)なのに、スツカリ感心して仕舞ひ、言葉を盡して激賞してゐる。實際此の注射を受けると、七十才の爺さんが、俄に元氣つき、駢足競争などをやつて、歸つて行く程効験いやちこたさうな。

5 支那の若返り法が優れて居る

以上は、最近新聞紙上で報道された、西洋の若返り法の主なるものを擧げたに過ぎない。これを見ると何れも外部からの移殖であるが、そこにゆくと、支那は、世界で一番早く不老回春術が研究さ

れた國柄だけあつて、自然的に徹底して居る。斯うした外部からの移殖ではなく、

「人間原有、即ち持つて生れて来た生殖機能を、その儘に、いつまでも保有するといふ自然的な若返り法である。」

前に詳記したやうな方法を以て、生殖の根源を枯衰せしめぬやう、いつまでも滾々として湧出する清泉の如く、永劫無限に「性」の源泉が盡きぬやうにするのである。言換れば、

「天地自然の方則にのつとり、宇宙陰陽の大理に基き、常に若く、常に老ずして、この人生を長く、花やかに、楽しみ得るといふ大理想に到達する」

のであるから、西洋の若返りなどは、雲壤の差があるのである。

それかあらぬか西洋でも、最近手術による方法よりも、薬品による若返り法が研究されるやうになつて来たらしいが、結局はその元祖である支那の不老回春術が、現代科學的に研究されることになのである。本書を讀んだ諸君が、この道にかけて一日の長となることは、遠いことではない。

現に東京生物化學研究所長田口勝太博士は、昭和四年九月二十日の報知新聞紙上に

「人間の老衰する原因は、コレステロールが沈着するからである。これを除くには、漢藥の方がよい」

といつて、次の如き意見を發表されて居る。

「秦の始皇帝が不死の妙藥をさがして来いと家來に命じたといふ事は、我がまゝな皇帝の自分勝手な無茶な望みとして誰でもが一つの馬鹿話のやうに思つてゐますが、實際は誰も彼も長生きできるものなら、少しでも長生きしたい。老いたくないと望まないものはありません。ところが現實にはもう四十にもなれば、すつかり老人氣分になつて、一寸でも身體の調子が悪いやうな事があると、もう年が年だから仕方ないとあきらめてしまつて、老衰するのを積極的に防がうとは努力しません。それも片一方では、九十歳や百歳まで生きて中々元氣な人があります。これは一體どうした事でせうか。最近の醫學の研究では、ほとんどすべての老衰の根本をなすものは、腎臟、性腺等の毛細血管に新陳代謝の粕である所の「コレステロール」が、沈着した結果であるといふ事が分りました。そしてなほ研究の上では、これを早く豫防し、または一定の程度に取除く事が出来る事になつてゐます。これが成功すれば、老人に對し、否人類にとつて、一大福音となるわけですが、近頃段々研究の結果を見ますと、その「コレステロール」の除去劑は、洋藥よりも漢藥の、いはゆる不老長壽藥等に面白いものが二三あるやうです。支那四川省に、季慶雲といふ二百五十二歳の老人が元氣であるのを發見したとい

ふ話も、この老人が「長生仙草」とかいふ藥草を、食べてゐるからだといふことです。その眞偽はともかくも、右のやうな次第で、老衰といふ現象も防ぎ得ることになつて來たのですから、醫者としても萎縮腎とか、血圧亢進とか、老人性喘息とか、中年後の精神病、糖尿病、難聴遠視等々の老人に共通な病氣を、一まとめにして、たとへば小兒科といふのに對して「老人科」といふものを作り、一層熱心に取扱ふやうにせねばなりません。從來老衰の對策としては沃土劑とか性慾劑とか一時的の血壓降下劑とかで、いゝ加減に取扱ふといふ風がありますが、これだけではいけません。そして家庭としてももう老人だからといつてほつとかないで、老人科の専門醫に相談するやうにすれば、いつでも元氣で生きて行くことが出來ませう。」

誰も斯うなることを希望するであらう。田口博士の如き先見の明ある學者といふべきである。本項はこれで結び「秘藥篇」に移る。

第三 秘 藥 篇

其一 支那に於ける不老回春秘藥

1 不老回春秘藥には王道と霸道とがある

前記で、支那に於ける不老回春術の、第一の「神氣を養ふ」こと、第二の「合理的性交」を終つたので、最後の「藥餌に據る」ことに就て述ぶる。

支那に於ては「不老回春術」の研究が發達せる如く、これに伴ふ「秘藥」の研究も遂げられて居る。不老回春を教へた「房中術」に「正道」と「邪道」とがある如く、秘藥にも正邪がある。正道を「王道藥」といひ、邪道を「霸道藥」といつて居る。「王道藥」は、持続的な強壯藥で、服藥を續けて居る内に、腎を補ひ、自然の間に、強健となり、若返つて、長生するといふ正しい藥である。「霸道藥」は、

一時的催情を目的とするもので、神経の中樞を興奮せしめるとか、局部に塗布し、又は嗅覚で刺戟し性慾を亢奮せしむるといふ邪薬である。

例へば「人參」「車前草」「淫羊藿」「何首烏」といつたやうな、純粹な藥草を主劑とせる藥が、「王道藥」である。「阿片」とか「大麻」のやうな麻酔藥、又は昆虫の「斑猫」から製した「カンタリス」のやうな、局部的塗布劑とか、「麝香」「龍涎香」の如く、嗅覺を以て刺戟する藥品が「霸道藥」である。さうすると、王道藥は「内服」のみであるが、霸道藥となると「内服」と「外用」の二種に分れて居る。

2 不老回春に用ゆる珍藥、秘藥、奇藥

其他に、王道とも霸道とも類別のつかぬ強壯藥がある。それは、鹿の袋角である「血片」とか、「海狗の腎」とか「山獺」「蛙」「山羊」「雞」の陰莖や睾丸等である。これにはいろいろの説があるが、其の用法の如何によつては、正藥ともなり、邪藥とも變ずるのである。

また「藥酒」が有る、藥酒には二種あつて、「植物性」を主としたるものと、「動物性」を主としたも

のとである。植物性より取つたものは、五加の皮を入れた「五加皮酒」とか、桑の實で作つた「桑椹酒」等がある。動物性より取つたものは、蛇で作つた「蛇酒」蛤蚧で作つた「蛤蚧酒」、虎の骨で作つた「虎骨酒」等である。これ等は、主として王道に屬するが、これを使用の如何によつては霸道に變ずる。

其他「奇藥」とも稱すべきものがある。それは處女の最初の月經で作つた「紅鉛」とか、産兒の胞衣で作つた「紫河車」とかいふ如きである。唐の「韓退之」は文公と謚された程の文豪であるが、「火靈庫」と稱する催春藥を用ゐて命を損じた。その製法は、「硫黃」の粉末を、粥飯にかき廻して、これを雄雞に啖はする。そして牝交させぬこと千日にして、これを煮て食ふのださうだ。なかなか靈驗あらたかであつたといふことだ。古代羅馬では「ヒツポマイ」と稱して、牝馬の胎盤を乾燥して粉末にした媚藥が有つた。こんなのは勿論霸道に屬する。

3 仙家の秘藥「金丹」と「仙藥」

それと見逃してならぬことは、植物、動物、以外に礦物性の秘薬があることである。不老回春に要する秘薬の「金丹」がそれである。「金丹」とはどんなものかといふに、道士が金石を煉つて作つた薬である。「抱朴子」に、

「黄金を火に入れ、百鍊して銷さず、之を埋むれば、天と共に朽す、是を金丹といふ。」

とある。仙人となつて不老の法を得るには、是非とも金丹を飲まねばならぬことになつて居る。「仙經」に、

「草木の葉を服すること數百歳なるも、神丹を怠るときは、終に仙となる能はず」

とか、「抱朴子」に

「偏見の道士は、往々交接の術を守りて、以て神仙たらんことを規り、金丹の上薬を作らざるは、これ愚の甚しきなり」

とある。薬草だけでは仙人になれぬといつてゐる。老子の師「元君」の作といふ「太清觀天經」には、
「長生の道は、祭祀をなし、鬼神に事ふるに在らず。導引と、屈伸とに在らず。昇仙の要は、神丹に在り、之を知ること易からず、之を爲すこと實に難し。若しよく之を作さば、長存すべし。」

といひ「九鼎神丹經」には、

「呼吸導引し、又草木の葉を服すれば、延年を得べきも、死に至りては、之を免る能はず、神丹を服するときは、人壽をして天地とともに無窮ならしめ、雲に乗り龍に駕し、大空に上下することを得べし」

と述べ、不老長生するにも、羽化登仙するにも、必ず金丹に據らねばならぬと説いてある。この位金丹は、仙家にとりて貴重な薬となつて居る。これに就ては、項を改めて詳述することにする。

「仙薬」といふのは、金丹の如く特種のものではなく、前に述べた、動、植、礦の三種の中から、仙家に必要な秘薬を選んだものである。

其二 不死の秘薬仙液 「金丹」

1 「金丹」を説いた得難き金玉の資料

金丹に就ては、前項で其の大略を述べて置いたが、尙ほこれを詳かにせんが爲め、「抱朴子」の

『金丹』の巻の全文を譯載することにした。抱朴子の著者葛洪は『金丹の製法を解する者は、天下に自分たゞ一人である』とまで、自信を持つて本編を述べて居る如く、世にこれ程、詳しく金丹を説いた文献は他にない。支那の不老回春を説く上に、缺くべからざる金玉の資料である。そこで、この全文を掲げて、斯道研究者の参考に供するのである。

これを便宜上、數項に分け、一項毎に解説をして置いた、本文の前の六號活字がさうである。小見出は勿論私が便宜上つけたものである。煩を避けるため、本文中『抱朴子曰く』を數箇所削除した。全文を読むことを面倒とする人は、解説を見てから必要と思つた項だけを拾ひ讀をして貰ひたい。偕て次からが『抱朴子』である。

2 『金丹の道』を知らねば不死の法は解らぬ

抱朴子の著者葛洪が、天下を周遊して數百人の道士に會つたが、皆不死の秘藥である『金丹』の製法を知らぬ。それでは仙を學んでも『不死の法』は會得できぬ。自分は、仙人から秘經と秘藥とを授つて修業した。そこで

世の中に『不老の法』を解する者は、結局自分だけだといふのが、本項の記述である。

抱朴子曰く。余、養生の書を考覽し、久視の方を鳩集す。會て披き讀みし所の篇數は、千を以て計ふるに至る。皆な還丹金液を以て、大要と爲さるものなし。然らばこの二事は、蓋し仙道の極みなり。若し之を服して仙たらざれば、古來より、仙といふものなけん。往昔中原喪亂し、人人奔竄四出せざるなし。余、徐、豫、荆、襄、江、廣(六州の名)の間に周旋し、流俗の道士を閲見すること、數百人に及ぶ、或は素よりその名譽高くして、青雲白日も、なほ及ばざる者あるも、大概相似たること一の如く、その知見の深淺有無また同じ。

各々數十卷の書あるも、悉く之を解する能はず、爲に寫して之を蓄ふるのみ。時に氣を行らして胎息し、或は穀を斷じて、諸々の本草的藥方を服するも、所有の方書は、略ほ同文にして、皆な『道機經』ならざるなし。彼等は此を以て秘書となして云ふ。これは尹喜(關令尹喜にして老子の弟子)の選する所なりと。余之に告げて曰く。こは魏の軍督(官名)王圖の選にして、尹喜に非ず。王圖は了に上藥を知らず、唯だ氣を行らし室に入り仙を求めんと欲して、この道機經を作り、謂へらく、仙道の極致なりと。これ人を誤らしむるの甚しき者なり。

余かつて往々諸道士に、「神丹金液の事及び三皇文〔道教の咒文〕天神地祇を召すの法」を問ふも、了に一人も之を知るものなし。然るにその大半は、誇誕自ら譽め人を欺くや、曰く、已に長壽と。又曰く、曾て、仙人と遊ぶと。之を事實に徴するに、信すべき者甚だ尠なし。或は金丹の説を聞くも、今日之を得る者あるをいはずして、以爲へらく、上古の仙人のみ之を曉りしならんと。或は唯だ異端外道を知りて、眞經を得ざるものあり。或はくたくしき煉丹の方法を得て、以て丹法の極致となすものあり。

昔、左元放〔左慈の字〕天柱山の中に於て精思せしとき、神人之に金丹の仙經を授く。漢末の亂に會ひて、金丹を合作するに違あらず、名山に隠れて斯道を修めんと欲す。余が従祖葛仙公、元放より之を受く、「太清丹經三卷」、「九鼎丹經一卷」、「金液丹經一卷」即ち是なり。余が師鄭君は、葛仙公の弟子にして、又本經を受く、然れども家貧にして、藥を買ふの力なし。余之に親事し、爲に洒掃の勞を執ること積年、乃ち馬迹山の中に於て、壇を築き盟をなして、本經を受け、竝せて諸の口訣をも授かる。故に江東地方には本經なく、又他の道士も之を知るものなし、唯だ余あるのみ。余之を傳ふること二十餘年、唯だ家に擔石の資なく、その藥を買ふこと能はず、長く嘆ずるばかりなり。金を積み

て櫃に盈ち、錢を娶むること山の如き人あるも、この不死の法あるを知らず、たとひ聞くも、決して之を信するものなし。

3 金丹金液を服さねば長生はてきぬ

「金丹の道」を知れば群小の方書を見る必要がない。しかし金丹を作るには容易の業でないから、世人は「下藥」を用ゐるが、下藥を飲んで長生は出来ない。下藥の力を持って登仙せんとするは、恰も驢馬に乗つて疾風を追ふ如く、また籃の舟に掉さして大川を渡ると同様であると述べ。金丹の靈效を説く。

それ玉飴を飲まば漿苻の薄きを知り、崑崙山の高きを觀れば、丘蛭の卑きを覺ゆ。既に金丹を道を覽れば、人をして小小の方書を視るを欲せざらしむ。然れども此等の上藥は、之を辨ずること容易ならず、故に暫らく下藥を服用して、一時を支持するに止まるも、人をして長生を遂げしむること能はざるなり。故に老子の訣言に云ふ、「還丹金液を得ずんば、虚しく自ら苦むのみ」と。夫れ五穀なほ能く人を活す、人之を得ば生き、之を絶たば死す、況んや上品の神藥に於てをや。その人に益あること

豈に五穀に萬倍せざらんや。

また丹の物たる、之を焼くこと愈よ久しくして、變化愈よ妙なり。黄金は火に入りて百鍊消せず、之を地中に埋むるも永遠に朽ちず、この二藥〔丹と黄金なり〕を服して身體を鍊る、故によく人をして老せず死せざらしむ。これ假りに外物を求めて自ら堅固にすること、恰かも脂の火をして消えざらしむるが如し。脚に銅青を塗りて水に入れば、その肉腐らず、これ銅の勁を借りて、肉の弱を拵ぐなり。金丹の人身に於ける、精を榮にして生を衛ること、銅青を、皮膚に塗り附くるの比に非るなり。世間の心なき者は、多く至道を信ぜず、萬一好事の者あるも、この法を實見せず、名師に値はざれば天下に、此の如き妙法あるを知るに由なし。

余今金丹の大略を鈔録して、以て後の同志者に示す、其れ勤めて之を求むべし、淺近の法を守りて以て世を渡るべしと謂ふことなかれ。若し遂に名師に遇はずとも、唯だ意を息めて永遠の生命を得んことを務むべし。必ず自ら久しからずして、潢汚を出でて滄海に浮び、螢燭に背きて日月に向ひ、雷霆を聞いて布鼓の陋を覺え〔布にて張りたる鼓は、大聲を發することができぬ。〕巨鯨を見て寸鱗凡貝の細を知るに至らん。若しそれ嘸嘸〔煩はしきさま〕として先づ悟ることなく、下藥の力を持

みて、虚空に昇騰らんことを規るは、何ぞ足なえたる驢馬に策うちて、疾風を追ひ、籃の舟に掉さして、大川を濟るに異ならんや。

4 金丹は總ての藥よりも優つてゐる

種々と丹藥を煉る方法があるが、いづれも金丹には及ばぬ、到底比較にならぬのである。金丹の長生に致あることは、神仙のみ知つて、俗人はこれを知らぬ。之を告げても信ぜぬ。上古の真人が説いた『不死の法』も同様に、俗人は一向信ぜぬ。世は全く墮落して、聖人の教を聞くものもない。世人は日夜享樂にのみ耽つて、死地に臨んで居るが、敢て『養生の法』を求めやうとせぬ。斯ういふ世の中であるから、自分が世を憂いて著した本書(抱朴子)は、たゞ識者に示すのみで、これ等の流俗から信ぜられなくともよいのだ。

又た諸々の「小餌丹方」は甚だ多し。之を作るに淺深あり、故に力勢〔效驗といふが如し〕同じからず、優劣ありといへども、その金丹に及ばざるは、猶ほ一宿の酒の、九醞〔酒の製法にして西京雜記に見ゆ〕に及ばざるが如し。然れどもこの小餌丹方すら、猶ほ草木より成る上藥に勝ること遠し。

凡そ草木は、之を焼けば即ち燼となるも、丹砂は之に反して水銀となり、又た積變して復た丹砂となる、その草木を去ること遠し。故に能く人をして長生せしむ。神仙獨りこの理を見る、その俗人を去ること亦何ぞ難哉なるや。

世人は見聞少なきを以て、怪むこと多し、故に或は水銀の、丹砂より出づることを知らず、之に告ぐるも、終に肯へて信ぜずして云ふ。丹砂は本と赤物なり、何によりてこの白物を成すことを得んと。又云ふ。丹砂はこれ石のみ、今諸の石を焼けば皆灰となる、丹砂、何ぞ獨り水銀となるを得んやと。此の淺近平易の事すら猶ほ曉る能はず、その仙道を聞いて、大に之を笑ふは、亦た宜ならずや。上古の真人、將來の教ふべき者を惑み念ひて、爲に詳細なる方法を作り、之をして死亡の禍を脱せしめんと欲す、實に至言と謂ふべし。然るに俗人終に肯へて信ぜず、以て空文となす。若し空文ならば、九轉九變など、凡べて日數の成る所、皆な方の如くなるを得んや。真人の之を知る所以は、誠に庸近の心を以て、思求すべからざるなり。

余少くして方術を好み、重きを負ひ遠きに歩して請問し、異聞を得るごとに自ら喜び、毀笑せらるれども戚となさざるなり。後生畏るべし、何ぞ來者の今に如かざるを知らんや。故に之を著して、以

て識者に示す。豈に苟くも奇怪を尙び空言を崇飾し、之をして世に行はしめて、流俗に信ぜらるゝことを求めんや、陽春の盛氣も、枯朽を榮えしむる能はず、上知も下愚を移す能はず、書は曉る者に傳はり、事は識者に貴ばる。形くぬりたる弓は美なるも、農夫は之を得て鳥を射とり、衰龍の衣は貴とくとも、南蠻は之を衣て薪を負ふは、皆な無知の業にして、今さら致しかたもなし。

世人は飽食日を送り、その行ふ所は、儒墨の學にもあらず、治むる所は進徳の勤にもあらず、唯だ逍遙遊遊して、以て年月を盡くす。その營む所は榮譽に非れは、利益のみ。或は蒼鷹を飛ばし、黃犬を走らして禽獸を原中に狩獵し、或は盃觴を留連して、羹を沸し、或は美女とともに、絲竹管絃に荒み溺れ、或は綺紈錦繡に身をやつし、或は弓を引いて筋力を弊らし、或は博奕して業務に勤勉ならず。至道の言を聞くも、醉ふが如くにして知るなく、大道の論を觀るも欠伸して晝睡る。その身を修めず、動もすれば死地に之きて、肯へて養生の法を求問せず、自ら之を割き削り、之を煎り熬り、之を憔悴しめ、之を瀉し涸れしむ。而して有道の士は、自らその知る所を寶秘して、人に求むるなし、亦何ぞ肯へて之を彼等俗輩に語ることを強めんや。

5 長生の法が有つて長生せぬ理由

世には長生の法があるのに、世人の多くはどうして長生せぬのかといふ疑問に對し、それはその道を疑つて信ぜず、之を行はぬからであると説く。

世人常に云ふ。若し果して長生を得べくんば、古人の富貴なるもの、已に當に之を得べし。而るに之を得る者なきは、この道なきが故なりと。これ古の富貴なる者も、亦た今の富貴なる者と同じく信ぜず求めざるを知らざるなり。彼等は皆な目前の欲する所を急となす、亦何ぞ能く之を得んや。假令意を決して、命の延ばすべく仙の得べきを信する能はずとも、亦何ぞ之を試みるを惜むべけんや。之を試みて小效あり、一三百歳の壽を得たるすら、猶ほ凡人の少天するに愈らずや。天下の事、萬端にして、道術の明かにしがたきこと、他事より甚し、何ぞ凡才の心を以て、世間に必ず長生の道なしと斷言するを得んや。

—(話秘春回老不)—

若し世人の信ぜざるを以て、之れなしと謂はば、世上の智者又何ぞ太だ多きや。今若し道意を識り

—(丹金液仙藥秘の死不)—

て、之を修求する者あらば、必ず至愚にして、世人に及ばざる者と爲すべきか、否な、決して然らざるなり。又或は長生を求むるに苦慮するも、憚し之を得ざる時は、世人より理に暗く迷に惑ふ者として、譏笑せらるゝを恐れ、故らに之を爲さざる者あるべし。然れどもかゝる求道者の思慮の中にも一失なしとは斷言すべからず。若し之を求めて、天下實に不死の道あるを知らば、すでに之を得たる者の笑ふ所とならざるか。日月も周く照らす能はず、人心何ぞ孤り信すべけんや。

6 神丹を練る秘法と「九丹」の靈驗

此項は、黄帝の「九鼎神丹經」に據る、神丹を練る秘法と「九丹」の靈效とを説いて居る。

黄帝の「九鼎神丹經」を按ずるに曰く、「黄帝之を服して遂に昇仙す」と。又云ふ、呼吸道引し、又草木の藥を服すれば、延年を得べきも、死に至りては、之を免る能はず。神丹を服するときは、人壽をして天地とともに無窮ならしめ、雲に乗り龍に駕し、大空に上下することを得べしと。黄帝之を女子に傳へ、且つ戒めて曰く。この道は至つて重し、必ず賢者を撰んで、之を授けよ。苟くもその人

に非れば、玉を積むこと山の如しと雖も、之を告ぐるなかれ、之を受くる者は、金人金魚を、東流の水中に投じ、血を啜りて誓盟をなすべし。神仙の骨相なき者は、この道を見ることを得べからざるなり。

「神丹」を合するには、當に名山の中、無人の地に於てすべし。同伴者あるも、三人を過すべからず。先づ齋すること百日、五香〔一株五根、一莖五枝、一枝五葉、一葉の間に五節ある香木の名〕に沐浴し、心身を清潔にして、穢汚に近づくなかれ。又た俗人と往來するなかれ。又た不信者をして之を知らしむるなかれ。又神藥を誘るときは成らず。かくして若し成らば家を擧げて、皆な仙たるを得べし、但に一身のみならずなり。世人神丹を信ぜずして、反りて草木の藥を信ず、それ草木の藥は、之を埋むれば即ち腐り、之を煮れば即ち爛れ、之を燈けば即ち焦がる。自ら生くる能はず、何ぞ能く人を生かさんや。九丹は長生の要にして、凡人の見聞を得べきに非らず、億兆の人々、徒らに蠢蠢として富貴を貪るを知るのみ、豈に行尸走肉と謂はざるべけんや。又た神丹を合するときは、當に祭るべし、その祭には、圖法一卷あり。

第一の丹をば「丹華」と名づく。……當に先づ玄黃を作るべし、雄黃水、礬石水、一鉢を以て汞水

銀よりなる藥〕を作り、戎鹽、鹵鹽、礬石、牡蠣、赤石脂、滑石、胡粉、各々數十斤〔斤に同じ〕を和し、六一泥を以て之を封じ、火くこと三十六日なり。成りて之を服すれば、七日にして仙人となる。又た玄膏を以てこの丹を丸め、猛火の上に置くときは、須臾にして黄金となる。又た二百四十銖を以て水銀百斤に和し、之を火けば亦た黄金となる。此の如きは藥成るの證なり。然らざれば、實に藥を封じて之を火くこと、前の日數の如きときは、成らざるなきなり。

第二の丹をば「神丹」と名づけ又た「神符」ともいふ。……之を服すること百日にして仙たるを得。この丹を足下に塗れば、自由に水火の上を行くことを得、之を服すること三刀圭なれば、三尸〔人身の中に隠れて、その罪惡を天帝に上申する三正の蟲〕九蟲〔三尸蟲の類ならんも其の詳は不明〕皆な即時に消化して、百病立どころに癒ゆ。

第三の丹をば「仙丹」と名づく……之を服すること一刀圭にして、百日を経るときは仙となる。六畜も之を吞まば、亦た終に死せず、又よく五種の武器を却く。服すること百日なるときは、仙人玉女鬼神皆な來り侍る。之を見るに人の形の如し。

第四の丹をば「還丹」と名づく……服すること一刀圭にして、百日を経れば仙たるを得。朱鳥鳳凰

其上に翔り飛び、玉女來り傍ふ。一刀圭を以て水銀一斤に合し、之を火けば、立どころに黄金となる。此の丹を煉りたる金錢を使用するときは、即日また本主に還へる。この丹を目上に書するときは、百鬼之を見て皆走り避く。

第五の丹をば「餌丹」と名づく……之を服すること三十日にして仙たるを得。鬼神來り侍し、玉女前に至る。

第六の丹をば「鍊丹」と名づく……之を服すること十日にして、仙たるを得。又汞と和して、之を火けば黄金となる。

第七の丹をば「柔丹」と名づく……服すること一刀圭にして、百日を経るときは仙となる。缺盆汁と和して、(缺盆は覆盆子なり)之を服するときは、九十歳の老翁も亦よく子を生む、鉛と合して、之を火けば黄金となる。

第八の丹をば「伏丹」と名づく……之を服すれば、即日に仙となる。棗の核ほど、この丹を持するときは、百鬼恐れ避く。又、丹を以て門戸に書するときは、あらゆる悪魔敢へて前まず、又盜賊虎狼を避くることを得。

第九の丹をば「寒丹」と名づく……之を服すること一刀圭にして、百日を経れば仙となる。仙童仙女來侍し、飛行輕舉するに、羽翼を用るす。

凡てこの九丹の中、唯だ其の好む所に任せて、一丹を得れば、仙となるを得、必しも悉く之を作るを要せず、凡て九丹を服する時は、この土を去りて、天に昇らんとするも、又た且らく人間に止らんとするも、其の人の任意なり。皆な少しの空隙もなき所すら、自由に出入するを得て、何物と雖も、之を害するを得ざるなり。

7 『太清の神丹』と『九轉丹』の秘法

老子の師である元君より出でたる『太清の神丹』といふ長生の秘薬の煉法と、この法を以てすれば黄金を作ることが出来る。その場合の祭祀の方法及び九轉の丹の秘法を説いたものである。

復た『太清の神丹』あり。その法は元君より出づ、元君は老子の師なり。『太清觀天經』に九篇あり、その上三篇は教受すべからず、その中三篇は世に傳ふべき人なし、常に之を三泉の下に沈む、下三篇

は、正にこれ丹經上中下凡べて三卷なり。元君は大神仙なり。能く陰陽を和し、鬼神風雨を役使し、九龍と十二の白虎に駭駕し、天下の衆仙は、皆な之に隸屬す。猶ほ自ら言ふ、これ皆な道を學び丹を服するに本づく、自然に非るなりと。況んや凡人をや。

その經に曰く。上士にして道を得たる者は、昇りて天官となり、中士にして道を得たる者は、崑崙山に棲集し、下士にして道を得たる者は、世間に長生す。民愚にして信ぜず。虚言なりと思ひ、朝より暮に至るまで、唯だ死を求むるの事を作して、了に生を求めず。然らば天豈に強ひて之を生かさんや。凡人は唯だ美食好衣擊色富貴を知るのみ、心を恣にし欲を盡くし、奄忽終没す。慎んで神丹の事を、この輩に告げ、彼等をして道を笑ひ眞を謗らしむるなかれ。丹經を傳ふるに、若しその人を得ざれば、身必ず不吉なり。若し篤信する者あらば、之を分與すること可なるも、その方に至りては、輕ろしく傳ふるなかれ。この道を知らば、王侯の貴位も何かあらん。

神丹既に成るときは、但に長生するのみならず、又た黄金を作るべし。金成るときは、先づ大祭を設くべし。其祭には別法一卷ありて、九鼎の祭とは同じからざるなり。祭には、左の如く別々に金を稱りて、各々その名稱を檢署せよ。

天に禮するときは二十斤。

北斗星には八斤。

井神には五斤。

河伯には十二斤。

門、戸、閭、鬼神、清君〔清君は不明〕には各五斤。

凡べて、八十八斤にして、餘の十二斤をば、好き草の囊に盛り、吉日を選び、都市の繁華なる時に於て、沈黙して、之を衆人の中に棄て去り、徑ちに去りて、復た顧みるなかれ。この百斤の外の餘金は、その任意に使用することを得るも、前述の如く、先づ金を以て神を祀らざるときは、必ず殃咎を被る。

又曰く「長生の道」は祭祀をなし、鬼神に事ふるに在らず。道引と、屈伸とに在らず。「昇仙の要」は、神丹に在り、之を知ること易からず、之を爲すこと實に難し。若よく之を作さば、長存すべし、近代漢末に於て、新野の陰君〔陰長生をいふ〕この太清丹を合して、仙となる。その人は儒生にして才思あり、善く詩及び丹經の贊を著し、又た道を學び師に隨ふの本末を序述す。又たその知人の仙と

日月には五斤。

大乙星には八斤。

竈神には五斤。

社〔土地の神〕には五斤。

なる者四十餘人を列記して、甚だ分明なり。この太清丹を作るは、九鼎丹を合成するよりも難し。然れどもこれ白日昇天の上法なり。之を成すには、當に先づ華池、赤鹽、良雪、立白飛符、三五神水を作りて、火を起すべし。

一轉の丹、之を服すること三年にして仙となる。
 二轉の丹、之を服すること二年にして仙となる。
 三轉の丹、之を服すること一年にして仙となる。
 四轉の丹、之を服すること半年にして仙となる。
 五轉の丹、之を服すること百日にして仙となる。
 六轉の丹、之を服すること四十日にして仙となる。
 七轉の丹、之を服すること三十日にして仙となる。
 八轉の丹、之を服すること十日にして仙となる。
 九轉の丹、之を服すること三日にして仙となる。
 若し九轉の丹を取りて、神鼎の中に内れ、夏至の後に、之を爆し、朱兒二斤を蓋の下に内れ、伏し

て之を伺ひ、日光に照らすこと須臾なれば翕然として俱に起り、五色の神光きらめきわたりて、還丹となる。之を服すること一刀圭なれば、即日天に昇る。又土釜の中に九轉の丹を封じこめ、糠火もて之を火く。その方法は、文火より、漸々武火に變ずべし。その一轉より九轉に至るまで、遲速各々日數の多少あり、その轉數少なければ、藥力足らず、故に服藥の日も自ら多くして、随つて仙となること遅きも、轉數多き者は、之に反す。

8 『九光丹』と『五靈丹』の秘法と靈驗

此項は、『太清經』の中巻に詳記せる『九光丹』と、『五靈丹經』に述べたる五法の煉丹秘法と、其の效驗に就いて説いて居る。

又た『九光丹』といふ者あり。九轉と成法を異にするも、大略相似たり。之を作るの法は、當に諸藥を合し、之を火いて五石を轉すべし、五石とは丹砂、雄黃、白礬、曾青、慈石なり。一石ごとに五轉すれば、各々五色をなす、故に凡べて二十五色となる。その重さ一兩ごとに、之を分ち盛る。死後

まだ三日に満たざる人を起さんとせば、青丹一刀圭を取りて水に和し、以て死人を浴せしめ、又一刀圭をその口に注ぎ内るときは、立どころに生く。行厨を致さんとせば、黒丹を取りて水に和し、以て左手に塗れば、その求むる所の食品の何たるを問はず、口づから命するが如く、自ら至る。形を隠し、未然の事を先知す。

又た永年不老を欲せば、黄丹一刀圭を服すべし。坐ながらにして千里の外を見、吉凶を知り、その他人生の宿命、盛衰壽夭、富貴貧賤を知ることを得、その法は具さに「太清經」の中卷にあり。

その次に「五靈丹經」一卷ありて、五法を載す。丹砂、雄黄、雌黄、石硫黄、曾青、礬石、慈石、戎鹽、大乙禹餘糧を用ふ。之もまた六一泥、及び神室の祭醮〔醮は神に供へたる酒〕を用ひて之を合する三十六日にして成る。又五帝符を用ひ、五色を以て之を書すれば、人をして死せざらしむ。但だ太清、及び九鼎の丹薬に及ばざるのみ。

9 二十六種の丹法と其の效驗

岷山の丹法。務成子の丹法。羨門子の丹法。立成の丹。伏丹の法。赤松子の丹法。白石先生の丹法。康風子の丹法。崔文子の丹法。劉元の丹法。樂子長の丹法。稷丘子の丹法。李氏の丹法。尹子の丹法。太乙の招魂魄丹法。采女の丹法。墨子の丹法。張子和の丹法。綺里の丹法。玉柱の丹法。肘後の丹法。李公の丹法。劉生の丹法。王君の丹法。陳生の丹法。韓終の丹法の二十六種の丹法秘法と、その效驗に就て述ぶ。原書には「又た××の丹法あり」とあるも上の「又た」と下の「あり」を削る。

〔岷山の丹法〕……道士張蓋踏といふもの、思を岷山の石室に精しくして、この方を得たり。その法は黄銅を鼓冶して、以て方諸を作り、月中の水を承け取り、水銀にて覆ひ、日精もて之を火く、長く服するときは死せず。又たこの丹を取りて、雄黄銅燧の中に置き〔此の一句の文意不明〕覆ふに汞を以てし、之を曝すこと二十日の後、發きて之を治かすに井華水を以てす、小豆許りの分量を服すること百日なれば、盲者も視ることを得、百病自ら愈え、白髪も黒くなり。落齒も復び生ず。

〔務成子の丹法〕……巴沙汞を八寸の銅盤の中に置き、土爐を以て炭を三方に盛り、壺を以て盤を支へ、壺以枝盤の文意不明〕硫黄水を灌ぎて常に泥の如くならしむ。服すること百日なれば、死せ

す。

〔羨門子の丹法〕……三升の酒を以て、一斤の丹と和し、之を曝すこと四十日、之を服すること一日なれば三蟲百病立どころに下る。服すること三年なれば、仙道乃ち成る。必ず玉女二人來り侍す之を使役して、行厨を致さしむべし。この丹は、百鬼及び四方の死人の殃を厭ふべし。蚌居宅を害することあり、或は妨害となる土功などに出會ふときは、その方角に向つて、この方丹を懸くれば患なし。

〔立成丹〕……九首即九轉あること、九鼎に似たれども、その效は之に及ばず。その要は、雌黃雄黃を焼き、銅鑄の器に盛りて、之を覆ひて三歳の後、苦酒に漬くること百日なるときは、器中に長さ數分の赤乳或は五色の琅玕をも生ず。取り理めて之を服すれば、人をして長生せしむ。又、菟絲と調合すべし。菟絲初生の根の兔に似たるものを取り、その血をしほりて、之に和し以て服するときは、變化自在なり、又和するに朱草を以てす。一たび服するときは、能く虛に乗りて雲に歩す。朱草の狀は小棗に似て、長さ三四尺、枝葉皆赤く、莖は珊瑚の如し。多く名山の巖石の下に生ず。之を刻めば汁流れて、血の如し。玉及び八石金銀をその中に投ずれば、立どころに

泥の如く固まり、久しくすれば水となる。金を投ずれば金漿となり、玉を投ずれば玉體となる。之を服すれば、皆な長生す。

〔伏丹の法〕……天下の諸水には、名丹あり、南陽の丹水の如き、これなり。その中に丹魚を生ず。

夏至に先だつこと十日の夜、之を伺ふときは、丹魚必ず水側に浮ぶ、赤光上照して赫然火の如し。網すれば得べきも、多きを食るなかれ、その血を足に塗れば、水上を歩行し、淵中に長く居るを得べし。

〔赤松子の丹法〕……千歳の菓汁及び攀桃汁を以て丹を淹け、津液なき器中に置き、綿密なる、縑帛もてその口を蓋ひ、之を地に埋むること三尺にして、その間百日なり。その後梓木の赤實を絞り其の汁を和して、之を服すれば、面目鬚髮をして赤色をなし、長生せしむ。昔し中黃の仙人に赤鬚子といふ者あり。豈に之を服したるに非るか。

〔白石先生の丹法〕……未だ毛羽生れざる鳥の雛を取りて、牛肉を和したる眞丹を吞ましむ。長ずるに及びて、その毛羽皆赤し。乃ち之を殺して陰乾にすること百日の後、毛羽とともに、之を搗く。一刀圭を服すること百日にして、五百歳の壽を得。

〔康風子の丹法〕……羊、鳥、鷄卵、雀血と少室山の天雄汗とを調合して、之を鷓卵の中に内れ、漆もて之を塗りて、雲母水の中に内ること百日なれば、化して赤水となる。その一合を服すれば、輒ち百歳の壽を増す。歳ごとに一升を服すれば、千歳に至る。

〔崔文子の丹法〕……丹を鷲の腹中に内れて之を蒸す。服すれば人をして年を延ばさしめ、長く服すれば死せず。

〔劉元の丹法〕……丹砂を立水液の中に内ること百日なれば、紫色となる、之を握るも手を汚さず。又た雲母水に和して、漆管の中に入れ、之を井中に投すること百日なれば、化して赤水となる。一合を服すれば、百歳を得。久しく服すれば長生す。

〔樂子長の丹法〕……曾青、青鉛丹と、汞及び丹砂とを調合して、銅筒の中に居き、瓦滑石を用ひて白砂の中に封じ、蒸すこと八十日なり。その小豆許りの分量を服すれば、三年にして仙となる。

〔李文の丹法〕……白素を以て、丹を裏み、竹汁もて之を煮る、之を紅泉といふ。再び沸湯の上に、之を蒸し、合するに立水を以てす。その一合を服すれば、一年にして仙となる。

〔尹子の丹法〕……雲母水を以て丹に和し、密封して、金華池の中に置くこと、一年の後、日日一刀圭を服して、一斤を盡すに至れば、五百歳の壽を得。

〔太乙の招魂魄丹法〕……六一泥を以て、五石を封すること、九丹に似たり。頓死して三日を経ざるものを蘇生せしむるに利あり。その法は、この丸薬と硫黄丸とを合して、水とともに死者の口中に注ぎこむ。蘇生者は皆な言ふ、使者節を持して、之を召すを見たりと。

〔采女の丹法〕……兎血に和したる丹をば、蜜もて蒸したるものにして、之を梧桐の實ほと丸薬となし、一日に三回づつ、百日間之を服すれば、神女二人來り侍りて、其の使命に供す。

〔櫻丘子の丹法〕……六一泥を以て清酒、鹿酒、百華醴、龍膏を和したる丹を封じ、糠火を以て之を熾たむること十日にして成る。小豆ほどの一丸を服して、一劑を盡すときは、五百歳の壽を得。

〔墨子の丹法〕……汞及び五石液とともに、丹を銅器の中に入れ、火にて之を熬りつけ、鏡もて攪きまはすこと十日なるときは、再び丹となる。之を服すること一刀圭なれば、萬病身を去り、長く服すれば死せず。

〔張子和の丹法〕……銘汞、曾青水、を合して之を封じ、赤黍米の中に蒸すこと、八十日にして成る。

更に棗膏を以て之を和し、丸薬となす。大豆ばかりの分量を服すること百日なれば、五百歳の壽を得。

〔綺里の丹法〕……五石の玉塵と丹砂を合して、之を大銅器の中に入れ、之を煮ること百日なれば五色となる。之を服すれば死せず。更に鉛百斤と藥百刀圭とを合して、之を火けば白銀となる。又た雄黄水を調合して、之を火くこと百日なれば、黄金となる。その剛き時には、猪膏もて煮、柔かき時には、白梅もて之を煮る。

〔玉柱の丹法〕……華池の汞水を丹に和し、曾青、硫黄の粉末を以て之を覆ひ、之を筒中の砂中に置き蒸すこと五十日の後、服すること百日なれば、玉女、六甲六丁の神女來り侍る。之を使役せば天下の事を知るべし。

〔肘後の丹法〕……金華を以て丹を和し、乾瓦もて之を封じ、蒸すこと八十日の後、取り出して盤上に置き、日光に照すときは、その光相通ず、小豆ほどを服すれば、長生すべし。又た之を陽銅の中に投ずれば、金に變化す。

〔李公の丹法〕……眞丹及び五石の水各一升を和して、泥の如くならしめ、釜中に之を火くこと三十

◎

六日の後、取り出して石硫黄液を和したる者を服すれば、十年にして、その壽、天地と同じ。

〔劉生の丹法〕……白菊花汁、地楮汁、楊汁を以て丹に和し、之を蒸すこと三十日の後、藥研にかきまわしたる者を服すれば、一年にして五百歳の壽を増す。老人之を服すれば少年となり、少年之を服すれば、決して老いず。

〔王君の丹法〕……丹砂と巴砂とを、漆もて塗りたる鶏卵の中に入れ、鶏をして之を孵化せしむ。

王相の日〔五行の關係より定められたる吉日〕その三個を服すれば、成人は老いざるも、小兒は生長せざるなり。新生の雞犬鳥獸も、亦た此の如し。

〔陳生の丹法〕……白蜜を以て丹を和して、銅器の中に内れ、之を密封して井中に沈むること一年の後、服するときは、年を経るも儼然とす、一斤を盡すときは百歳に至る。

〔韓終の丹法〕……深蜜を以て丹に和し、之を煎す、服するときは年を延ばすべく、又た日中に立つもその影を見ず。

その他數十法あるも、具さに論ずべからざるなり。

10 『金液』の秘法と其の靈驗

此項は太乙神を服して仙となつたといふ『金液』の製造秘法と、その驚くべき靈驗を述べ、九丹の製造に就ても述ぶ。九丹は前にもあり、稍や重復せるやうである。

金液は、太乙が服して、仙となりし者なり。その功は、九丹に減ぜず。之を合するには、古秤の分量にて、黄金一斤と元明、龍膏、太乙、旬首、中石、氷石、紫遊女、立水液、金化石、丹砂とを調合して、之を封すること百日なれば水となる。その經に曰く、金液口に入らばその身金色となると。老子は、之を元君より授けらる。元君曰く、この道は至重なり、百世に一たび出すべきのみ、常に之を名山に藏すべし。合藥の時は、皆齋戒百日、俗人と往來するを禁ず、名山の側、東流の水上に精室を立て、之を製すれば百日にして成る。其の一兩を服すれば仙となる、若し上天を欲せずして、地仙たらんとするときは、半兩を服すべし。長生不死にして、萬毒百毒も害する能はず、妻子を畜ひ、官職に居りて、萬事意に任せざるなし。若し復た昇天を欲せば、齋戒して、更に一兩を服すべし。

又た金液を以て、威喜〔不明〕巨勝〔胡麻の異名〕を爲るの法は、金液及び水銀一味を合して、之を煮ること三十日の後、更に之を黄土の甌に盛り六一泥もて封す、かくして猛火の中に炊くこと六十時なれば、皆化して丹となる。其の小豆ほどを服すれば、即ち仙となる。又粉末の水銀一斤と和すれば、銀となる。又たこの丹一斤を火上に置き、之を爛けば、液體の赤金となる。之を丹金といふ。以て、刀劍に塗れば、敵の武器を萬里の外に遠くすることを得。又たこの丹金を以て、盤碗を爲り飲食の用に供すれば、人をして長生せしむ。又た日月の光を承くるときは、水を吸ひ取ること、方諸の如しこの水を飲めば、死せず。又た之を黄土に和し、六一泥の甌の中に内れ、猛火もて炊けば、盡く黄金となりて、使用するを得、又た火を以てこの黄金を炊けば、皆な化して丹とする。小豆ほど服すれば名山大川に入りて、地仙となるを得べし。

この丹一刀圭を、水銀の紛末一斤と和すれば銀とする。この銀一兩を鉛一斤に和すれば、又た皆な銀となる。この金液經を授からんとするには、金銀八兩を東流の水中に投じ、血を飲みて誓をなしてその口訣を受くべし。若しこの法を用ゐず、或は之を盗用するも、その效なし。凡そ至信ある人には藥を與ふべきも、輕々しくその書を傳ふべからず。然らざれば師弟ともに、殃を受けん、天神の監

照は甚だ近きも、凡人は知らざるなり。

九丹は、誠に仙薬の上法たり。然れどもその材料たる薬品、甚だ多し。天下太平、四方交通の時には、悉く之を市ふことを得べきも、九域〔支那の九州〕分隔の際には、容易に得べからず。加之に製薬の時には、數十晝夜、よくその火力を伺候して、適宜を失はざらしむるの必要あれば、勤苦もまた至難なり。故に金液を合するの易きに及ばず。金液を合するには、その得がたき者は金のみ。古秤の金一斤は、今の秤の二斤にして、其價は大抵三十萬錢に過ぎず。その他の薬品も、大略備へ易く、加之に火を用ふるの勞なし。但だ之を華池の中に置き、定期の日數を満たせば成る。すべて四十萬錢ほどの費用を投ずれば、一劑となり、八人をして仙人とならしむるを得。その分量少なき者は、その成らざること、恰も酒を醸して成らず、醗となるが如し。

11 神丹仙薬を煉る靈境と祭祀と禁忌

この項は、神丹仙薬を煉るには名山又は海中の大島嶼を選ばねばならぬ。而して先づ壇を設けて太乙元君、老

君、玄女を祭り、齋戒百日、種々なる禁忌を慎まなければならぬことを説いて居る。

この金液九丹を製するには、錢を要し、又名山に入りて、人事を絶たざるべからず、故に能く之を爲す者少なし。此經を得る者は、千萬人の中、一人あるのみ。故に道書を作る者も、金丹を説く者なし。第一の禁忌は、不信の俗人をして、之を謗らしむるなかれ。之に反すれば必ず成らず。鄭君云ふ。其の理由は、この上薬を製するには、先づ太乙元君、老君、玄女を祭り、その降臨を願ふべし。薬を作る者、若し幽僻の地に隠れずして、俗間の愚人をして、之を経過聞見せしむれば、諸神、乃ちこの經戒に違はずして、悪人をして之を謗らしむるを責め、復た之を助けず、邪氣進み侵して、薬成らざるなり。

必ず名山に入り齋戒百日、五辛及び生魚を食はず、俗人と相見ずして、始めてこの上薬を作るを得べし。薬成らば、齋を解くべし。鄭君云ふ。左君の言によるに、諸方の小山には、この薬を作るべからず、凡べて小山の主には皆な正神なし、多くはこれ木石の精、千歳の老物、血食の鬼なり。この輩は邪氣ありて、人の幸福を念はず。但だ能く禍をなして、巧みに道士を試む、道士たる者は、須らく術を以て身を辟くべし。又た弟子も、時によりて薬を壞る者あり。今の醫家、好薬好膏を製するに

は、皆雞犬小兒婦人をして、之を見せしむるを欲せず。若し之を犯せば用ふるも效なし。それ姦色を染むる者は、悪目の人の見るを嫌ふ、何となれば之に感じてその美色を失はんが爲めなり。況んや神仙の上薬をや、是を以て古の道士、神薬を合作するには、必ず名山に入りて、凡山に止らざるなり。

又た仙經を按ずるに、仙薬を精思して、之を合作するに適するの地には、華山、泰山、霍山、恒山、崇山、少室山、吳山、太白山、終南山、女几山、地肺山、王尾山、抱犢山、安丘山、潛山、青城山、峨眉山、緱山、雲臺山、羅浮山、陽駕山、黄金山、龜祖山、大小の天台山、四望山、蓋竹山、括蒼山、あり。此等の山には、皆正神若くは地仙あり、山上には皆な芝草を生じて、大兵大難を避くべし。但に薬を合するに適するのみならずなり。若し有道者、之に登れば、山神必ず之を助けて福を與へ、薬も亦必ず成らん。若しこの諸山に登るを得ざれば、海中の大島嶼、若くは會稽の東翁洲、賣洲、紆嶼及び徐州の羊莒州、秦光洲、鬱洲は皆なその次なり。今は中國の名山に至るを得ず。〔當時江北一帶亂るる故に云ふ〕江東の名山には、晋安の霍山あり、東陽の長山太白山あり、會稽の四望山、大小の天台山、蓋竹山、括蒼山ありて、竝びに住することを得べし。

12 小餌黄金の法及び小神丹、小餌丹の秘方

この項では、表題の如く、『小餌黄金の法』と『小神丹の方』『小餌丹の方』及びその效驗を説いたものである。その次に、小餌黄金の法あり。金液に及ばざるも、他薬に比すれば、遙かに勝れり。或は豕負、革肺及び酒を以て之を煉り、或は楞皮を以て之を治し、或は荆酒、慈石を以て之を消す。或は布巾の如く平たき形の薬となし、或は水液となすことを得て、之を服す。往々禁忌あれば、金液に及ばざるなり。或は雄黄雌黄を合して之をひきのばせば、皮の如くするを得。是れは地仙の法のみ。又た銀及び蚌中の大珠をば、皆な化して水とならしめ、之を服すること可なるも、長日月に互らざるべからず、故に皆な金液に及ばざるなり。

小神丹の方は、眞丹三斤、白密六斤を攪きませ、之を日光に曝して、更に煎り丸薬となす。毎朝、麻の實ほどのもの十九を服すれば、一年ならずして髪白きものは黒く、齒落つる者は生じ、身體潤澤し、長く之を服すれば老いず、老翁も少年となりて死せず。

小餌丹の方は、先づ一斤の丹を擣きて、之を篩にかけ、苦酒三升、漆二升の中に漬けて、よく、之を調和し、微火もて煎り、丸薬を成す。麻實ほどの者三個を一日二回に分服す、三十日の後、腹中の百病癒えて、三尸去る。之を服すること百日なれば、肌骨強堅なり。千日なれば、司命の神も、死籍よりその姓名を削りて、天地と壽を同じくし、日月と相望み、形容變化し、日中にも影なくして、別に一種の光を生ずるを見る。

小餌黄金の法は、鍊金を清酒の中に内るゝこと、大約二百回なれば、その酒即ち沸騰す、之を握るに、指間より泥の如く漏れ出づ。若し沸かず、或は泥の如くならざれば、之を銷かして、何回となく清酒の中に入るときは成る。其の彈丸一箇又た二箇ほどを服すべし。又た分ちて小丸となし、三十日間服用すれば、寒温を意に介せず、神人玉女來り侍る。銀も亦た餌となすべきことは、金と同じ、この二物を服して、能く名山石室の中に居ること一年ならば、軽く天に上り、若し人間に止らば地仙とならん。妄りにこの法を傳ふるなかれ。

兩儀子の小餌黄金は、猪鬚革脂三斤を苦酒一升の中に漬け、黄金五兩を器中に置き、之を土爐に煎じ、金を脂中に置き、百たび入れて百たび出す、苦酒も亦た爾かり。その一斤を食はゞ、壽命天地に

同じく、半斤を食はゞ、二千年、五兩ならば千二百年なり。金を服するには分量の多少を問はず、常に王相日を以て之を作り、之を服すれば神良なり。其人に非ざるものに傳ふるなかれ、しかるときは薬をして、成らざらしむ。走りて天に上ほらんとせば、丹砂を服すべし。

13 金丹の煉薬と抱朴子の著者葛洪の抱負

以上譯載の『抱朴子』によつて『金丹』とはどんなものであるかが、大略解つたと思ふ。そこで抱朴子の著者葛洪が同書で説いた神薬と長生に關する抱負を、参考の爲め掲ぐる。

余は大いの子孫を忝けなくす、才は國を経め物を理むるに足らずと雖も、世上を見れば、儔類の好も少なく、時勢に進み趨くの才能も、余に及ばざること遠き者にして、猶ほ夜は翻を雲漢に揮ひ、晝は景を晨宵に耀かし、一世に時めくもの多し、然に余が郷黨の慶事を絶ち當世の榮華を棄つるものは、必ず遠く名山に登り著はす所の子書を成さんと欲ればなり。次は神薬を合し長生を規が爲なり。

俗人皆な余が桑梓を委て、清明の時代に背き、躬づから林藪に耕し、手足の胼胝をも顧みざるを

怪しみ、余を目するに、狂惑の疾ありとなさざる者なし。然れども仙道と俗事とは、並び行はれず、若し人間の務を廢てすんば、何ぞこの志を修むるを得んや。この道を見るに、了然として、信すべく、之を執るに、必ず動かすべからざることあらば、亦た毀譽を憚り。他の勸めと沮とによりて、心を移さんや。聊かその心を書して、將來の同好者に示すといふ。若し斷金の同志者あらば、その富貴榮華を捐棄するに於て、余と異ならざるのみ。

其二 抱朴子の「仙藥」秘法

1 不老回春と關係深い抱朴子の仙藥

「抱朴子」の「仙藥」の卷も、全文をこゝに譯載することにした。本編は前に譯載した「金丹」と同様に、支那の不老回春を説くには、どうしても除外することのできない文獻である。抱朴子の著者葛洪のことは、前の歴史篇で述べた如く、不老回春術が最も研究された西晋の末葉の人であるから、

當時如何なる仙藥を用いたかを知るには唯一の記録である。

然らば同書に掲げた「仙藥」は、支那に於ける仙藥を全部網羅して居るかといふにさうではない。其後本草學の發達と共に、此種藥品の研究は非常に進歩して、これ以上の藥品が發見され研究されて居るのである。これを知つて讀んで貰いたい。便宜上各項に分け、小見出は私がつけたが、金丹の如く解説はしないことにした。

偕て、次から「抱朴子」の譯文である。

2 三藥の解と仙藥の種類

「神農四經」曰く、「上藥」は、人をして身安く命延び、昇りて天神となり、上下に遊遊し、萬神を役し、體に羽毛を生じ、立どころに行厨を致さしめて、坐ながら飲食するを得べし。又た曰く、五芝丹砂、玉札、曾青、雄黄、雌黄、雲母、太乙禹餘糧を服するのみにても、飛行長生を得べし。又た曰く「中藥」は性を養ひ、「下藥」は病を除く、能く毒蟲をして侵さしめず、猛獸をして犯さしめず、惡

氣をして行かしめず、衆妖をして並び辟けしむ。

又た「神經援契」に曰く、「椒」と「薑」とは濕を禦ぎ、「菖蒲」は聰を益し、「巨勝」は年を延べ、「威爐」は武器を辟くと。これ皆な上聖の至言、方術の實録にして明文炳然たり。而るに世人、遂に信ぜざるは、歎息すべき事なり。仙藥の上なる者は

丹砂にして、黄金、白銀、諸芝、五玉、雲母、明珠、雄黄、太乙禹餘糧、石中黄子、石桂、石英、石腦、石硫黄、石飴、曾青、松柏脂、茯苓、地黄、麥門冬木、巨勝、重樓、黄蓮、石韋、楮實、象柴等、次第により相下る。或は仙人杖、西王母杖、天精、却老、地骨、枸杞、天門冬、地門冬、菴門冬、顯棘、淫羊食(食は覆の誤ならん)管松など、名づくる者あり。

すべて高地に生じて、根短く味甜く、氣香ばしき者は善し。水側下地に生じて、葉細くして蕪の如く稍や黄色を帯び、根長くして味苦く、氣臭き者も服食すべし、人をして氣を下さしむるの效驗あるも、其の藥力の見はるは尤も遅し。之を服すること百日なれば、身體の強壯なること、「朮」及び「黄精」を服するに倍す。

又た山に入れば、蒸し若しくば煮て之を啖ひ、以て穀を斷じ筋力を増すべし。之を丸藥また散藥とな

せば、尤も佳なり、又たその汁を絞りて、酒を作ることを得。

3 「百部草」と「黄精」の秘法

楚人は「天門冬」を「百部」と叫ぶも、別に百部草あり。その根百許りありて、相似たること一の如きも、苗に多少の相異あり。眞の百部草の苗は楔の如し、咳を治し、虱を殺すに效あり。副食に中らざる者と混同するなかれ。

「黄精」の如きは、一に白芨ともいふ。而れども糊を作るの白芨に非ず。本草を按ずるに、藥と他草と同名なる者、甚だ多し。唯だ精博の人にして能く之を區別す、人々詳かにせざるべからず。

黄精は、一名菟竹、一名救窮、一名垂珠といふ。根よりも實、實よりも花を善しとす。但だ多く得難し。生花十斛を乾せば、纔かに五六斗を得べきのみ。之を服すること、日に三合ばかり、辨じ得べき事に非るなり。之を服すること十年なれば、大に壽を益すことを得べし。但し斷穀よりいふときは朮に及ばず、朮を餌すれば、人をして肥健ならしめ、重きを負うて險を涉らしむべし。但だ黄精の甘

美にして、食し易きに及ばざるなり。凶年には老小に與へて、糧に代らしむべし、故に之を「米脯」ともいふ。

4 萬歳の壽を得る五芝の種類と祕法

「五芝」は、「石芝」、「木芝」、「草芝」、「肉芝」、「菌芝」にして、何れも百餘種あり。

「石芝」は海隅の山石、及び島嶼の涯に生ず。

「肉芝」は、その状肉の如くにして、頭尾四足あり、甚だ生物に類す。大石に附着し、高岫峻峻の地に在り。赤きものは珊瑚の如く、白き者は截りたる肪の如く、黒きものは澤漆の如く、青き者は翠羽の如く、黄なる者は紫金の如し。皆な光明洞徹にして、堅氷に似たり、晦夜には之を去ること三百歩なるも、その光を望見す。大なる者は十餘斤、小なる者は三四斤の重さあり。久しく齋戒したる者又は老子の入山靈寶五符を佩びたる者に非れば、此の光を見るを得べからず。凡べて諸芝を見るには先づ開山却密符をその上に置くべし。然るときは隠蔽し、又たは變化し去るを得ず。後徐ろに玉相の

日を選びて、醮祭を設け、酒脯を奉け、日下より禹歩し、氣を閉ちて往き、之を取る。若し石芝を得ば、之を擣くこと三萬六十杵、方寸の匕ほどの分量にて、一日に三回之を服し、一斤を盡くすときは千歳を得、十斤なれば萬歳を得るなり。又た人に分與することを得。

「玉脂芝」は、玉ある山に生じて、常に懸崖危険の處にあり。玉膏流出して萬年以上を経れば、凝りて玉脂芝となる。鳥獸の形に似たる者あり。色は一定せざるも、多くは山立、水蒼玉に似たり。又た鮮明にして、水精に似たる者あり。之を粉末となし無心草の汁を和すれば、須臾にして水となる。一升を服すれば一千歳を得。

「七明九光」も亦石芝なり。水に臨むの高山に生じ、狀は盤碗の如く、其の直徑は一尺内外なり、莖帯ありて之を連綴し、三四寸ほど地上に出づ。七孔ある者を七明といひ、九孔あるものを九光と稱す。その光皆な星の如し、夜分、百歩以内より、之を望見すれば、その光各々別なり。常に秋分の日を以て採取して之を擣く。方寸の匕を服すれば、翕然として自熱し、五味盡く甘美なり、一斤を盡せば千歳を得、人身をして光あらしめ、暗地に居るも、四方を照らすこと日の如く、書を視ることを得べし。

〔石密芝〕は、少室山の石戸の中に生ず。戸中に深谷あり、石を之に投入すれば、半日猶ほ其の聲を聞く。戸外を去ること十餘丈にして、石柱あり。柱上に、蓋を僣せたる形の石ありて、直徑一丈ばかりなり。傍觀するに、密芝が石戸の上より墮ちて、此の僣蓋の中に入ることもあり、良久しくして雨水の屋上より滴るが如きを聞く。而して密芝の墮つること、息まざるも、僣蓋また溢れざるなり。戸上に科斗文字(太古の字形)もて刻して曰く「石密芝一斗を服すれば、萬歳の壽を得」と。故に諸道士、皆なその生處を思惟すれども、往くを得べからず、或は椀器を動き竹木の端に著けて密芝の墮つるを掬ひとるの法あるも、未だ之を實行したる者あらざるなり。戸上の刻文を以て、之を按ずるに、前世には、必ず之を得たる者あらん。

〔石柱英芝〕は、名山の石穴に生ず。其の形、桂樹の如く高さ尺許り。徑尺にして枝條あり。光明にして味辛し。之を擣いて、一斤を服すれば、千歳を得。

〔中黄子〕は、至る所に之あるも、沁水山を以て尤も多しとなす。大石の中に生じ、赤黄溶々として雞卵の殻に在るが如し、其の石常に潤色あり、之を打つこと數十回にして、始めて之を得。若し之を得ば、直ちに飲むべし、然らざれば堅く凝りて、復び石となる。一石を破るに、多きものは一升、少

なきものは數合あり、三升を服すれば、千歳の壽を得。

〔石腦芝〕は、滑石の中に生ずること、石中黄子の如し。但し凡あらゆる滑石に生ずるものに非ず、千許りの滑石を打破して、漸く一箇を得べし。之を破れば、五色の光明ありて自ら動く、一升を服すれば千歳を得。

〔石硫黄芝〕は、五岳の何れにも在り、而して箕山を多しとなす。その傳説に云ふ、許由之を服して長生す、故に富貴を以て、意を累はさず、堯帝の禪位を受けずと。

〔石硫丹〕は、石の赤精にして、石硫黄の類なり。崖岸の間に浸溢す。其の濕ふ者は丸薬となすべく堅き者は碎いて散薬となすべし。

その他百二十種の石芝あり。太乙玉策、及び昌宇内記に之を載するも、今具に稱すべからざるなり。

〔木芝〕の由来を言はんか。松柏の脂、地にしみこむこと千歳にして、化して茯苓となる。茯苓萬歳の後、其の上に小木を生ず、狀は蓮花に似たり、木威喜芝といふ。夜之を視るに光あり、之を持するに甚だ滑之を燒くに燃えず、之を帶ふれば武器を辟く。雞をして之を帶ばしめ、他の十二雞と與に

之を籠に入れ、去ること十二歩にして、射ること十二箭なれば、威喜芝を帯びたる者の外、他雜皆な傷つく。生門上〔方角の名〕より之を採り、陰乾すること百日の後、粉末となして、方寸の匕を服すること、一日に三回、かくして一箇を盡くす時は、三千歳を得。

〔射干の草〕千歳を経れば、その下根は坐したる人の如し、長さ七寸許りあり。之を刻めば血出づ、之を足に塗れば、水上を歩行すべく、鼻に塗りて、水中に入れば、水爲に開きて、永く淵底に止まるを得べし。又之を身に塗れば身を隠くし、拭へば身見はる。腹中の病を治する時は、一刀圭を削りて之を服し、腫物などには、之を塗り摩づれば皆直ちに愈ゆ。又た左足疾あれば、その根の左足を削れば愈ゆ、他は之に準ず。又た之に雜ふるに巨勝を以てすれば、夜偏く地を照す。若し地中に金玉の數埋没すれば、青色の光となりて下に向ふ、錡もて之を掘れば必ず得ん。此の粉末十斤を盡せば、千歳の壽を得。

又た三千歳を経たる松枝皮中に、龍の形をなしたる脂の固形體あり、名づけて〔日飛節芝〕といふ大なる者は十斤あり、粉末として盡く之を服すれば、五百歳を得。又〔樊桃芝〕といふ者あり。その木は昇龍の如く、花葉は丹き羅の如く、實は翠鳥の如し。高さ五尺に過ぎず。名山の陰、東流する泉

水の土に生ず。立夏の時、之を採り、其の一株を服すれば五千歳を得。

〔參成芝〕は、赤色にして光あり。その枝葉を叩けば、金石の音の如し。折るゝも之を續けば、復た故の如し。

〔木渠芝〕は、大木の上に寄生す、蓮花の如し、九莖を以て、一叢をなす。其の味は甘くして辛し。

〔建木芝〕は、實に都廣に生ず〔都廣は地名なり〕その皮は纓蛇〔山の纓黄蛇か〕の如く、その實は鸞鳥の如し。この三芝を服すれば、白日昇天を得。

黄盧子、尋木華、元液華の三芝は、泰山の要郷、及び奉高に生ず、之を服すれば、人をして千年の壽を保たしむ。

〔黄藥檀桓芝〕は、もと千歳を経たる黄藥の下根なり。其の形は三斛の器の如し、本株の黄藥を去ること、一二丈のところを生じて、縷の如き細根と相連なる、一箇を取り粉末となして、之を服すれば、地仙となりて死せざるなり。この屬には百二十種ありて、一々その圖あり。

草芝の中に〔獨遙芝〕あり、風なきも自ら動く。その莖は手指の如くにして赤く、葉は素くして莧に似たり。その根に大なる魁ありて、恰も北斗七星の魁の如し。卵の如き小なるもの、之を繞るは

十二辰に似たり。個々の間、相去ること一丈許にして、白髪の如き細根にて連なる。高山深谷に生じて、而かもその生ずる所の附近には他草を見ず。其の大魁の粉末を服すれば、千歳を得。小なる者も百歳を得。之を他人に分與するも可なり。大魁を懐けば形を隠す、若し見さんとすれば、左轉して之を出す。

〔牛角芝〕は、虎壽山及び吳坂の上に生ず。狀は蕙に似て、特生すること牛角の如し、長さ三四尺にして青色なり。粉末として、方寸の匕ほど服すること、日に三回、百日に至れば、千歳を得。

〔龍仙芝〕は、狀昇龍の相負ふが如し、葉は鱗の如く、根は蟠る龍の如し。一箇を服すれば、千歳を得。

〔麻母芝〕は、麻に似て、莖赤く花紫なり。

〔紫珠花〕は、花黄にして葉赤く、實は李の如くにして紫色あり。二十四枝相連なりて垂る、恰も貫珠の如し。

〔白苻芝〕は、高さ四五尺にして、梅に似たり。常に大雪の時に花開き、季冬に實る。

〔朱草芝〕は、九曲す、一曲ごとに三葉あり、一葉ごとに三實あり。

〔五徳芝〕は、狀樓殿に似たり。莖は方形にして、葉は五色を具へて雜らず、上は蓋を偃せたる如く中には常に甘露あり。紫氣ありて、數尺の上にて起ちのほる。

〔龍銜芝〕は、常に仲春を以て對生す。三節十二枝にして、下根は坐したる人の如し。凡べてこの草芝に屬するもの百二十種あり。陰乾の後、之を服すれば、人壽をして天地と同じく、少なくとも千二千年ならしむ。

〔肉芝〕は、萬歳を経たる蟾蜍を謂ふ。その頭上に角あり、額の下には丹色にて「八」の字を重ね書したる模様見ゆ。五月五日の中時に、之を採り、陰乾百日、その左足もて地に畫すれば、即ち流水見はれ、左手を身に帶ぶれば、あらゆる武器を辟き〔按ずるに肉芝の形は人に似たり、故に左足左手といふ〕敵の射たる弩矢の數は、自ら反對して敵に向ふに至る。千歳の蝙蝠は、色白きこと雪の如し、集るときは倒に懸る。是れその腦の重き故なりこの二物を陰乾にし、粉末となして服すれば、萬歳を得。

〔千歳の靈龜〕は、五色を具ふ。其の雄の類には角の如き兩骨起き上る、人言を解し、蓮葉の上に浮ぶ。羊血をあびて、其の甲を剔り取り、火に炙つて粉末となし、方寸の匕を服すること、日に三回なれば

千歳の壽を得。山中を行くに、長七八寸許りの小兒の車馬に乗るを見ん、これ即ち肉芝なり、之を捉ふれば仙となる。

〔風母獸〕は、貂に似たり。青色にして大き狸の如し、南海の大林中に生ず。網を張りて之を取り、積薪の中に之を焼くも、依然として焼けば焦けず、輦刺するも入らず。之を打てば皮囊の如し、鈍鈍もて、その頭を打つこと數十回にして死す。然れども一たび口を開いて、風に向はしむれば、須臾にして起き走る。この時、石菖蒲もて、その鼻を塞げば即ち死す。其の腦を取りて、菊花に和し、十斤の分量を服すれば、五百歳を得。

又た千歳の〔燕〕あり。その巢は北に向ひ、多く白色にして曲尾あり。陰乾の後、粉末として之を服すれば五百歳を得。凡べて之に屬する者、百二十種あり、皆な肉芝なり。

〔菌芝〕は、或は深山の中に生じ、或は大水の下に生じ、或は泉水の側に生ず。その状は宮室の如きものあり、車馬の如きものあり、龍、虎、人形、又は飛鳥の如きものあり。色彩また一定せず。この類百二十種あり、圖之に屬す。皆な禹歩して、之を探るべし。骨刀を以て之を刻ざみ、陰乾の後、粉末となして、方寸の匕を服すれば、上は人をして昇天せしめ、中は數千歳、下も千歳の壽に至らしむ。

〔芝草〕を求むる爲に、名山に入るには、必ず三月と九月とを以てす。これ山開いて神藥を出すの月なり、山根の日〔山根不明〕を以てするなかれ、必ず天輔の時〔天輔不明〕を以てすべし。而して三奇會尤も佳なり、三奇吉門を出で山に到るときは、六陰の日、明堂の時を須ち、靈寶符を帶び、白犬を牽き、白雞を抱き、白鹽一斗、及び開山の符檄を、大石の上に着け、吳唐草一把を執りて、山に入らば、山神喜びて、必ず芝を與へん。

又た芝を探り及び芝を服するには、王相專和の日、支干上下相生の時を佳となす。名山にて諸芝多しと雖も、凡庸の道士、心專精ならず、行穢れ徳薄く、又た入山の術を曉らず、その圖を得るもその狀を知らず、故に終に得る能はざるなり。山には大小となく、皆鬼神ありて、人に芝を與へざれば、之を踐むも知らざるなり。

5 五雲母を服する秘法

又た〔雲母〕に五種あるも、世人多く之を分別する能はず。その法は當に日に向ひて、その色を詳看

すべし、陰地には、その雜色を見る能はず。五色並び具りて、特に青色多きものを「雲英」と名づく。春を以て之を服すべし。特に赤色多きものを「雲珠」といふ、夏に宜し。特に白色多きものを「雲液」といふ、秋に宜し。特に黒色多きものを「雲母」といふ、冬に宜し。但し單に青黄二色ある者を「雲沙」といふ、夏季に宜し。純白透明するものを「燐石」と名づく、四時に宜しきなり。

「五雲を服するの法」は、或は桂葱、水玉を以て之を化して水となし、或は露とともに之を鐵器に入れ、玄水もて蒸りて水となし、或は硝石とともに筒中に入れ、之を埋めて水となし、或は蜜と和して酪となし、或は松露にて漬くること百日、革囊の中に揉み碎きて粉末となし、或は無願草、樗血と和す、之を服すること一年なれば、百病除き、三年なれば、老人變じて童子となり、五年缺かざれば、鬼神を役使し、火に入りて焼けず、水に入りて濡れず、棘を踐みて傷つかず、仙人と相見ることを得。

以上の五雲母は、如何に永く土中に埋むるも腐れず、火中に置くも焼けず、決して他物と同じからず、故に能く人をして長生せしむ。又た之を服すること十年なれば、雲氣常にその上を覆ふとぞ。その母たる雲母を服すれば、その子ともいふべき雲氣を招くは自然の理なり。又た日に向ひて之を見る

に、庵くして純黒の色あるものは、服薬に中らず、人をして淋を發し瘡を發せしむ。之を服せんとせば、先づ茅屋の露水、若くは東流の水、また露水もて漬くること百日の後、その土石の部分を淘汰して、之を用ふべし。中山の衛叔卿は、之を服して久しきを積み、能く雲に乗じて行く。その秘方を玉匣に封ず。仙去の後、その子もまた世に名あり。漢の使者梁伯、之を得てその製方により、服薬して仙去す。

6 雄黄と玉女と玉屑を服する秘法

「雄黄」は、武都山より出づる者を以て、薬とすべし。純にして雜なく、其の赤きこと雞冠の如く、光明輝々たる者を用ふべし。但し純黄なること、雄黄に似たるも、赤光なき者は、仙薬と作すべからず、唯だ普通の療治に使用すべきのみ。餌服の法は、或は之を蒸し、或は酒と和し、或は硝石と和して水となし、之をかため、或は元脬腸を以て裏み、赤土の中に蒸し、或は松脂に和す。或は以上の三物を以て之を煉りて、氷の如く白からしめ、布の如く引きのばす。之を服すれば、人をして長生せ

しめ、百病を除き、三尸蟲を下し、癩痕を滅し、白髪を黒くして、墮齒を生ぜしむ。千日なれば、玉女來り侍りて、役使に供し、行厨を致さしむべし。

又た「玉女」は常に黄玉を以て誌となす、其の大き黍米の如くして鼻上に在り。是れなきものは、鬼の變化なり。玉も亦た仙藥なり、但だ得がたきのみ。玉經に曰く。金を服する者は、壽金の如く、玉を服する者は、壽玉の如しと。又た曰く。立眞を服する者は、其の命極らずと。立眞は玉の別名なり。人身をして輕舉せしむ。但に地仙となるのみに非るなり。然れどもその效は遅く、一二百斤を服して、始めて知るべきのみ。玉は烏珠酒、及び地榆酒を以て、之を化して水となすべし。又た葱漿に消かして、飴となすべし。丸藥、散藥、何れにても一年以上、之を服すれば、水火も之を害する能はず、刀刃百毒も、之を犯す能はざるなり。

既成の玉は、害ありて益なし、璞玉を以て、用に充つべし。于闐國の白玉は、その最も善なる者にして、其の次には、南陽の除善亭、及び日南の盧容水に産する者あり。赤松子は、立眞の血もて、玉を漬けて水となし、之を服す、故に能く烟に乗りて上下す、玉屑を服するときは、水を用ふ。亦た人をして死せざらしむ。其の金に及ばざる所以は、數々熱を發して、寒食散を服する如きことあればなり。

若し、「玉屑」を服せんには、十日ごとに雄黄、丹砂各々一刀圭を服し、散策して寒水に沐浴し、風に逆ひて行かば、發熱せざるなり。董君異、かつて玉體を盲人に與へて服せしめしに、旬日にして愈ゆ。吳延稚といふ者、玉を服せんと欲し玉經を得たるも、その方明かならざれば、節度禁忌を知らず、乃ち始め瑤瑤、環璧及び裝劍を合して、之を製せんとす。後に余の説を聞いて、その用に中らざるを知り、嘆息して曰く。事は精しくせざるべからず、然らざれば但に益なきのみならず、幾んど禍に罹らんと。

7 銀、眞珠其他を服する秘法

又「銀」は、金玉に及ばざるも、地仙たるを得べし。之を服するの法は麥漿を以て之を化すべく、又た朱草酒を以て餌となすべし、又た龍膏を以て之を煉るべし。かくして一日三回づつ、彈丸ほどの分量を服す。その費用多ければ、清貧なる道士の及ぶ所に非るなり。

又た「眞珠」の徑一寸以上あるものは、服薬に適す。酪漿もて之を漬くれば、化して水銀の如し。浮石水、蜂窠、礬化、包彤、蛇黄と合して、之を三四尺の長さに引き延ばし、殻を絶ちて服薬するときは、長生を得るなり。

〔淳漆〕の沾はざるものを服すれば、人をして神に通じて、長生せしむ。之を餌するには、無腸公子〔蟹の異名〕十枚をその中に投ず、或は雲母水、又は玉水と和して之を服すれば、九蟲盡く下り、惡血鼻より去る。一年にして、六甲の鬼神、及び行厨至る。

〔挂〕は、葱涕〔不明〕と蒸して水となすべし。竹瀝又た先知君〔龜の異名〕の腦と和したるものを服すること七年ならば、能く水上に歩いて長生不死なり。

〔巨勝〕は一に胡麻といふ。之を服すれば老いず、風濕に耐へて、衰老を補ふ。

〔桃膠〕は、桑灰汁を以て漬け、之を服すれば、百病皆癒え、久しく之を服すれば、身軽くして光明あり、晦夜に在るも月明の如し。多く之を服すれば、穀を斷すべし。

〔柠〕木實の赤き者を服すること一年なれば、老者をして少なからしめ、人をして透視して鬼を見しむ。昔、梁須〔或は頓〕七十歳の時、之を服して少年となり、百四十歳に至るも、夜は字を書し、そ

の速力は奔馬に及ぶ、後、青龍山に入り去る。

〔槐子〕は、新しき瓠の中に泥と合し、之を封すること二十餘日、其の表は皆爛る。乃ち之を洗へば大豆の如し、日々之を服す、腦を補ふに主治あり。久しく之を服すれば、毛髮白からずして長生す。玄中蔓、方楚、飛廉、澤瀉、地黄、黃蓮の屬すべて三百餘種あり、皆なよく年を延ばして單服すべし。靈飛散、未央丸、制命丸、羊血丸は皆な齡を進ましめず、老を却かしむ。

8 露水を飲んで長生した話

南陽の酈縣山中に「甘谷水」あり、谷水の甘き所以は、谷上の兩岸に生じたる菊花、その中に墮ちて、世を歴ること彌々久く、遂にその水味を變ずるに因る。谷中の居民、皆な井を穿らずして、悉くこの水を飲む。その高齡者は、百四五十歳にして、少なきも八九十歳を失はず、天年の人なきは、この菊水の力を得たればなり。故に司空王暢、太尉劉寬、太傅袁隗皆な南陽の太守となりしが、官に到るごとに、常に酈縣をして、毎月甘谷水四十斛を送らしめて、以て飲食となす。此の諸公は、多く平

素風痺及び眩冒を患ひしが、皆な平愈するを得たり。但し小少より甘谷に居住せし人民の如く、大なる益を得て、高壽に達すること能はざるなり。

又た菊花と葱菫とは相似たり、直だ甘苦を以て、之を分つのみ、菊は甘くして、葱は苦し。諺にも「苦きこと葱の如し」と。今、眞菊は所在に生ずるも、其の量少なきのみ。牽ね水側に生ずるも、就中巖氏山と藤縣とに於て、最も多し。仙方の所謂日精、更生、陰成、周盈は、皆な一つの菊にして、根莖花實によりて、その名を異にするのみ。その説甚だ美なるも、近來之を服する者、大概效驗なきは、正に眞菊を得ざるに由るなり。それ甘谷水は、菊の氣味を得たるに過ぎざるも、居民の延年猶ほ此の如し、況んや妙藥を服すれば、何んぞ益なきを得んや。

余が亡祖鴻臚、少き時嘗つて臨沈の縣令となる。其言によるに、此の縣に廖氏といふ者あり。世々壽老にして、或は百歳乃至八九十歳を出づ。後ち他處に徙るに及びて、子孫轉た天折す。他人その故宅に居れば、復た舊の如く累世壽老なりと。これに由りて天壽は、此宅の所爲なるを覺りしも、何の故たるを知らず。乃ち井水の殊に赤きを疑ひ、試みに井の附近を掘りしに、古人の埋めたる丹砂數十斛を得たり。この丹砂汁は泉脈に因りて、井水に入る、故に此の水を飲む者は皆な長壽を得ることを

明かにせり。況んや丹砂を餌煉して、之を服するをや。

9 松脂を服して三百歳長生した話

余又た聞く、上黨に趙瞿といふ者あり、癩を病むこと歴年にして愈えず、死に垂んとす。家人、活きながら、之を山穴の中に棄つ、瞿、穴中に在りて自ら不幸を怨み、晝夜悲嘆し、涕泣月を過す。會ま仙人あり、過ぎて之を哀み、具さに之を問訊す。瞿その異人たるを知り、叩頭して自ら陳べ哀を乞ふ。是に於て仙人、一囊藥を以て之に賜ひ、其の服法を教ふ。瞿之を服すること百餘日にして、瘡都べて愈え、顔色豊悦、肌膚玉澤あり。仙人又た過ぎて之を視る。瞿再生の恩を受けたるを謝し、且つその方を乞ふ。仙人之に告げて曰く。此れは「松脂」のみ、此の山中に頗る多し、汝之を煉り服すれば、長生不死を得べしと。瞿乃ち歸る。家人始め之を鬼と謂ひ、甚だ驚愕せり。瞿遂に長く松脂を服して、身體轉た軽く、氣力百倍、危に乗り險を越ゆるも、終日疲れず、百七十歳に至りて、齒墮らず髪白からず。

或る夜、忽ち屋間に、鏡の如く光るものを發見せしかば、之を左右に問ひしも、皆な見ずといふ。久しくしてその物漸々大きく、遂に一室を照して晝の如し。又た夜其の面上に綵女二人見はる、長二三寸にして面體皆具はる、常に口鼻の間に遊戯す。此の如くする一年にして、綵女皆な漸く成長するに及び、出でてその側に侍る。又た常に琴瑟の音を聞いて、欣然として獨り笑ふ。人間に在ること三百餘年、色は小童の如し、乃ち抱積山に入る。必ず仙地となりしならん。

羅の説を聞きし者、皆な競ひて松脂を服し、その有力者は、車にて運び、驢馬にて負はせ、廣き室に盈ち溢るる程に、多く貯へ集め、一月ほど、之を服せしも、何等の益なきを覺ゆるや、皆な之を中止したり。仙道に志ある者の、得がたきこと是の如し。若し羅の如く、永く服したらんには、效驗ありし者を。

10 松の葉と松の實を食つて長壽を保つた話

又た漢の成帝の時、獵者あり、終南山の中に、服衣を纏はざる、全身黒毛の一人を發見せり。獵者

之を捕へんとす。その山谷を踰ゆること、飛馬の如くにして、速ふへからず。是に於て密かに其の所在を伺ひて、合圍して、之を得たり、乃ち一婦人なり。その言によるに、我は本と秦の宮人なり。關東の賊至りて、秦王出で降り、宮室焼けたるを聞き、驚き走りて山に入る。飢うるも食なく死に垂んとする時、一老翁ありて、我に「松葉」「松實」を食ふことを教ふ。當時その味苦澁なりしも、次第に之に慣れ、遂に我をして飢渴せしめず、寒熱に耐へしめたりと。

然らばこの女は、定めてこれを秦王子嬰の宮人ならん。成帝の時に至るまで、すでに二百餘年を経たる者なり。乃ちこの女を伴ひ歸りて、之に穀食せしむ、初めに穀の臭を聞くことに嘔吐せしが、後初めて之を食するを得たり。是の加きこと二年餘にして、身毛皆な脱落し、漸次老人となりて死したり。向に獵者に捕へられざりしならば、定めし仙人となりしならん。

11 朮を食つて仙人になつた話

南陽の文氏の説に、その先祖は、漢末大亂の時、山中に逃れ去る、飢困して死せんとす。一人あり

て「朮」を食ふことを教ふ。かくして飢ゑざることを、數十年にして郷里に還る、顔色更に少く、氣力も故に勝る。自らいふ、山中に在る時、身軽くして跳らんとす、高きに登り峻を履むこと、歴日なるも疲れず、氷雪の中を行くも、了に寒を知らず。嘗て一高岩の下に、數人對坐して博戯する者あり、讀書する者あるを見たり。彼等は文氏を俯瞰して、其人相を問べ、相互に言へらく、「この人は、此に呼び上すに中るや否や」と。その一人曰く、「未だ可ならざるなり」と。

夫れ朮は「山薊」また「山精」ともいふ。故に「神藥經」に曰く、必ず長生を欲せば、常に山精を服すべしと。昔仙人八公各々一物を服して地仙となり、其壽各々數百年なり。後更に神丹金液を合して、太清に昇る。八物を合して、之を鍊服するも、その力を得ざることはあるは、これその藥力、互に相勝畏乗除して、效驗なきに至るが故なり。

12 仙藥を服して仙術に通達した八仙

韓終は「菖蒲」を服すること、十三年にして、身に毛を生ず。日々萬言の書を視て、悉く之を誦讀

し、冬は袒ぎて寒からず。それ菖蒲は、石上に生じたる者にして、一寸九節以上あり、紫花を開く者を、尤も善しとなす。

趙他子は「桂」を服すること二十年にして、足下に毛を生ず。日々行くこと五百里にして、其の力は千斤を擧ぐ。

移門子は「五味子」を服すること十六年にして、色は玉女の如し、水に入りて沾れず、火に入りて灼けざるなり。

楚文子は「地黄」を服すること八年にして、夜其身體を視るに光りあり。連弩を擧ぐるの力あり。

林子明は「朮」を服すること十一年にして、耳の長さ五寸あり。身軽くして飛ぶが如く、能く廣さ

二丈ばかりの淵谷を超ゆ。

杜子微は「天門冬」を服し、十八妾を×して、百三十人の子あり。日々行くこと三百里なり。

任子季は「茯苓」を服すること十八年にして、仙人玉女、往きて之に従ふ。能く隠れ能く彰れ、復た穀を食せず。災癘皆な滅して、面體に玉光あり。

陵陽子仲は「遠志」を服すること二十年にして、三十七人の子あり。曾つて視し所の書は、之を忘

れず、坐すれば姿を見はし、立てば隠る。

仙經に曰く、草木の葉を服すること數百歳なるも、神丹を忘るときは、遂に仙となる能はずと。然らば草木は年を延ばすのみ、長生の藥に非ること知るべし。然れども未だ丹を作るを得ざれば、且らく草木を服して以て自ら支ふべきのみ。

13 服藥の時刻と年命の所在

或る人問うて曰く、「すべて服藥の時間には、各々前後の宜しきことあるか。」

「抱朴子」答へて曰く、

中黃子の服食節度を按ずるに曰く、病を治するの藥は、食前を以てし、性を養ふの藥は、食後を以てすと。吾、鄭君に其の理由を咨ふ。鄭君云ふ。これ知り易きのみ。藥を以て病を攻めんとせば、その未だ食せずして、内虚なるに乗じ、之を服すれば、藥力をして行はれ易からしむ。食後に之を服すれば、但だ穀を攻めて藥力すでに盡きん。若し性を養はんとして、食前に服藥するときは、藥力未

だ行はれざるに、穀に驅られて下り去りて、體內に止まるを得ず、故に益なきなり。

或る人問うて曰く、「藥を服して性を養ふに、宜しき所ありといふ、果して然るか。」「抱朴子」曰く「玉策記」及び「開明經」を按ずるに、皆な五音六屬を以て、年命の所在を知る。子午は庚に屬す、卯酉は己に屬し、寅申は戊、丑未は亥、辰戌は丙、己亥は丁に屬す。一言之を得る者は宮と土なり。三言は徵と火なり、五言は羽と水、七言は商と金、九言は角と木なり。若し本命土に屬すれば、青色の藥を服すべからず、金に屬すれば赤色を服すべからず。木に屬すれば白色、水は黄色、火は黑色を服すべからず。藥は五行の義を用ふ、木は土に尅ち、土は水に尅ち、水は火に尅ち、火は金に尅ち金は木に尅ちが故なり。金丹大藥の如きは、復た宜と不宜とを論ずるの要なし。

一言宮 庚子庚午 辛未辛丑 丙辰丙戌

丁亥丁巳 戊寅戊申 己卯己酉

三言徵 甲辰甲戌 乙庚乙巳 丙寅丙申

丁酉丁卯 戊午戊子 己未己丑

五言羽 甲寅甲申 乙卯乙酉 丙子丙午

丁未丁丑 壬辰壬戌 癸巳癸亥
 七言商 甲子甲午 乙丑乙未 庚辰庚戌
 辛巳辛亥 壬申壬寅 癸卯癸酉
 九言角 戊辰戊戌 己巳己亥 庚寅庚申
 辛卯辛酉 壬午壬子 癸戊癸未
 禹步法 前舉左 右過左 左就右
 次舉右 左過右 右就左
 次舉左 右過左 左就右
 此の如くにして三步すれば、二丈一尺となるべし、すべて九跡あり。

14 小神丹の方と餌銷黄金法

小神丹方は、眞丹三斤、白蜜一斤を和合して、日に曝し之を煎りて丸薬となし、毎旦麻實ほどのも

の十丸を服すれば、一年ならずして、白髪は黒く、墮齒は生じ、身體潤澤なり。長く服すれば、老人も少年となりて死せず。
 小餌銷黄金方は、火にて黄金を銷かし、清酒の中に入らせしむること二百回なれば、酒即ち沸く。やがて之を握れば、泥の如く指の間より漏れ出づ。更に再び之を銷かして、酒中に入らせしむること無數なれば、彈丸の如きものとなる。之を分服すること三十日なれば、寒温を感ぜず、神人玉女來り侍す。

銀も、また金と同じく之を服すべし、此二物を服して、名山石室の中に入ること一年なれば、即ち輕舉せん。若し人間に在らば之を地仙と稱す、妄りに人に傳ふるなかれ。
 兩儀子の「餌銷黄金法」は、猪負、革肪三斤、醇苦酒一斗の中に、黄金五兩を置きて、之を煎じ、金を以て肪中に入らせしむること百回、苦酒も亦此の如くす。一斤の金を食へば、壽は天地に同じ、半斤を食へば二千歳、五兩ならば千二百歳を得。王相の日を以て、之を作れば、神良なり。人に傳ふる勿れ、若し傳ふれば、藥成るも神ならざるなり。

三尸を去るの藥を食はんとせば、當に丹砂を服すべし、其の法は丹砂一斤を擣きて、篩にかけ、和

するに醉苦酒三升、淳漆一斤を以てし、微火にて之を煎じて、丸薬となす。麻實ほどの分量三丸を、一日二回服すれば、腹中の百病愈えて、三戸去る。百日の後には、肌骨堅強、千日の後には、司命の神は、死籍よりその人の名を削り去りて、天地日月と壽を同じくす。形を改め容を易へて、變化常なく、日中と雖も影なくして、別に光あり。

以上譯載の「抱朴子」によつて「仙薬」とは如何なるものを指すか、大略了解されたと思ふ。その効果の如何は、私の保證する限りでない。各自の工風に待つものである。

其四 素女經で教へた秘薬

1 秘薬に關し著者より注意

これから、支那に於ける房經圖典に記載されたる秘薬を擧げることにする。記述の順序は、先づ一書を一項として、その中に掲げられたる藥品を、その儘に羅列する。

茲に遺憾とするのは、これを詳記することが出来ないことである。本書は「歴史篇」と「秘術篇」を主としたので、これに全編の大部分を要した。また秘術と密接の關係ある「金丹」及び「仙薬」に就ても、一通り掲載せねば徹底せぬので、これにも全編の七分の一を割愛してしまつた。さうすると、經典に教へられたる秘薬と、現に實用されて居る秘薬を述ぶるのに、僅に五十頁を剩すに過ぎなくなつた。

此種の秘薬を細かく解説するには、少なくとも五百頁くらゐを要する。そこで本書では其の主要を述べて置いて、稿を改め、本書の姉妹篇として別に一書を刊行したい。私には「支那の珍薬秘薬」といふ小著があるが、これは支那風物研究會の會員にのみ配布したので、一般には知られてない。これが再版を頻りとすゝめられて居るので、これを補訂したいと思つて居る。本書で物足らぬ同好の士は、豫め著者に住所氏名を御知らせ願つて置けば、この珍書出版と共に速に通知することにした。

もう一つ斷つて置きたいのは、これから掲げる秘薬は、私が一々實驗を済したものであるから、絶對保證はできぬ。しかし支那で數千年間、實際に用ゐられたものであるから、間違はないと思ふ。私の見聞によつて、確實保證し得るものは、特に附記して置く。それとこの記述には責任を以て、支

斗乘	乘	石	斛	斗	升	合	龠	勺
	(十六斛)	(二斛)	(五斗)	(十升)	(十合)	(二龠)	(五勺)	(一)
	(英)	(英)	(佛)	(獨)				
	百三十三磅三分一	六十キログムラ四百五十三グラム	百二十フランドト二十七ノイロトトクント八					
	約我四石三斗八升四合	約我五斗四升合	約我二斗七升四合	約我五升四合八勺	約我五合四勺八才	約我五勺五才	約我二勺七才	約我五才

那に於ける藥品、祕藥に就ては、出來得るだけの相談に應ずる。しかし私は、讀書生であるから、利益で結びつけられることだけ御断りして、飽迄も研究奉仕をしたいのである。以下、掲出する藥品の數量は、原書の儘記載するが、これを日本の數量と比較すると次の如くなる。これを現代公用のメートル法にしたいが、未だ普及されて間もないことであるから、便宜舊度量衡に據つた。

衡量	擔(担)	斤	兩	錢	分	厘	毫
	Picul	Catty	Tael	Maoe	Canlaren	Mill	Hair
	(一百斤)	(十六兩)	(十錢)	(十分)	(十厘)	(十毫)	
	約我十六貫百二十七匁	約我百六十一匁二分七厘	約我十匁八厘	約我一匁八毛	約我一分一毛	約我一厘	約我一毛
清英(佛)	(獨)						
	通商條約第四款に規定せるもの						